

奇譚クラス

画集・白と黒のコンビネーション
絵物語・仮借なき凌辱



清夏増大号

奇譚クラス

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenmeiya

Osaka Japan



LEM. 2805

悦特 No. 5

「悦虐小説と緊縛写真」特集

臨時増刊・限定版

厳選悦虐小説集

一 換の花……片矢 驚
青色の螢光燈……川田 進
植民地加虐秘史
ベンガル地獄……川野 京輔
夕暮の窓辺……古川 裕子
北国湯場哀話……吉野 朝夫
国際スパイ団監房……野中 愛三
実説 白木屋お胸……川野 京輔
氣遣にされた令嬢……飛田 良二

現代緊縛風景百二十態

新星のまたたき……春丘 リル
苦痛への迎撃……網川 文代
罪なき女囚……大塚 啓子
黒蛇の獲物……網川 文代
格子なき監房……愛川 悦子
感謝の眼差……館 典子
幽艶なる受刑……花坂 道子
鼓譟の反抗……大塚 啓子



好評裡に発刊!! 注文殺到 定価三百円 (特五)

四馬孝・責画集

美女の鼻……網川 文代
奥の奥……大塚 啓子
小体のカンヴァス……大塚 啓子
女小舟の中……大塚 啓子
女の顔は……大塚 啓子

忘年会奇譚……白金 紅次
悲風刺青談……若 広志
車中汚辱……九鬼 麻里
愛恋の日に……古川 裕子
灸点三昧……長谷川 清
続・半公刑脱走囚……藤原 咲恵
縛恋(はくれん)……草薙 久人
夏子抄(「罪ある女」の日記)……桜井京一郎



奇譚クラブ臨時増刊号
悦虐小説と緊縛写真 特集号
定価 各一部 三百円 (特五)

第一集 緊縛女体特集 略号(悦特第一)
第二集 悶悦姿態特選 略号(悦特第二)
第三集 嵐を慕う蝶 略号(悦特第三)
第四集 拘束美態特集 略号(悦特第四)
第五集 緊縛風景120態 略号(悦特第五)

本誌特号の女体緊縛写真と四馬孝画の緊縛画が、ずらりと各集順に拘束を脱ぎ捨てて掲載されています。ぎゅっちりと詰った悦虐のむせかえる妖しい雰囲気と共に、どうかその快味を満喫して下さいます。

限定版特別号 第三弾

「緊縛写真グラフ集」

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラビア印刷

画題「縛り人形」 網川文代 花坂道子

くどくどと宣伝文句を並べたて
るまでもなく、全巻これ縛られた
美女の犯差です。門外漢はいざ知
らず好事家は必ずやその価値を見
出して下さると思います。自
信を以てお贈りするこの限定版を
どうか手にとって、心ゆくまで鑑
賞して下さい。

◎豪華な内容とモデル陣

巻頭裸身緊縛一頁大扉
ながしめ……網川文代
荒縄全裸緊縛……大塚啓子
落ちた腰巻九態(野外)
円い乳房……愛川悦子
浴室におびえて九態……愛川悦子
縛の陶酔……網川文代
恍惚境 悦虐の末……網川文代
いためられた乳房……桜井葉子
耐えられる……桜井葉子
月経痛の強制 二態……大塚啓子
手吊りと逆手吊り五態……大塚啓子
全裸悦虐……大塚啓子
白痴美の誘惑……大塚啓子
はねかえす縄……大塚啓子
うろうろして……大塚啓子
雪白の肌は縄にまみれて
六態……大塚啓子
優姿ハダカ縛り……網川文代

忘却の彼方……網川文代

股間縛り背正面二態……網川文代
捕われの麗人二態……網川文代
湯責め二態……大塚啓子
浴室にて責める四態……大塚啓子
何にしようと言ふの……桜井葉子
新人媚態集八景……桜井葉子
いじめめく二態……網川文代
メンスバンドの狼煙……網川文代
観念横臥の囚二態……網川文代
変形手足しばり四態……愛川悦子
裸身をさらして六態……愛川悦子
豊満くらべ 九態……桜井葉子
亀甲縛り正背面二態……愛川悦子
怒めしき罫目二態……大塚啓子
後手首腰縛 四態……大塚啓子
新人緊縛ポーズ集六態……桜井葉子
隔から隔まで 4態……愛川悦子
鏡面万華鏡模裏と表……愛川悦子
四十項目 百十五ポーズ



限定版特別号 第三弾



奇譚クラブ

清 増 大 号
 復刊第六十四号八月号

目次

綾物語「仮借なき凌辱」

綾物 紀世・寒
 浦 れい子・画

○ 恋人の捕われた哀れな姿

○ 吊られて揺り賣めにあう

○ 大の字縛りにあう美登利

○ 逆さ吊りの煙草賣め

○ 灸責めに悶える眼前の恋人

款 画「少女王国男性族を破る」 南村 俊平・画

四馬季画集「白と黒とコンビネーション」 四馬 季・画

○ 恐怖の電気椅子

○ 縄のさるくつわ

○ 迫りくる洗腸器

○ 大小屋のあるじ

「マゾブレイ」より 人間馬への馴致

男性驚愕 追刺に關われた青年

外誌紹介 鞭を持つ女「Petite・Face・No1」より

自動腎打機構

切腹画 切腹曼陀羅図絵

洋画にあがられたマゾ・シーン二篇

東和提供「巨人ゴーレム」

米映画「悪名不詳」

四馬季傑作集 駢 馬（しめりめ） 四馬 季・画

葉子ちゃんの立木とまり

指導 辻村 隆

緊縛写真撮影風景

モデル 板井 葉子

落ちそうなバンティ

指導 四馬 季

無理強いと軽い拒否

モデル 若原 明子

青い囚衣の女

モデル 絹川 文代

落花狼藉

モデル 津川 路子

喰い込む縄

モデル 杉江美津子

響と煙燭

モデル 大塚 啓子

松樹を中心としたスナッフ

モデル 坂井 葉子

あかく捕われびと

モデル 絹川 文代

緊縛モデル「絹川文代論」

小林 清 44

告白 女装の楽しみ

比良野 裕 50

告白小説 愛犬譚

蘭野 秋子 52

サティズム映画雑誌感

相原伊佐夫 66

創作 被虐のシルエット

綾・夜は知っている

切腹奇談ある復讐

千草 忠夫 68

綾物・迷離 和装古典下着あられこれ

牧 高志 78

淫刑事捜査ノート 裸祭

横村 泰 86

マゾヒズム百景

馬場 好男 102

時代サド小説 狼谷の魔女

塔場 十郎 104

告白 由紀子の手記

上原由紀子 118

愛好者の記録

松井 頼子 124

告白手記 遠い昔に夢を求めて

山本 節夫 126

ファンタジア・マゾヒスティカ

倉仁 成人 134

マゾ通信 「或る女優の美馬日記」について

萩市湯之次 138

サド小説「白と黒」

山田久仁子 140

体験記 切腹レポート

東山 映史 148

映画通信 初夏の時代劇映画特リシーン

三条 卓史 150

創作「晩鐘」

内田 武男 152

告白 白ふんどし奇譚

内田 武男 162

マゾ通信 象の思い出

佐治 麻造 166

連載小説 宇宙のどこかで

兵頭 庫一 168

想 女性衣裳の魅惑

綾 紀世 177

編集つれづれ草 私の編集ノートより

編 集 子 178

綾物語「濡れい子」 仮借なき凌辱

綾物 紀世 182

連載第三次元小説「影の国」

雪俊 遙 184

再映画化された「痴人の愛」

馬場 好男 194

懸賞読者募集原稿入選作品

水見 龍也 196

零の舞踏会

春村 玲子 204

流転マニアの奇問 疑問

雪崎 京人 208

口 絵

恐怖の電気椅子
 迫りくる洗腸器
 縄のさるくつわ
 大小屋のあるじ
 人間馬への馴致
 切腹曼陀羅図絵
 洋画にあがられたマゾ・シーン二篇
 東和提供「巨人ゴーレム」
 米映画「悪名不詳」
 四馬季傑作集 駢 馬（しめりめ） 四馬 季・画

グラビヤ・フォト

葉子ちゃんの立木とまり
 緊縛写真撮影風景
 落ちそうなバンティ
 無理強いと軽い拒否
 青い囚衣の女
 落花狼藉
 喰い込む縄
 響と煙燭
 松樹を中心としたスナッフ
 あかく捕われびと
 緊縛モデル「絹川文代論」
 告白 女装の楽しみ
 告白小説 愛犬譚
 サティズム映画雑誌感
 創作 被虐のシルエット
 切腹奇談ある復讐
 綾物・迷離 和装古典下着あられこれ
 淫刑事捜査ノート 裸祭
 マゾヒズム百景
 時代サド小説 狼谷の魔女
 告白 由紀子の手記
 愛好者の記録
 告白手記 遠い昔に夢を求めて
 ファンタジア・マゾヒスティカ
 マゾ通信 「或る女優の美馬日記」について
 サド小説「白と黒」
 体験記 切腹レポート
 映画通信 初夏の時代劇映画特リシーン
 創作「晩鐘」
 告白 白ふんどし奇譚
 マゾ通信 象の思い出
 連載小説 宇宙のどこかで
 想 女性衣裳の魅惑
 編集つれづれ草 私の編集ノートより
 綾物語「濡れい子」 仮借なき凌辱
 連載第三次元小説「影の国」
 再映画化された「痴人の愛」
 懸賞読者募集原稿入選作品
 零の舞踏会
 流転マニアの奇問 疑問
 風威記 女相撲と女斗美
 乗馬ズボン断腸 燃ゆる男裝
 マゾヒチック 花の男責
 アラカルト 花の男責
 沼正三だよりと雑報欄
 読者通信

千草 忠夫 68
 上山 美路 78
 牧 高志 86
 横村 泰 92
 馬場 好男 102
 塔場 十郎 104
 上原由紀子 118
 松井 頼子 124
 山本 節夫 126
 倉仁 成人 134
 萩市湯之次 138
 山田久仁子 140
 東山 映史 148
 三条 卓史 150
 内田 武男 152
 佐治 麻造 166
 兵頭 庫一 168
 綾 紀世 177
 編 集 子 178
 綾物 紀世 182
 雪俊 遙 184
 馬場 好男 194
 水見 龍也 196
 春村 玲子 204
 雪崎 京人 208
 山 秀緒 212
 良太 214
 正三 218
 沼正三 220

風流草紙

佐保 刃心作
淹れい子画

石うすも
膝にのせれば



は



はからずも
気をゆるしたか

に



日本髪
長襦袢から
のぞく足

は



細い紐
太い縄など

と

戸のすき間
若い女の
うめき
声

へ

美女人
部屋中を
ちらかして
いて



ろ



火を消させ
ぬが
こころ
なり

絵物語

仮借なき凌辱

嵯峨紀世・案
滝れい子・画

襲われたアベック 美登利と毅は公園の暗闇で突然三人の暴漢に襲われた。



恋人の捕れた哀れな姿

毅は顎に手をかけて起されると無理矢理、目の前を見せつけられた。そこには恋人の縛られた哀れな姿があつた。



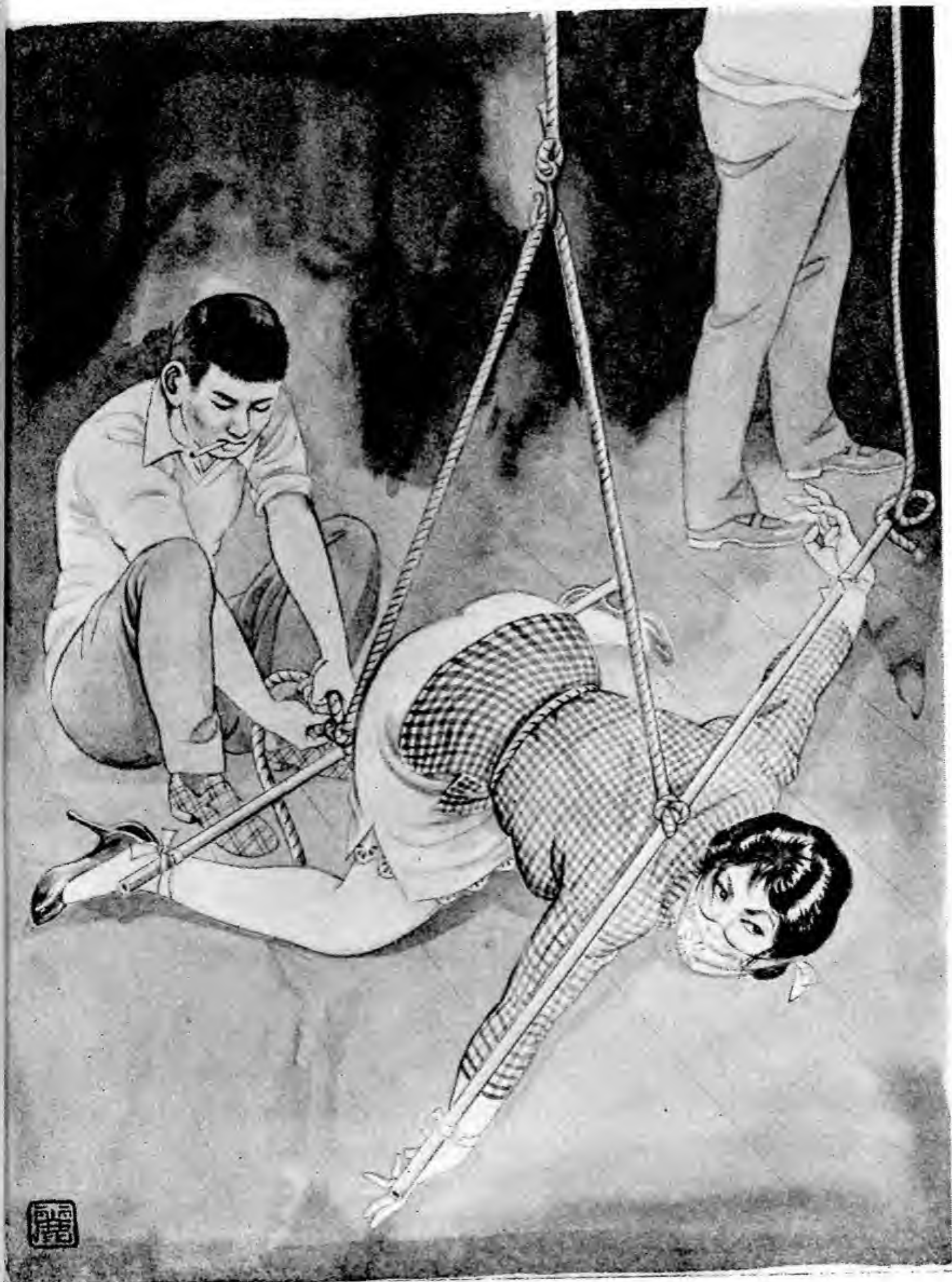
吊られて搦り責めにあう

吊り下げられた美登利は、男達のために竹の棒で背中を搦られたり頬をこずかれたりして弄られるのであつた。



大の字縛りにあう美登利

一米以上もある長い棒二本に、手と足を大の字に開いて両手首と両足首をそれぞれ別々に括りつけられた。



逆さ吊りの煙草責め

足を開げて逆さ吊りにされた美登利の鼻の穴へ火のついた煙草が挿し込まれた。
もうもうたる煙が顔をおおう。



灸責めに悶える眼前の恋人

膝の上に拇指大のモグサが置かれて線香の火がつけられた。ジリジリと熱さが肌をとおして太股から全身へ伝つてゆく。



捕虜引見

「これが捕われてきた男性族の勇士か、存分に糺明して、生き残りの隠れ家を白状させ皆殺しにせよ」

間諜拷問

「白状さえすれば、お前の命だけは助けてやる。そうして一生女性軍の奴隷として、使ってやるから有難く思え」



恐怖の電気椅子 (白と黒とのコンビネーション)

スイッチを入れると、お前の全身に百ボルトの電流がビリッと流れるのだぞ。どうだ、お嬢さん、恐くないかね。この俺様のこの悪謀がね。

<四馬 孝・画>



縄のさるぐつわ（白と黒とのコンビネーション）

何度言ったら俺の言うことが素直に聞けるようになるんだ。それが聞けるまでは、
こうして置いてやるから、ゆっくりと考えるんだナ。　　＜四馬 孝・画＞



迫りくる浣腸器 (白と黒とのコンビネーション)

男の手にした50ccの太い浣腸器は、おるおるとふるえながら徐々に女に近づいてくる。「あゝ、助けて！」女は身も世もあらぬ悲鳴を挙げた。

<四馬 孝・画>



犬小屋のあるじ (白と黒とのコンビネーション)

「丁度お前さんが入れるように作った犬小屋なんだ。」 哀れな女は、裸に剥かれて小屋の外の杭につながれている。猿ぐつわで物も言えずに。

<四馬 孝・画>





〔マゾ・プレイのワンカット〕より 人間馬への馴致



男性緊縛 追剥に襲われた青年

〔鞭を持つ女〕 “Bettie Page” No.1ヨリ



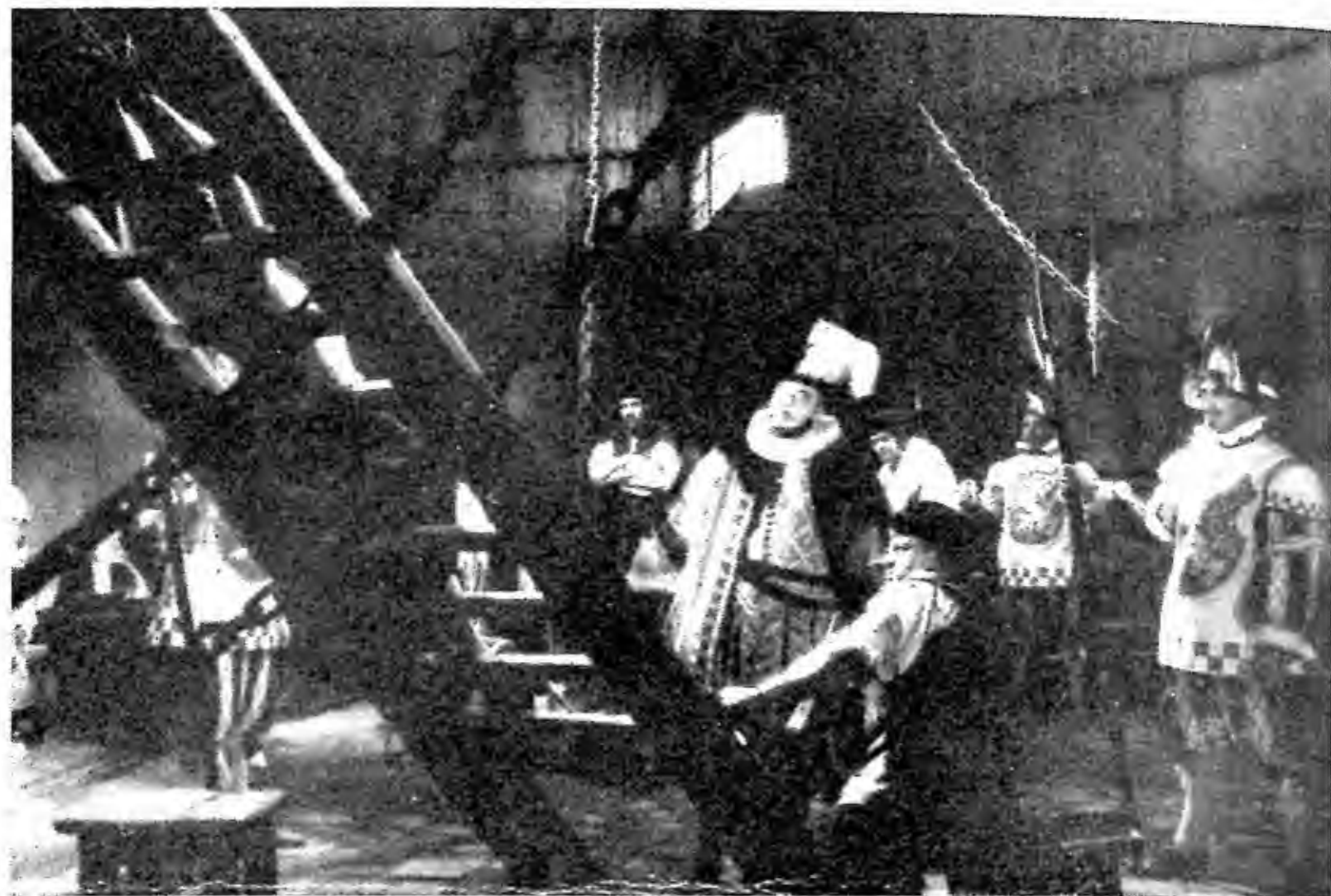
自動臂打機構 スイッチを入れるとモーターが回って、尻を叩くようになってるのが面白い。

切^{セツ}腹^{ブク}曼^{マン}陀^ダ羅^ラ図^ズ絵^エ

焼けつくような苦痛と歓喜の交錯した不思議な陶醉に身をひたして二人はじっと動かなかった。二人の波のように喘えぐ下腹に血の橋をかけたように短刀は深々と突刺っている。血が脂ではじけながら二人の下腹をどろどろに色どり、鋼鉄の刃は腹の中で固く感じられ、二人のどちらかの切口が苦痛に痙攣するのにつれて、ピクピクと生あるもののよう動いて又血を吐き出した。（本誌29年8月号・法谷四郎作「切腹曼陀羅図絵」より）



洋画にあらわれたマゾ・シーン 二題



東和提供 「巨人ゴーレム」 伸し責めにあう拷問シーン



米映画 「題名不詳」 マレーネ・ディートリッヒ主演

駿 (しゅんめ) 馬

四馬 孝・画

足の指先に全身の力をこめて身体を支えていた。足先が床を離れるや、上半身は前へ倒れて宙ぶらりんになってしまうのだ。



葉子ちゃんの立木とまり

辻村隆
構成指導



モデル
櫻井葉子



緊縛写真撮影風景

新人モデル若原明子さんにポーズをつける四馬孝氏

頭をもう少しこういう風に曲げて



「口を開けて」と言われた若原明子さん



これでいいかしら?





モデル
若原明子



鼻に對する責
顔面表情の變化

落ちそう
なパン
ティ
イ

花模様のパンティに二つの重りがつけられると



モデル
絹川文代

もがけばもがく程次第次第にずり下ってゆく





あら、この私を
どうしようって
いうのよ……



いやだワ、そんなこと
私にはできやしないワ……

無理強いと軽い拒否

—新妻遊戯の想定から—

だって、あなたが
やっただけじゃないの。



あなたにしてみれば、
やっただけじゃないの。



青い囚衣の女

モデル 津川路子





喰い込む縄

モデル 大塚啓子



縛くわ口くち

と

蠟ろう

燭そく

モデル

櫻井葉子



松樹を中心とした
スナツプ

モデル 絹川文代





あがく捕われびと

モデル 絹川文代



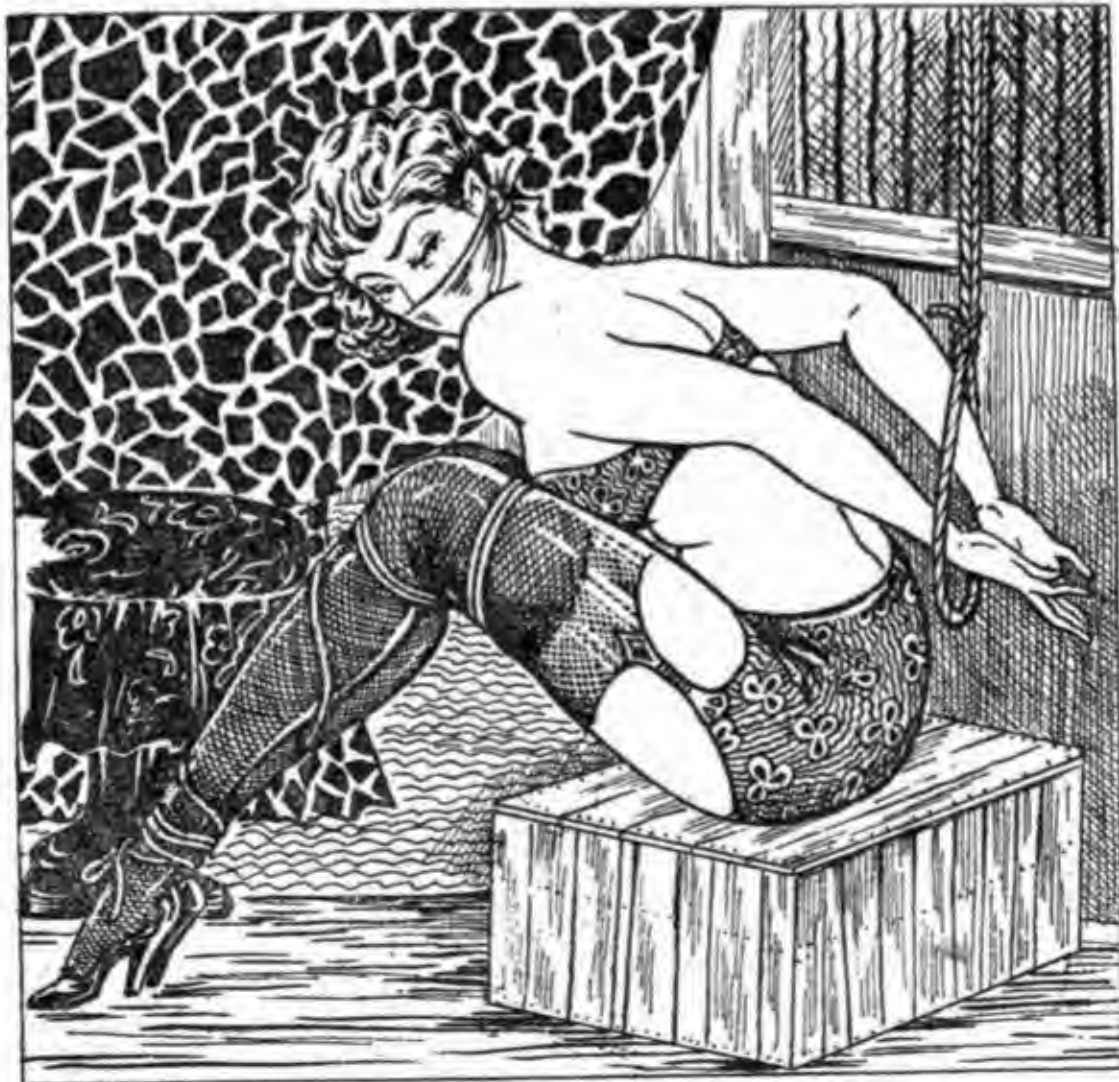
新しい文献研究誌

奇譚クラブ

清夏増大号

1960年 8月 号

(第十四卷 第十二号 通刊第四百四十四号)





緊縛モデル

絹川文代論

小林 清

奇クの発展は、モデルさんともにあるといっても、いいすぎではないであろう。そこで私は、そのモデルさんの中心人物の一人である絹川さんにスポットを当てて、少し書いてみたい。

本論に入る前に、先ず、奇クが創刊十年を超えたことは、奇クのレーゾン・デートル（存在価値）が立派に認められたことを意味するとともに、さらに特に、今から恰度、八年前の昭和二十七年の五月を期して斯界にエポックを劃する大胆な新分野に踏み込まれて、その後、幾星霜、営々として、ついに今日不動の地歩を築かれたことは、まことに驚歎すべき事実であって、恐らくは世界にもその類例がまれな程の業績ではあるまいか。そして、その成功の原因は何処にあったのであろうか。

私が思うのに、その成功の秘密は、大きくいって次の四つに帰することができると思う。

第一に狙いがよかったこと。人々の心の奥底深くひそむ、ひそやかな感情をズバリ見事につかまえ？ これらのもどかしがる心に共

通の広場を与えたこと。そして、更に、眠っている潜在意識に対しては、これを揺さぶり、呼び醒すなどの反応を越えさせつつ、これらは両者互いに因となり果となって、読む者に共鳴と共感を博することになったこと。

第二に、真面目に節度を守って来たこと。この世界は、兎角、世人から色眼鏡で見られ勝ちのものだけに、節度を保つことが特に大切であろう。その場の、また一部の不満はあっても、露骨な表現を抑え、行き過ぎをしなかったところに、奇クが永続している一因がある。読者から、しばしば他誌はもっと露骨な表現をしているとの苦情が寄せられる趣であるが、実はその点にこそ奇クの泡沫雑誌と異なる特色がある。

第三に、美の追求に主眼を置いてきたこと。緊縛に関連して、責め折檻、拷問の類いも味付けないしアクセサリーとしては必要であろうし、また、ときに大いにその効果を發揮することは疑いのないところであり、更に時としては、エロや、グロがかった怪奇趣味さえ薬味としてはよいこともある。しかし、これらのものは、本来麻薬的要素を含んでいるらしく、刺激を段々強くしないと効力が薄れるものであり、従って、これに主眼を置くと、ずるずると泥沼にはまり込むおそれが多分にあるし、そこまで行かないとしても、第一、責めとかグロとかを余り前面に押し出されては、大多数の読者は辟易するであろう。この種のものは、一年に一度位は兎も角として到底、毎月、楽しもうなどという代物でないことは確実である。むごたらしいもの、暗いもの、陰惨なものは、一時の好奇でのぞいてはみても、決して引続いて度々見たいものではあるまい。その点奇クが健康な『緊縛美』の発見とその追求という道幅は広くないか

も知れないが、たしかな道を切り拓いて来られたことに、実は奇ク発展の最大のカギがあったと思われる。毎月、読者が奇クを待ち兼ねるのも、本人が意識するとしなないは別として、この緊縛美への憧れが最大の要素であろう。

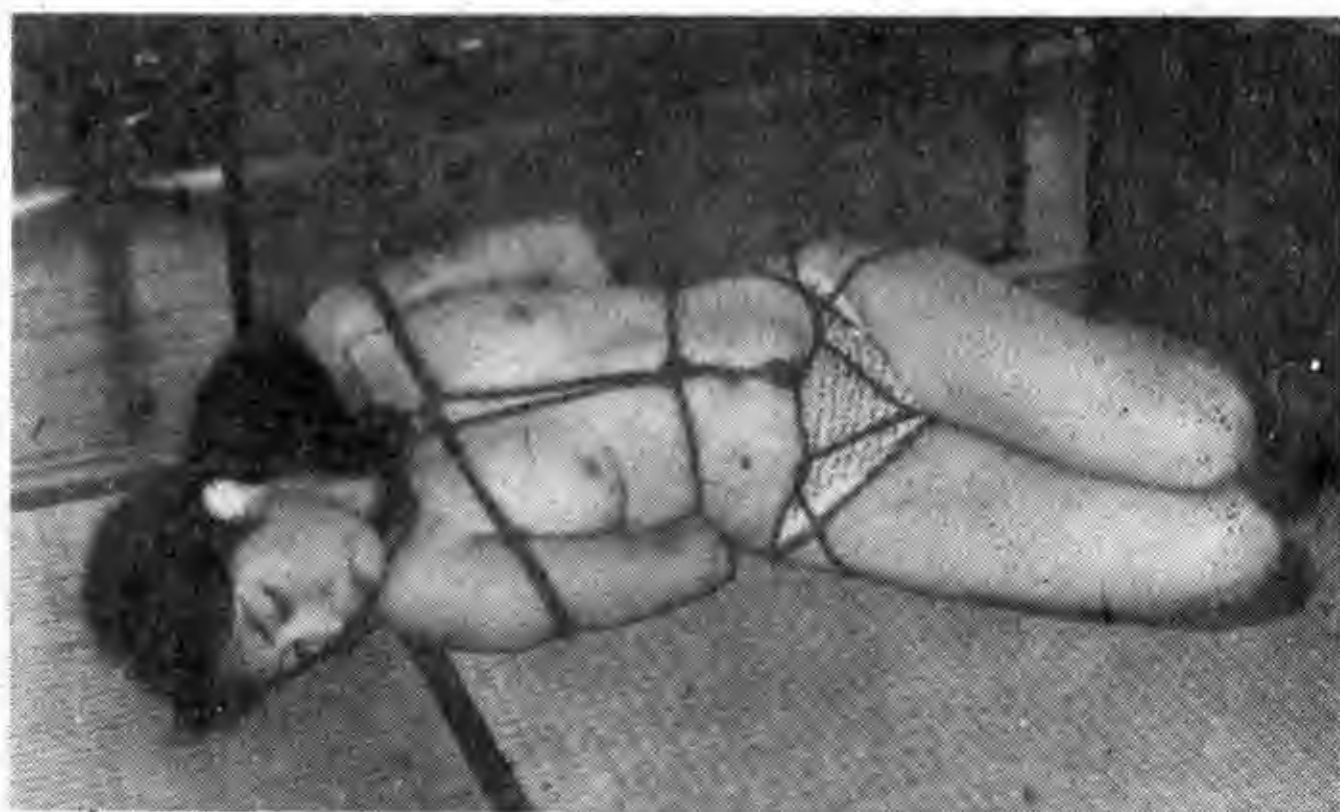
第四に、あげなくてはならないことは、読者とのつながりの強さである。このことは、私が兎や角いうまでもなく、毎月の読者欄の盛況をみれば一目で分るところであろう。事実、自分の書いたものが活字になって載るといふことは大きな喜びであり、そのことが、奇クを読者にグッと引き寄せることに役立っているのであるが、投稿しない人にとっても、自分と同好、同類の士の似たような心境についての投稿をみることによって、奇クが与えられたものというよ



り、自分達のものという気がするものであろう。このことは他の記事についてもいえることであって、奇クの寄稿者の多くは、他のあちこちの雑誌に文を売る所謂、文筆専門の人というよりも、どちらかという素人というか、自分の体験なり心境なりを主として、奇クを通じて同好の志と交歓し共鳴を図りたいという種類の人が比較的、多いのではあるまいか。もしそうだとするならば、そのことが一層、奇クと読者とのつながりを強くしている。いわば、奇クはモデルさんのみならず、読者をも固く緊縛しているというべきであって、その手腕は仲々凡ならざるものと舌を巻かなくてはならない。それはさておき、これらのことよりも更になお重要なことは、モデルさんの占める地位である。奇クには毎月、絹川さん、大塚さん、愛川さん、花坂さん……という風にお馴染のモデルさんが活躍する。読者は恰度、映画のファンのように、モデルさんの写真を持ち兼ねる。更に、顔や姿だけでは満足しないで、絹川さんの手の指や足の指はどんな恰好しているのだろう。愛川さんの乳房は美しい……という風に身体の隅々迄知りたいという気持が熱烈になってくる。どんな生活をしているのだろう——日本人の悪いくせで余計なことではあろうが——そんなことまで考え出す。このことが、実は奇クと読者とを更に強く結び付けて離れられないものになっている大きな要素である。モデルさんを固定して（これは或程度、当然そうなるとしても）、しかも写真には必らずモデル嬢の名前を出したことは、親近感を深めるうえに大成功であった。

さて、肝腎の絹川文代論の前置きが大分長くなってしまったけれども、要はモデルさんの奇クに占める地位というものを総合的に浮き彫りにするための、いわば必要な道草であったこととお許しいた

だきたい。奇クを入手すると待ち兼ねて写真を繰るのが何んといっても凡ゆる読者第一の仕事であらうし、店頭で購入する人にしても、先ず写真をめくって気に入ったのがあれば買うというのが大部分であらう。その次に目が行くのは読者欄という人が一番多いのではなかろうか。何れにしても奇クの屋台骨は写真にあり、それを支えるものはモデルさんであるといっても全くのいいすぎではない位である。それ故に私は、最初に奇クはモデルさんとともに栄えてきたといった次第である。





さて、絹川文代さんは、私の記憶に誤りがないとすれば、今から恰度、二年前にその麗姿を現わして以来、モデルさんの主流としてメキメキ頭角をあらわして、今では押しも押されもしない存在になつてしまった。

彼女の武器と資産は何か。まず、その美貌と均勢のとれた姿態であらう。整った瓜実顔と鈴を張ったような大きな目が先ず見る人を魅きつける。乳房はそれ程大きくはないが、上下を紐で括られるとキュッと盛り上がる量感には事欠かないし、股から下の脚線はスラリとのびて足首に至り、盛り上った足の甲、その足先にはやや角型

(拇指について)でペティキュアされた十個の足の爪が桜貝のように輝いている。手指の爪は可成り伸して、これまた美しくマニキュアされている。強いて難をいうならば、横からみた口許が少しくずれていることで、従つて絹川さんを撮るには正面からか、さるぐつわをかませる方がよいのであらうか。

御本人の手記(三十五年四月号、五月号)によると、東京生れ、両親も兄弟もない天涯の一人暮らし、長い髪の毛を赤く染めて、アイシャドウにツケ眉毛、手足の爪も真赤に染めて、これがかえつて保護色となり、こんな女なら凄いやが三、四人もついているだろうと街のヨタ者も尻込み、かえつて安全。一番の憧れは、昔なら、さしあたり清水の次郎長か国定忠次のような大親分の姐御となつて、くわえ煙草で若い者をアゴで使つてやることよ。現代だったら、裕ちゃんばりの街の愚連隊の情婦というところかしら。とにかく、背広を着こなしたサラリーマンタイプには、わたしの性に合いそうもありません。誰かこんなわたしをパトツテくれないかしらと考えているんだけど、「キミだったら凄く金がかかるだろう」って、はじめからこわがつて話しにならないの。私って、そんな見かけのような浪費家じゃないんですが、どうも信用ないんですのね……とある。愉快ではないか。(ここで私は図らずも益田房子嬢のことを思い出した。この頃余りお目にかからず残念であるが、恰度この絹川姐御の鉄火の手記と正反対の感じを受ける可憐なものの益田さん、再びその麗姿を望むことは不可能なのであらうか。)絹川姐御からは今後も引続いて、緊

縛を受けるときの感想とか、また、編集子からみた「絹川姐御感」など伺いたいものである。

絹川姐御については一時、表情に乏しいとか、投げやりの態度が見られるとかいう批判を耳にしたことがあり、私も当時たしかに同感だったが今度絹川さん論を書くについで今迄の写真を当って見たところ、この批判は少し酷であることが分った。要するに絹川姐御は不馴れだったのである。一口に顔の表情といっても、

苦しみ、悲しみ、歎き、哀れさ、観念、あきらめ、絶望、楽しさ、喜び、恍惚等々そのどれ一つをとってもそう簡単なものではない筈である。況して、顔だけでなく、姿態、手指、足指など隅々にまで気を配って充分な表情を出す段になると、一朝一夕でうまく出来るはずがない。そのうえ、表情云々ということになると、その写真が余り小さくてはダメだし、印刷も鮮明でなくてはならないし、さらに、写す方のシャッター・チャンス把握の問題もある。俳優になると、一分間位同じ笑顔をつくれる人がいるとのことであるが、こんなことは望めないし、第一そのようにつくったものよりも、緊縛の場合は、自然の瞬間によりよいシャッター・チャンスがあるも



のであろう。そうすると表情も、モデルと写す人と印刷の三位一体になってはじめてよいものが生れるわけである。

それは兎に角、絹川姐御も初期のうちには、縛られて笑っていたりポカンとしていたり、キョトンとしていたり、全くの無表情だったり、何れにしても表情に乏しかったことは事実である。しかし、この頃では、漸く表情は豊かに、撮影者との呼吸も合い、印刷も鮮明大型のものも出て、効果が上りつつあるようである。

絹姐御の作品から拾ってみると

最近の限定版「女体緊縛グラフィック」の第十頁（二頁大）、ベッドに座り、髪を振り乱し、さるぐつわ、やや仰向けに薄目を開いた表情。この薄目をあけて観念した表情は、こんな場面を思わせる。牢屋の中で数々の拷問を受けた絹川姐御は、ついに死刑執行となり、牢屋から刑場に引出され、ここで囚衣を脱がされて、あらためて後手に緊縛を受け、正にこれから絞首台に運ばれようというときの表情であり、悲しみとあきらめと更に恍惚感さえ織り交った絶妙の作品である。髪の流れもこれがギリギリで、これ以上になると、むごたらしくグロになってしまうであろう。十一頁（二頁大）、右に似て、ただ目はうらめし気に右下方を睨んでいる。ともに乳房も豊か



にくびれて息づいている。十八頁（一頁大）、獵人に撃ちとられた女鹿のように、両手足を括られて天井から吊り下げられている。十九頁上は、後ろ手足を天井から吊られている。特に、同頁下図では縄が段々引上げられるので、尻の部分がもち上がり、上体を右によりりながら、左足指をくの字に曲げて、五本の右足指はやや開き気味、手の指は折り曲げ口を開いて苦悶の情景。二十頁上は十九頁の下と同じであるが、天井の縄はなおも無情に吊り上げられるので左足指をますますくの字に、体を一そうよじって、顔を縄の方に向けて救いを求めているところ。下図は、先程の獲物の形で、なおも上に吊られるので、体を円く折り曲げ、両手は思わず縄をしっかり握

って少しでも縄の抵抗を少くしようと必死の抵抗を試みている図。三十頁（一頁大）、背面、股間しぼり、右手は虚空を掴む。三十一頁（一頁大）、正面立膝、一種凄味のある美しさ。拷問を終えて地下の密室から引出されたといった情景。四十二頁（一頁大）、男の手で髪を握まれ、顔を仰向けにされるところ。四十三頁（一頁大）、同じく横座り、大きな目がうるんでいる。四十四頁（一頁大）、男の手で顔を仰向けにされる。両足を左右に開いて座り、観念の眼を閉じる。四十五頁上、横臥の体をくの字に括られ、尻のあたりを男の足で踏まれている。この絹川さんの表情は、そのままでは一寸分らないが、写真を九十度回転して左側を下にして見ると、まことに面白いことを発見する。猫にくわえて来られた鼠が未だ死に切れず猫に弄ばれているときに恰度このような表情になるのではないかと思われるような素晴らしい被虐的表情である。

「大親分の姐御になって、くわえ煙草で若い者をアゴで使ってやることよ」が御希望の絹川姐御の、これはまた、しおらしい表情のことよ。さて、誌面の都合もあるし、また、一つ言及する必要もないことなので、あとは私の印象に強く残っているものについて、簡単に触れることにしたい。

三十四年六月発行の悦特第二集の『美囚第十四号』二一葉これは数ある絹川さんの作品のうちで、代表作の一つである。囚われの悲しみという表情がよく現れている。この作品については、以前に誰方かが可成り詳しく触れておられたので、詳細は略す。

『三十四年十一月発行の、臨時増刊号S特第三集の『華鼻受難』これは鼻をクリップで挟まれ、鼻の穴にタバコを挿入さ



【告 白】

女 装 の 楽 し み

比 良 野

裕

れたりしているものであるが、少しのイヤ味もなく、美しい写真である。私は今迄鼻に興味を感じたことはなかったが、この写真を見てからは、鼻というものを見直した。従来も奇クに鼻の記事は時々載っていたが格別読むこともしなかった。しかし、この『華鼻受難』の美しい写真をみてからは、開眼されたようである。私は、この文章のはじめに「奇クが人々の心にひそむもどかしがる心に共通の広場を与えるとともに、さらに、眠っている潜在意識まで呼び醒す……」といったのはこれらのことを指しているのである。このことは、実は大事なことである。鼻に限らず他の身体の部分や事柄についても、このことがいえるのではないか。今まで大して興味も関心も持っていなかった身体の部分（例えば鼻とか手とか足の指とか乳房とか）について、奇クの美しい写真を見て以来、新たな関心を持ち出したということは十分ありうることであり、また、この種の新しい分野を開拓して新しい読者層を拡げて行くことが、今後の奇クを更に盛大にする一つの鍵ではなからうか。

・△この告白記は、人名等、多少、変えた点もありますが、略完全なノンフィクションであることを申添えます。V

同じ臨時増刊号のS特第三集で『スポット・ライト』六葉、うち二葉は絹川姐御の手の指や爪の型まで可成りはっきり分って十分、楽しめる。但し、足の写真の方はいただけない。（編集部註、この足の部分は誤って大塚啓子嬢のものが混入した。）

以上によって私は、絹川さんの表情が、二年間のうちに大変、豊かになって来た次第を、はっきり知った。今や絹川さんは初期の段階を過ぎて、中期の興隆、上昇時代にきたもので、顔の表情、手の表情、姿態等について可成りの進歩が認められる。さらにこの際、望むことは足先の表情までも気を配っていたきたいことである。外国の女優さんなどをみると、実に足指の表情まで豊かであることに驚く程である。日本でも、谷崎潤一郎の「富美子の足」の中に、「足が笑っている……」という表現があるが、たしかにそれだけの表情もあるのである。この点、奇クの発展のため、すみずみまでも気を配っていただくよう、絹川さんと、それから特に編集子の方々にお願いして本稿の結びとしよう。（終）

プロローグ

私は東京の下町に生まれ、当時、未だ残っていた江戸情緒の空気を吸って育ちました。父も母も厳格な家庭で、姉一人おりますが、年令が大変へだたっている一人で一人っ子のようには育ちました。そんなわけで、小学校の頃から温順しい方で、級友からいじめられ泣かされる、所謂「弱虫」でした。友達が兵隊ごっこや野球をするのに、いつも仲間外れにされ、女の子とままごとやあやとりをして遊ん

ではかりました。

小学校三年の頃、芝居につれて行かれましたが、美しく着飾ったお姫様が、大勢の腰元にかしずかれて川向うにある恋人の家に向って色々と所作をする有様や、そしてそのお姫様は両家の領地争いが原因で恋に破れ自害し腰元等の泣き悲しむ光景に魅せられました。

これは「妹背山婦女庭訓(吉野川の段)」であることを後で知りましたが、可憐なお姫様雛鳥や、みずみずしい腰元等が皆、男が演じていると聞いて驚きの目をみはりました。また新派の芝居でも「不如帰」の浪子や「金色夜叉」のお宮は、男の役者だということを知らず、自分も女の姿をして見たいという欲望が起つて来て、女の動作、口調をそつと真似することが屢々でした。たまたま、ある雑誌に「花柳章太郎が俳優になった頃の自伝」というような記事の載っているのを見つけ、胸をおどらせて読み耽りました。その中で、始めてかつらをかぶるとき、衣装をつける時の心境を書いたくだりは暗誦するくらい何度も読み返しました。そして自分も役者になりたい。もしなるなら新派の花柳のような女形になりたいと念願しておりました。

しかし私の家庭では、そんな志望は到底、許されるべくありません。世間と同じコースの中学へ進学させられました。中学生に入ってから美しい女学生や年上の和服の女性を

見ると、あんな姿をして街を歩いて見たいと思わぬことがあります。近所の小間物屋のショーウィンドウにかつらが陳列してあるのを知って、他人に見られぬように、こっそり、それを見に行き、幾度か「あれを買って被ったら、女になれるのだ」と思ったり将来、家人と別に生活するようになったら、何とかして女装して街を歩いて見ようと考えておりました。

赤い腰巻に魅せられる

中学二年の頃でした。隣家に若い奥さんが住んでいて、よく物干に赤い腰巻が干してありました。私は、あんな腰巻をして見たいという願望にかられることが一再でありました。若し夜になっても取込むのを忘れはしないか、そうしたら、そつと借りて腰に巻いて見たいものだとか、幾度か赤や桃色の腰巻を眺めていましたが、ついぞその様なことが起りませんでした。或る早春の晩のことです。真赤な都腰巻が物干場に干したままになっていて、その発見しました。もう八時過ぎなのに取込んでないのだから、忘れたのに相違ないと考え、静かに夜の更けるのを待っていました。九時過ぎても取り入れる様子がありません。赤い都腰巻は夜目にも鮮やかに静かに下っています。十時近く、周囲の音に気がつけ、早鐘を打つ胸をおさえ、ふるふる足で

屋根を伝わり、そつと隣の物干に忍び込みました。目的物の腰巻は目の前に下っていません。そつと竿を外し、ふるふるふるふる手で腰巻をつかむと、丸めて大急ぎで懐に入れしました。少し湿っているのが腰が冷たく感じました。奥さんは未だ乾かないので夜干をするつもりだったのでしょう。大急ぎでもと来た道を逃げ戻り、人目のつかぬ所まで来ると、下着を脱いで待望の腰巻をはきました。

心を落ちつけて、腰巻のはき心地を楽しむために夜道を歩きました。丁度その夜は不動様の縁日で夜店が出ていましたので、そのまま何食わぬ顔をして人込みの中を歩いて見ました。普段でしたら大股に歩いても差支ないのですが、今夜は着物の下に都腰巻をはいているので足が大きく開けません。無理に大足を伸ばせば、着物の裾から赤いものがチラチラ見えてしまいます。どうしても小股で歩くより仕方ありません。その気持は丁度、女の人が内股で歩くのと同じで、女性の気持を堪能しました。けれども人通りのない所では、ワザと大股に歩いて、裾から赤い腰巻がのぞくのを見て「あら、妾の腰巻はきれいなこと」と、ひとりごとをいって見ました。その夜は夢遊病者のように、あちこち、さまよい歩き、脚にまつわる都腰巻の毛糸の感触を心ゆくまで楽しみました。

(続く)

交錯する縄と鞭と鎖。美女と美少年の織りなすアブの世界

愛

犬

譚

扇 町 秋 子

私の最初の愛犬になったのは、み、の、ろ、と云う少年でした。色の白
い、大変可愛い顔立ちをした美少年で、家の近くの楽器店の息子で
した。十四、五の齡頃だった筈です。私は当時二十四歳、深見と言
う或る貿易会社の副社長に囲われて、謂うところの日蔭の女であつ
た訳です。深見はもう髪が真白で、私たちが並んで歩くと父娘のよ
うに見えたものです。実際、近所の御方たちは暫くは本当の父娘だ
と思っていたようです。くすぐったくて仕方がございませ
んでした。

深見は音楽に興味があつて、ヴァイオリンは素人の域を出、私に
もヴァイオリンの弾奏を稽古するように申して居りましたが、今

度、一軒の家に住むようになってから、是非にとすすめ、それで或
る日、二人して近くの楽器店へ参りまして、その時、その店で私は
み、の、ろ、を識った次第でした。

み、の、ろ、の店は私鉄電車の駅前であり、夕方になると葉山寺楽器店
と云う大きなネオン文字が辺りを明るくしている綺麗な店です。

硝子戸を開けて這入って来た私たちを見るなり「いらっしやいま
せ」と早速、椅子を起つて愛想を示した瞳の綺麗な美少年を、私は
此処の息子さんとは知らず、なんて上品で愛らしい店員さんだろう
と思ひ、顔に微笑がのほりました。

「ヴァイオリンが欲しいのだが。素人が練習するのだから、そう上
等ではなくてもいい」

深見が申しますと、

「こちらに色々ございます」

美少年は私たちを奥へ招じ、先ず腰掛を用意致しました。実にきびきびとした見えていて気持のよい態度です。

深見が、あれこれと手に取って調べだしますと、その専門的な知識に少年の店員は驚いた風で、これはかなわぬと思ったものか、

「お父さん、お客様」

と奥の室へ向って云いました。

「あんた、息子さん？」

私が云うと、

「はい」

女のように形の佳い唇をほころばせて彼は笑いました。

ヴァイオリンは買ったけれど、私は生来、指先が不器用なものですから、この高等な楽器には全然、齒が立ちません。

「トランペットなら、きつとうまくなるわ」

「冗談じゃない」

おまえのように不器用な女は他にないと深見は齒がゆがります。

一月程、深見は毎日、手ほどきして呉れましたが、ちっとも、うだつがあがらないのに業を煮やして、

「性根がはいってないからだ」

と私を折檻致しました。

「かんにんしてえ」

彼にびしびし摸られながら私は泣きました。自分の不器用さが、うらめしくなりました。折檻のあと、すぐヴァイオリンを持たされましたが、どんなに一生懸命になっても指先が云うことを肯きません。生来、不器用なのですから、どう仕様もございません。

「かんにんしてください」

両手を突いて私は頭を下げました。

「不器用は不器用でも、やる気があれば、もっと上達するんだ」

おまえは、やる気がないのだろうと深見は怒ります。

「立て！こっちへ来い！」

私を曳きずって行って柱に縛りつけ、私の口に猿ぐつわを噛ませ、深見は火の出るような烈しい折檻を私に加えました。ベルトの鞭を振う深見の力は、とても老人の力とは思えない程、すざまじいもので、私の柔い肌は一面、真赤に爛れてしまいました。

「どうせ私は貴男の玩具だわ。もっともって叩いたらいいでしょう」

縛めを解かれ、猿ぐつわを外されると、私は苦痛にのたうちながら、半狂乱の態で叫びました。肌が焼けるようにびりびりして、涙がぼろぼろ落ちました。

こんな目にあわされるのだったら、もう誰がこんな年寄の情婦おんななんかになっていてやるものかと、泣きながら思ったことでした。思ったばかりでなく、その通りに実行してしまいました。翌日、私は黙って家を出たのです。

私は元々銀座のキャバレーでダンサーをしていたのでございます。並木通りにある。Rと云う一流キャバレーで、私は其処に二年程勤めておりました。

深見は半年程、私の常連の客になって、二号にならないか、どんな贅沢でもさしてやる、と私を口説き、私も、つい慾に目がくらんだ風で、二十四歳の若さを初老の男に与えてしまったのです。今想いますと、馬鹿なことをしたものだと言わなくてはなりません。

二

器量も悪い方ではなし、齡だってまだ若いのだから、あんな男の世話にならなくっても結構、不自由のない暮しが出来ると、私は云わば時の勢いで深見の許を去り、元の古巣の R で働くようになりました。

おかしなことに深見は、それからもちよいちよい R に遊びにあらわれて、私を指名で招ぶのです。

自分を裏切って去った女と仲良そうにお酒を酌み交し、相擁してダンスを踊るこの男の神経には、些か私は参りました。深見の態度に蛇のような執念深さが感じられて、私は気味悪くなってしまいました。

或る晩の事でございました。

彼と一緒にビールを飲んでいるうち、私は不意に烈しい睡気に襲われました。感覚が弛緩してしまつて、もう半ばとろとろと夢路をさまよう心地です。

「なにを飲ましたの……」

夢うつつに深見に云つたようでした。それから、どうしてあの家まで連れて来られたのか全然、覚えておりません。私が睡りから醒めたのは、烈しい痛撃を肌に感じた瞬間です。

「眼が醒めたか。このズベタ！」

背ろで勝誇つたような深見の声がすると、ビシッと二の鞭が私の体にひびきをたてました。

「ああッ……痛——」

先日と、そっくりには私は柱に縛りつけられているのです。痛いほど肌に縄が喰い込み、両手は上に吊るされています。

「この恩知らずめが！」

「ひーっ」

皮が破れそうな鞭の烈しさです。

「……ゆるしてえ、あなた——」

「吐かすな！」

嗚呼、まるで牛や馬を叩くように、めちやくちやに深見は私を叩きました。鞭で撲つのに飽きると、先がささらになる程、青竹で叩きました。嬰兒のように私は、ひいひいと声を挙げて泣きつづけました。

いま振り返ってみますと、先の折檻と云い睡り薬を仕込んだ上の



強引な加虐と云い、深見は単に乱暴な仕打ちをしたのではなく、そうすることで私の体内にマゾヒズムを育てようと努めたのではないかと想われます。彼はサディストでありそのサディズムは私に対する一種の愛情の発露でありましょう。しかし、私はその時はそのことに想い至らなかったのです。私は深見を冷血な鬼畜のように思い込んだのです。常人以上のあたたかな豊かな愛情の人であったかも知れないのに。しかしまた、私はこのことには未だ想い半ばする風でもございます。不可解な問題でございます。

こんな非道いことをする鬼のような男は居ないと思い込んで、私はすぐに、Rから足を抜いて渋谷の或るバーに勤めを変え、銀座には全く足を向けないようにして深見の目から姿を隠してしまいました。渋谷、銀座と離れても、

同じ東京の中であの執念深い性格の男から姿を隠しおえることかと、実は戦々競々とした当時の日々でしたが、間もなくして新聞に彼の死が報ぜられていました。死因は心臓麻痺の由で、財界の一方の旗頭だっただけに大きく記事に扱われていました。それを見て私は一人、声を放って泣きました。悲しかったのです。ほんとうに悲しかったのでございます。

深見が、みまかった今では、渋谷の小さなバーで、ぐずぐずしている必要も無く、私はまたホーム・グラウンドである銀座へ戻りたいと思いました。しかし何故かもう、Rには帰りたいくありませんでした。Rには深見と私の過去が匂っていて、きっとその過去の匂いを避けたい気持ちが働いたのでしょう。

西銀座八丁目のVビルの近くにある、Gと云うキャバレーに私



は勤めだしました。きみさんと云って、昔、Rに居た友達がそこで働いていて、親切に甘えて私は当分、彼女のアパートに同居させて頂くことになりました。

「ずっと一緒に暮らしたっていいじゃない」

Gに移ってから、すっかり銀座人種に染まりきって、女盛りの美しさの匂う、きみさんは、そう云って呉れます。女が二、三人一緒に暮らしたって、一向不自由なさそうな豪奢なルームです。

「さあ、乾杯！」

「ありがとう」

銀座へのカムバックの祝いだと云って、彼女が奢って呉れた三鞭酒の杯を、私たちは鳴らし合いました。

酔いが手伝ってか、私は深見と過した生活の様子を、きみえさんに喋り、つい口が滑ってあの折檻のことにも触れました。

「青竹で叩いたの？」と、彼女はそう驚いた様子もなく笑って見せます。痛かったでしょうと慰めてもくれないのです。

「私にも叩かしてちょうだい！」

酔った美しい眼が迫って来ました。

「だめよ」

私は後ずさりしました。

「驚いた顔が一そう可愛いわ」

云うと、彼女は猫のように飛びかかって来ました。美しい猫が私と云う女猫をがっしり抑えつけました。

パシパシと彼女は素手で私を叩きだしました。私は、おいたを咎められて母親から罰を受ける子供のよう、きみさんから加えられる責めを甘受していました。マゾの遊びを私は、かすかに感じていたようでございます。

「もうかんべんしてあげる」

きみさんは私の上体をひき起すと「痛かった？」優しく云って、私の顔をのぞきこみます。

「可愛いわ、貴女——」

同性愛の、みだらがましいものがあつた訳ではございません。酔ったまぎれに彼女は、ちょっぴりサドを発揮したのでございました。人はみな誰しも、ちょっぴりサディストであり、マゾヒストであることでしょう。

三

筆がおくれてしまいました。このへんで早く私の愛犬に就いて—あの楽器店の美少年、葉山寺みのるのことに筆を進めましょう。

みのる、と私が親しくなったのは、彼の家の近くに私が部屋を借りてからのことです。

赤坂のきみさんのアパートを出て、その光荘と云うアパートに一間を借りて移ったのは、すでに晩春の頃で、三月余りも私はきみさんのアパートに厄介になっていた勘定になります。私が他処へ移ることを、きみさんは大変、惜しみ、手離したくない風でした。しかし、親切にして貰っても、そこは何かと気兼ねがありますので、私は今日までの好意を謝して、わずかばかりの身廻品を纏めて光荘へ越して参りました。

天氣の良い日曜日に運送屋の三輪車の助手席に乗って、閑静な台地に三階建の白い建物を見せている光荘へ着いたとき、その門前にアメリカ風な派手な色のジャンパーを着て空氣銃で雀を狙っている少年がいましたが、それがあの楽器店の美少年の息子だとは、そのときは気がつきませんでした。

二階の部屋にはいつて窓を開けた時、下でこちらを見上げた白い顔と眼があい、あの少年だと私はすぐ思いました。向うも私の顔を覚えているとみえて、人なっこの微笑をその愛らしい顔に散らしました。

こんな美しい少年と少しでも口を利いてみたい慾望が、私にはございます。

「いいお天氣ねえ」

窓から云いますと、

「いいお天気です」

陽射しを顔に受けて上を仰いで、ヴァイオリンはうまくなりましたか？楽器の調子はよろしいですかと、流石に楽器屋の息子らしく可愛いお世辞を云うのです。もっと上等なヴァイオリンをすすめたような様子が見えるのに私は苦笑して、

「立ってないで手伝ってくれない？」

「はい」

少年は気軽に運送屋に加勢しました。店で見せた、あのきびきびとした態度で。

実は手助けを頼む程、荷物がある訳ではございません。私は、そうして少年と親しくなりたいのが目的でございました。

辞退する彼を、近くの洋食店に無理に誘って行って御馳走したのもそのためです。洋食店で私は彼に訊ねて、みのると云う名前を知りました。

手伝ってくれたお礼を云い、これから時々遊びに来るように云って別れたのですが、そうして彼が遊びに来るのを心待ちしていたのですけれど、その期待はどうやら空しく終った工合で、いつかもう真夏になってしまいました。

ある夜、店がしまつてダンサーの更衣室でドレスを服に着替えていると、きみさんが寄って来て、私の耳許で、

「今から、うちへいらっしゃい」

いっそう、ここへになって、

「ひさしぶりに貴女を責めてみたいの」

「ひどいことしない？」

この人の妖しい美しい瞳に見つめられると、私はなぜか心が魅せられたようになってしまつて抗うことができないのです。タクシーで彼女のアパートへ連れて行かれました。

ひどいことをしないと約束しながら、その夜、彼女が私に加えた責めは、前とは比較にならない苛烈なものでございました。

みのるが、ひょっこり私のところに来たのは、その翌日のことでございます。彼のことは、すっかり期待を失っていた折なので、この思いがけない来訪は、内心、私を有頂天にさせました。

「よく来たわね。さあ、おはいりなさい」

ガウンを脱いで普段着に着替えると、私はいそいそお布団を畳みました。

「どこか悪いのですか？」

靴を脱ぎながら、みのるは云います。

「ちょっと足に怪我をしたのよ」

昨夜、きみさんから鞭打たれたところが傷になって歩くのも不自由なのです。今日はお店を休み、一日養生しているつもりでした。

「ひどそうですね」

私が跛をひくのを見て、みのるは心配そうな声をだしました。

「大丈夫なのよ。珈琲、淹れるわね」

珈琲を湧す間に、私は大いそぎで洗顔を済まして、クリームを塗り唇を描きました。どうしたことでしょう、この胸の弾みは。

「おいしい？」

珈琲の味を訊きますと、

「美味しいです」

その時、彼の青いズボンのポケットからのぞいた蛇の頭に、私は

仰天しました。きゅっと、けたたましい声を挙げて、

「へ、へびじゃないの」

ポケットを指しますと、

「雀、雀ですよ、これ」

成程、雀でございました。彼の手ににぎられて、じっと身をすくめています。その可愛い小鳥の顔が、なんでまた私は蛇なんかに見えたのでしょうか。

「鳥籠ありませんか？」

よかったら貴女に上げてもいいと云います。

「可哀想よ。放してやりなさい」

「いやです」

「放してやりなさい」

「そうですか」

彼は窓に行つて掌をひらきました。ぱあっと雀は飛び立って空へ急上昇しました。

「貴女に上げようと思って持ってきたのに——」

未練氣に窓に立っています。項が少女のように、ほっそりした色白です。

私とみのるは、夕方までトランプや将棋をして遊びました。私たちは珈琲を飲んだりビスケットをかじったりしながら、陽気な笑声を部屋一杯に響かせて遊びに興じました。

「学校は夏休みなんですよ。私、昼間はたいてい居るから、これからは、いつでもいらっしゃい」

帰り際に云いますと、

「ええ」

「ほんとよ」

「ええ、また来ます」

「指切りして」

「はい」

彼の小指に、私は強く小指を絡めました。

葉山寺みのるは、それから始終、光荘十五号室の私の部屋に遊びに来るようになりました。はじめのうちは何となく遠慮したような素振りがあったのが、段々馴れて来るにつれて持前の人なつこい性格がむきだしになって、今ではすっかり私になつてしまつて、弟のように私に甘えるのです。

私は私で、その甘えた態度が無性に可愛らしくつて、彼と一緒にトランプや将棋の他愛ない遊びに興じるのが、浮沈の激しいキャバレー勤めの身の無上の慰安でございました。

四

それは、みのるの夏休が終る頃でしたが、あるとき私はアブのプレイを提案しました。

「いやらしい真似をする訳じゃないのよ」

と私は前置きして、

「初めはまず貴男が私を責め、その次に私が貴男を責める番になるわ。いい？」

用意していた長い麻縄を彼の膝の前に置くと、

「——」

氣を吞まれたようにみのるは、ぼかんとした表情で私をみつめて



います。

「どうするんですか？」

「どうするって——」

私は、なんだかじれなくなった、ぐいと彼の手には麻縄を押しつけ、背を向けて、

「さあ縛って頂戴」。

「——」

「みのる！縛るのよ」

おそろおそろ彼は私の胸に縄を掛けだしました。その手つきのまどろこしさに、私は危うく噴きだしたくなるのをじっと抑え、

「これじゃ腕が抜けるわよ」

力なし！すっかりお縛り！と、お腹の中で思うことです。

「よし、怒ったって知らないから」

どうやらみのるは本気になりました。ぐいと縄尻を握って、力一杯、縄を巻きだしました。かたく縄が巻かれると、私の両腕は自由が利きません。

「叩いて」

私は体ごと、どさっと前に倒れて、みのるに命じました。

「さあ、叩いて」

みのるは、にじり寄って、ぴしぴしと二度程叩きましたが、「いやだ、こんなこと」と、私の体から縄をほどこうとします。

「だめよ、叩くのよ」

「いやだよ、僕」

とうとう縄を解いてしまいました。

「つまらない子ね」

縄をまとめながら云うと、彼は済まなそうな顔をしています。麻縄は私の手の中で輪になりました。私はそれを持って、みのるの後ろにまわりました。

「今度は私が責める番だわ。約束よ」

不意に逃げようとする彼の肩を私は素早く掴んで、

「おとなしくなさい」

変にうわずった声になりました。

「逃げたら承知しないからっ」

彼を縛って、芋虫のように転がして足の裏でも擦ってやろうと云う考えでしたが、ふと彼を馬にして背中に跨ってやろうと思いつきました。縄を彼の首に掛け、

「お馬におなりっ」

すると、不思議に従順な態度でみのるは、よつんばったのです。

「重たいわよ。覚悟なさい」

私は無性にうれしくなっちゃまって、すぐさま、みのるの背中に飛び乗りました。

それから先の面白かったら、とても言葉ではあらわしきれないくらいです。

真夏の日中のことです。私を背中に乗せて部屋中を這いまわるみのるは、全身、汗まみれになって、実にお気の毒なお馬さんです。

「はいし、はいし。そらそら真直行ったら茶簞笥に頭をぶっつけるわよ。こっちへ曲るの、こっちへ。はいしどう、はいしどう」

みのるの背中から噴き上る汗が、私の足をじっとり濡らしてきます。彼の汗と自分の汗が一緒になってしたたります。

「へたばりそうだ」

水を飲ましてくれと這いまわりながら、お馬は哀願するのです。

「だめだめ」

バシッと一つ叩いてやりました。

「ここは千里の砂漠よ。お馬に飲ませる水なんか一滴もないわ。進め進め」

麻縄の手綱をぐいと引き絞って、お馬の頭を台所へ向けさせました。てっきり水を飲ましてくれと思ったらしく、みのるは、いそいそと進んで行きました。と云っても、一生懸命の、よたよた歩きですが。

「み、みず……ください」

背中の上で私が、さも美味しそうにコップの水を飲んでみせると、みのるは汗まみれの顔をねじ向けて喉を鳴らしました。その顔の何と可憐なことったら！

「僕にもくださいよう」

「だめ」

可愛い顔へ、私は一つピンタをくれてやりました。

「馬が口を利いてはおかしいわ」

もう一度、手を振り上げて見せると、美少年は、せつない顔になって、うつむくのでございました。

私は散々面白がって、やっこのことでみのるを許してやりました。手綱が白い喉を責めつけて赤く炎症を呈し、みのるは、それを鏡で見ながら「困った、困った」と呟きました。

「なにが困ったの？」

わざと訊いてやりますと、

「家の人が変に思うよ」

「キスマークを擦けたわけじゃない」

虫に刺されたとしても云って、ごまかして置けばいいじゃない。私は智慧をつけてやりました。

「そう云います」

私は戸口の三和土で、白い運動靴を穿くみのるの肩に、そっと手を置いて、

「みのるさん、また来てくれるわね。今日のことに懲りて貴男がもう遊びに来なくなったら私どうしよう」

「心配ありません」

少年は兵士のような口調で云いました。

「僕、来ますから」

私は小指を差し出しました。みのるの指が、それにからみつきました。

たそがれの道を帰って行く彼の後姿を窓から見送っていますと、私の視野の中に、きらびやかな服装の女性がはいつて来ました。途中でみのるとすれちがって、真直ぐこちらへ足を運んで参ります。きみさんです。

「これ、買ったわ」

部屋にはいるなり、彼女は私の前に一本の革鞭を出して示しました。競馬の騎手が使う鞭のようです。

「それで私を撲つ——？」

全身で否々をしましたが、妖しい美しい瞳が、じっと私の瞳の奥をのぞいて来ますと、又もや私は抵抗感を喪ってしまいました。

それでも、きみさんに責められたら、この前のように二、三日はお店を空けねばならず、そのためには今夜出て置きたい、お店が済

んでから責めて下さいと頼むのへ、きみさんは少しもとりあう様子がなく、

「さあ、叩いてあげる」

髪の毛を掴んで、私を柱へ引立てて行くのでございます。

つい今まで、みのるの首に手綱となつて巻きついてた麻縄が、今度は私の体を柱にくくりつけていくのでございました。

「貴女を完全なマゾヒスティンに仕上げてみせるわ」

まず最初、素手で撲ちながら、笑いを含んだ声で彼女は云いました。

（無理だわ。そんなこと——）

だんだん強くなつてくる痛みを、じっと泳えながら、心の中で私は叫びました。みのるを責めたときの、あの人身馬に打跨った女王のような私の歓喜は、私の性格の中にサディズムが色濃く流れていることを立証するものです。それは私自身に、はっきり証明してくれたことでした。

「ああッ、痛——」

乗馬鞭が、したたか炸裂いたしました。

「猿ぐつわをして」

悲鳴が廊下に洩れるのを恐れて私は頼みました。

「可愛いわ。我慢するのよ」

タオルで私の口を縛りながら、きみさんは囁きます。一刻も早くこの責めから解放されることを胸のうちに私は念じていました。

五

前評判の高かったフランスのスリラー映画が愈々日本に輸入され

て、日比谷のK座で封切になると、私の上客である興業関係の仕事をしている某氏にねだって、招待券を二枚戴きました。某氏は羽振りのいい少壮紳士ですが、かねてから少々私に思召しがあるようでした、

「二枚くれとは何だ。彼氏と行くのか？」

仏頂面でした。

「俺はいい面の皮だぞ」

「ちがうわ。妹にやるのよ」

「毛脛のある妹じゃないだろうな」

やっとのことでせしめると、私は翌朝、早速、葉山寺楽器店へ電話を掛けました。都合よくみのるが出てくれますように神様に祈っておりますと、

「もしもし葉山寺楽器店でございます」

みのるです。

「やれやれ、お父さんでも出たらどうしようかと思った」

「おやじは、まだ寝ていますよ」

受話器からみのるは笑声を流して、

「なんですか、えらい早くから」

「昼から映画につきあいなさい」

招待券を買ったことを云うと、

「わあ、凄え」

「待ってるわよ」

管理人室を出ると、私は口笛を吹きながら外へ飛びだし、夏の明るい朝の道を町の方へと辿って行きました。昨日、お床にはいつてから、或る素晴らしいプランが私の胸に浮んでいたのです。

私は一軒の金物屋へはいりました。

「犬の鎖あって？」

「ございます」

五十がらみの主人が奥から出て参りまして、

「色々ございますが、犬は仔犬ですか？」

云いながら鎖を陳べた方へ行きます。

「大きいのよ」

「セパートですか」

「さあ何種かわかんないけど、人間ほどある大きな犬よ」

「そんな大きな犬が」

あるのだろうかと言った呆れた顔で私の顔を見るのに、私は澄ました顔で一番丈夫そうな鎖をえらんで買って戻りました。

正午前に私の可愛い美少年は、その女に欲しいような美貌の優姿を、いつものように私の部屋にあらわしました。

彼の眼の前で、犬の鎖をぶらぶらさせて見せると、

「それでまた僕をいじめるのでしょうか？」

「カンがいいわねえ」

「馬鹿にして。見ればすぐ分ります」

「どうするか分る？」

「柱にでも繋ぐのですか」

「そうしてもいいわねえ」

私は、にやにやして、

「今日はこの鎖で貴男を引張って映画に行くの」

みのるを犬にするのだったら、当然、首輪がいるのですけれど、私はこの岩乗な鉄の鎖を、彼の白い首にじかに巻きつけてやろうと

の考えでございました。

「あんまり締めたら息ができません」

みのるはワイシャツを脱いで首を差し伸べ、鎖を巻かれながら切なさそうに申します。

首をひと巻きすると、次に鎖をたすきのように十字にかけて、ぎりぎり一旦、背中で締め上げて、それから腕に回して双手の自由を奪うと、私は彼にワイシャツを着せてやり、右の袖口から鎖の端を出しました。それを握って彼を歩かせる仕組みです。

「喉と腕が痛い」

もうみのるは泣きそうな顔です。「なによ、今から音をあげて」鎖の端をぐいと邪慳に曳く張ると、よろよろとよろめきかかる彼の体を私は、とんと突き、倒れそうになると手前に鎖を曳く張り、出かけるまでにいい加減、玩具にして虐めてやりました。ワイシャツの衿を開けて、ちよいとのぞいてみますと、鎖が喉を擦って、みのるの首はもう赤く腫れて来ていました。

「痛い、痛い——」

美少年のワン公は眼に涙を溜めながら、鎖に曳かれて私鉄電車の駅へ向いました。

電車のシートに並んでおさまると、私は鎖の端を一杯引きだして膝の上で弄びました。乗客の視線が全部、私たちへ、そそがれるように感じられました。鎖に繋がれたみのるの見つともない姿を曝け出すことで、心理的な責めを加えようとした私自身も、乗客の激しい好奇心な視線に射すくめられて、みのる同様、顔が火照って参りました。これは一寸、毒蛇の気味でございました。けれど、みのるに充分、心理的な苦痛を与えたことで私は満足せねばなりません。

郊外電車から都電と乗り継いで来て、日比谷の雑踏の中に出ると私はもう大胆になって顔が火照ることもなく、これ見よがしにみのるを曳く張って歩きました。すれちがう者が、老若男女、悉く眼を瞠って私たちを振り返って行きます。

「おねえさん、かんにんしてください」

世にも情ない声で、みのるは始終、懇えますが、勿論、黙殺です。この場合、私が黙っていることが、ますます彼を堪えられなくなりました。

K座に着いて、薄暗い館内にはいると「ああ」と、みのるは生き返ったように大きな溜息を吐きました。

「ぐずぐずしないでっ」

邪慳に鎖を引っ張って一階の指定席へ向って行きますと、やはりこの異様な私たちの姿に気ずく者が居て、びっくりする風でございました。

並んで席に着いても、私は手から鎖を離しません。彼の体に繋がっている鎖だと思つと、彼の手を握りしめているのと同様な愛しさが冷たい鉄の輪鎖にも通うようございました。

やはり、みのるは子供でございますね。さっきの羞恥と苦痛はもう忘れたような顔で、ワイドスクリーンに展開する活劇に見入っているのです。評判作だけあって、ラストシーンらしいその活劇も、ひどく垢抜けたサスペンスが盛られて、日本調のどたばた臭さは微塵もございません。仏人監督の共通したセンスの高さを見せつけられるようでございました。やがてスクリーンは明るくなりました。「犯人が分っちゃったんでは興味が殺がれるわ。時間を見て、はいればよかった。もっとも、貴男は一秒でも早く中へはいりたかった



水色のスマートなお仕着せを着たアイスクリーム売子が通路に來ると、二つ求めて一つを彼の膝の上に載せてやりました。

「泣かないでお喰べなさい」

両腕の自由を奪われていて彼が喰べれる道理がございません。みのるは怨じる眼差しを送りました。

「なによ、その顔。ふふふ」

甘くて冷たいクリームの舌ざわりを口の中で愉しみながら、一匙掬って彼の口の前に差し出してやりますと、犬は一杯、舌を突きだして、

「くださいよ。のどが乾わいて——」

ああと、みのるは嘆声を洩らし

「くださいよう——」

でしようけど。ふふふ」

「——」

「なんとかおっしやい。啞になったの」

「——」

「可哀想に、泣いているのね」

「ほほほほ」

焦らすだけで、クリームは私のお口の中へはいるのです。犬はあきらめて今度は自分の膝の上のそれを箱ごと、かじろうと致します。余程、喉が乾わいて堪まらないのでしょう。背を折り曲げて口を持ってゆこうとするのです。

「ほら、もう少しで届くわ」

どういたしまして、私がしっかり鎖を引き絞っているものですから、あと一寸のところでは口はクリームの箱に届きません。喉首の血管を太くして、みのるはあがきます。

「お気の毒さま」

私は彼の分も喰べてしまいました。

映画を観ながらも私は、みのるを虐めてやりました。脇の下をくすぐられたり、背中を抓られたり、みのるは、ろくろく映画を観る気分になれなかったことでしょう。

さて、そうしてK座を出ると、私はもう一軒、近くの映画館にはいりました。「死にそうだ」と喉の乾きを訴えますので、その売店でジュースを一本飲ましてやりました。

今度はあまり面白くない西部劇で、私はすっかり退屈してしまい、そうになると、益々、ねちねちと隣のみのるを虐めたのです。

「くすぐるのは、やめてください」

苦しく笑って犬は頼みます。

「抓ってください」

観客が息を呑む撃ち合いの場面のときに、私はわざとみのるの腕や背中を抓ってやるのでした。

「いたい……」

周りが静かなので、彼はいつそう声を押し殺してうめきます。その苦しい様子と云ったら、まったく見物でした。

私がまた、この映画館に這入りましたのは、外が昏くなるのを待たためでした。夏の夕ぐれは待って見ると、じりじりするほどおそくて、面白くもない西部劇を二回繰り返して見終る頃に、

やっと夜色が罩めてまいりました。

夜になってから、みのるを日比谷公園へ連れて行き、その薄暗い処で、彼を文字通り犬の恰好に這わせて曳っ張ってみたいと私は目論んでいたのです。

私の可愛い素晴らしい犬は、公園に連れて行かれると温和しく私の命令に従い、暗い場所をえらんで誘導する私の鎖に曳かれて四つんばいながら、ついに公園を一周致しました。

六

私は冒頭に、みのるは私の最初の愛犬であったと述べました。正しくその通りでございますが、その言葉の下になお「そして、みのるは一番期間の短かった愛犬であった」と、付け足す必要があったようです。

みのるが私の愛犬の役目を勤めていたのは夏休みが終り、秋の初めになる頃までで、それ以後、ふつりと彼は私の前に、その可愛い顔を見せなくなったのでございました。私は彼を追おうとはいたしませんでした。

未練がなかったからだとは云えません。ばかりか、彼を慕って心は狂うばかりであったと云うのが正直な私の告白であります。ただ私は、それを行動であらわさなかったばかりでございました。これまでは、ただ清いサドとマゾの関係でございましたが、これ以上、みのると交際を続けていると、私の女の慾望が、ついには不倫な関係を招くことを私は自らに感じて、前途ある少年の身を慮ったのでございます。所謂、夜に咲く仇花でも、一片の道徳心が私の中に無いわけではございません。古風なオセンチな女だと嗤われても、こ

れは持つて生れた性格でございますから致し方がございません。
みのるが、なぜ私から去ったか？。これは未だに解けぬ謎でございます。

この拙い私の告白文も余り紙数をとりましては御迷惑を及ぼすかと思ひますので、こちらで筆を擱こうと存じます。こうして海に向った窓辺の机の上で筆を執っています私の横で、夫が首に鎖を巻かれて犬そっくりで畳に置かれた皿の中の食事を喰べております。

夫は青木と云い今年四十二歳の、この千葉県の某官庁に勤めている公務員で、私の三番目の夫でございます。

ただ今では、私はもう三十九歳、みのるを犬にして興じていた頃と較べると、もうすっかりお婆さんになってしまいました。
ただでさえ老け顔なのに、過去に夫を二人まで喪っては、人生の苦しい波がいつそう顔の皺を深くさせ、色香も褪せてしまいました。でも或る意味では、私は幸せな女であるかも知れませんわね。それは、先夫二人、そうしてこの青木も、よろこんで私の犬を勤めているからでございます。愛犬となって私に仕えているからでございます。

これらの愛犬のことに、折を見て私はまた筆を触れてみたいと存じております。

了

サディズム映画

雑感

相原伊佐夫

封切になったら是非一見しようと思つていた『殺られる』という題の映画を機会がないまま残念に思つていた所、近所の映画館で上映しているのを見たので、その感想と創作とを書いてみよう。

フランスのハードボイル映画とか書いてあったが、内容は中々サディズムの色彩の濃いものであった。

筋書を述べてみると、ある山の中の売春窟が舞台になっている。この山荘の売春窟には騙したり誘拐してきた若い女達を監禁しておいて、特別に確実な客を招待して女達に接待させ、後は自由に別室で売春させるといった寸法である。勿論逃亡なんか企てて捕まれば



残酷なリンチを受けるので、女達は自分の運命にあきらめて従順に言うことを聞いて進んで身を任せている。

この売春団のボスが凄く非情な男である。

山荘へ自分の恋人を無理矢理連れ去られた男が救けに来るが、逆に捕えられ忽ち縛られて裏の地下室へ放り込まれてしまう。この男に對する縛り方が流石に本場のフランス映画らしく中々興味があつた。先ず太目の鉄線で厳しく後手に縛り、両足も同じく鉄線で真直伸して堅く縛つてある。縛り目をアップで写してあつたが、中々強く縛つてあるのがわかる。然かも上半身は半袖シャツなので筋骨隆々たる所がはっきり見えて一層迫力があつた。

その夜、例のパーティの真最中、女の中の一人がこの針金縛りの男に同情して助けにくる。(この女優は肉体派で身体は素晴しかったが顔がいささかきつい。もう少しやさし味のある顔の持主の方がよいと思つた)然し逃がそうとする寸前に殺し屋に見つかり、女は捕えられてボスの部屋へ連れてゆかれる。

そこでこの映画の圧巻である責場面がはじまる。ボスは先ず殺し屋を男の見張りにやつておいて、女に向つて静かに鋭い口調で「脱

げッ」と言う。女は覚悟していたように、着ていたドレスを脱ぐ。勿論場所が場所だから下着はつけていないので、すぐ裸体である。

(然し、残念ながらカメラは後姿しか写さない。)

「よい度胸だな、泣きわめくなよ」

ベッドの上に上半身を倒して毛布を胸に抱いて伏している女の背に、ボスは皮鞭を打ちおろすわけである。

然し、画面はボスの残忍な顔と鞭を打ちおろす腕と、女の苦痛の呻めき声と、それに苦悶にゆがむ女の顔しか写さない。実際に鞭が女の肌を打つ場面が見られないのが惜しいがそれでも、最近見た映画の中では迫力のある方だった。七、八回も打った所へ殺し屋が入ってきて「男が逃げるゾ」と告げに来たので女に對する責場面は終つてしまう。

折角、迫力が出てきた所だけに、もう少しここで変つた方法で責め続けてほしかった。それと、もう一つカラーだったら尚良かったと思うが残念ながら、この映画は白黒であつた。

そこで、この後の場面を自分の創作で少し書いてみよう。ボスはベッドにかじりついて

泣きわめき呻めき悶え苦しむ女を床の上へ靴で突き倒す。責めに熱が入ってきたボスは上衣をかなぐり捨てて遅ましい上半身を裸体にして右手には鞭、左手には電気棒を持って、いよいよ本格的に責めはじめる。

右手の鞭はびゅんびゅんと生物のように女の肌にからみつく。「ヒイ、ヒイ」と悲鳴を挙げながら床の上を転がまわつて逃げる女。ボスは満面に喜悦の笑を浮かべながら、転がまわる女の背に尚も鞭の雨を降らす。遂に疲れきつた女は、部屋の隅へ追い込まれて蹲つてしまう。女の肌という肌には無数のどす赤い鞭の跡がついている。

今度はボスの左手に持った電気棒が女の右腋へ差し込まれる。電撃を受けた女は、ワァーと叫んで両手で払おうとするが、その手にも鋭い電撃が伝わり、ギャーと脳天まで響くショックに後へ飛び退いて棒立となる。

なにしろ山荘の地下室だから、他へ洩れるようなことは絶対にない。男は殺し屋に見張られているため、女の悲鳴を聞きながらも、どうすることも出来ない。

ボスの女に對する責めは更に続いてゆく。



十歩ばかり前を小夜子が歩いている。コンクリートの廊下にハイヒールの音が、さわや

かに反響して、快よいリズムを奏でている。小夜子は後に俊介がいる事に気がつかない。見るからに春を思わせる明るい青のブラウスの胸を思い切り張って、歌さえ口ずさみかね

ない様子である。手にファイルを持っている所を見ると、用事で、他の課へでも行くのだろう。廊下には他に人影もない。昼食後のけだるい春の午後だ。

被虐のシルエット

続・夜は知っている

千草忠夫

ふと、小夜子の歩みがのろくなった。今まで胸に抱くように持っていたファイルを、のろ／＼と後手に持ちかえた。白いうなじがフツと赤らんで、うなだれる。後姿全身からさっきまでのシャッキリしたものがなくなつて、哀れさが全身をおおった。

(おや／＼?)

俊介は、小夜子のそんな姿態をまぶしく見ながら我知らず全身に火がつく想いだった。

わかるのだ、小夜子が今ひとり何を考えているのか。二人だけにしか分らない秘密——二人は、もうそんな仲になっていた。

つい昨夜の事だった。今と同じ様に小夜子は俊介にはじらいの背を見せ、うなだれて歩いていた。シーンと静まり返った夜の廊下にヒタ／＼とふむ小夜子のはだしの足音だけがひそやかに耳を打った。真暗な中に所々窓からさし込む月光が青白い光の池を作つて、そこをよぎる時、小夜子のシルエットが、この世のものと思えぬ幻の光に輝いた。うなだれたうなじにまといつた後れ毛が、金色にふるえて、一本一本はつきりと読み取れた。肩先にまで捻じあげられて縛られた手指の先が月光にあがろう様に波打った。くびれた腰、グツと横に満ち張ったヒップが、青白い光に

妖しい陰影を見せて、若鹿を思わせる脚の歩みにつれて、プリプリと波紋を描いた。

縄尻を取る俊介も、この月光の魔力に浮かされて、夢幻の境をさまよう気持だった。あまりの美しさに、時折、思い出した様に鞭を当てた。肌の鳴る音さえ、何故か、ひそやかに白肌をふるわして、のたうつ小夜子の後姿から、苦痛とも陶酔ともつかぬ呻きが洩れた。

夢の様な昨夜の事を、彼女は今思い返しているのにちがいない。昼と夜との違いはあれこのはじらいの姿態は、それを思わすのに充分だった。

「小夜ちゃん」

あたりに人影がないのを見定めて、俊介は低く声をかけた。

「あらっ」

その声が俊介のものと知るや、頬を見る見る紅潮さして、彼女は、そこに立ちすくんでしまった。両手で顔をおおって「いや、いや俊介さんのイジワル」と蚊の鳴く声で身もだえた。抱きしめたいとしさを圧えて、赤く染った耳にささやいた。

「今夜ね」

コックリする小夜子の肩に、ちょっと手を

置いて、俊介は、サッと歩み去っていった。

相変らず、けだるい春の日ざしの中に残り残された小夜子は、ようやく我に返ってファイルを取り直すと、再び胸を張って歩き出した。しかし二人は知らなかった。たった今、数秒ばかりの出来事を、じっと物陰から見つめていた眼のあったことを。幸福そうな靴音を響かせて去って行く小夜子の後姿を嫉妬に燃える眼で追っていた人影のあったことを。

二

その夜、俊介は独りポツネンと研究室で待ちぼうけをくわされていた。約束の八時は、もうとつくに廻つて、九時に近い。今までになかった事だ。あれこれとプレイの計画を練っていただけに、それがハグラカされると、名目である研究にも手がつかない。眼を閉じなくとも、昨夜の小夜子の幻の様な姿が眼の前に浮んで来るのだ。

研究室を外にしてのプレイは、昨夜が始めてだった。それまでは(はじめて二人がお互の気持を知ってから、もう二カ月にもなる)狭くらしい地下の倉庫で、いろいろ工夫してやっていたのだ。しかし、刺戟も度重なると生ぬるくなる。俊介は次第にイラ／＼して来

た。そして、昨夜、遂に望みを達したのだった。

始めからそんな事をいい出したのでは、諾き入れない事は分っていたので、何時もの通り地下室に連れ込むと、例の通り後手に縛りあげた。今夜はどんなことをするのか？と物問いたげに見上げる、つぶらな眸に、さりげなく応えながら、俊介は、やおら手拭を取り出して猿ぐつわをしにかかった。今までになかった事だけに、小夜子はハッと胸をつかれて後ずさりしたが、後手の身にはどうする事もできず、恐怖と新しい責めへの期待に息を荒くしていた。

それが、外へ連れだされるのだと知った時は、大変なあばれ方だった。のがれようとものが縄尻を引きずられ、鞭でひっぱたかれて廊下へズル／＼引き出された。

あきらめに長いまつ毛を伏せ、とぼ／＼とほだして冷たい廊下を歩む風情は、新しい情熱をかき立てずにはおかなかった。小夜子の胸も波打っていた。おぼろな月光が、更に二人の想いを夢幻の甘さに色付けした。

昼には、ニューモードの衣服に、さっそうとハイヒールを鳴らして闊歩した同じ廊下を夜は後手に縛りあげられて、罪人のように縄

尻を取られて、素足に石の冷たさを踏みしめながら歩くあたし。肌に喰い込んだ縄目が、

高々と後手に釣りあげられた手指が、そして歩きたびにゆれるお尻が、俊介さんの眼にはどんなにうつるかしら？あたしはこんなに縛られて美しいのだろうか？ ああ、はずかしい。イヤ、俊介さん、見ないで。

俊介には、小夜子の気持が分り過ぎる程わかっていった。それをかき立てるのが楽しいのだ。それが責めというもんじゃないか？愛し合った二人のプレイというもんじゃないか？後姿で甘えかかって来る小夜子に、むしゃぶりつきたい衝動をおさえて、反対に鞭を当ててやるのだ。白い肌に黒々とまつわりつく鞭が、二人の心を結びつける架け橋だった。

もう九時を廻っていた。今夜も月夜だから昨夜はたさなかつた事をやろうと思っていたのが、マンマと外された。ヨシ、後で、せい一ぱい責めてやらねば。

それにしても電話ひとつかけて寄こさないのはおかしい。何かあったのか？

ちよっと疑問には思ったが、深くも考えないで俊介は大きく伸びをして、寝に行った。同じ工場の他の場所、最愛の小夜子が、全身を波打たせて呻いているのも知らずに。

三

「俊介さん、助けてっ、たすけてエ。あたし、ここに居るのよ。同じ工場の中で、こんなにされているのよ」

胸の中で小夜子はもう何度、救いを求めた事だろう。えたいの知れないボロ布を口の中に押し込まれ、その上をギッチリと鼻もかくれる位に猿轡をかまされた身には、呻き声さえ押しひしやげそうだった。口いっぱい頬張らされた布がツバをふくんで、むかむかする。あごが痛む。痛むといえば、もう全身がしびれてしまって、ちよっとでも身動きすれば、ジーンと痛みが頭を突きさして来る。真暗闇の中に、悲痛なすすり泣きだけが、うつろに反響していた。

もう何時間こんな恰好で呻き続けたことだろう。部屋の片隅にある四角のごつい柱に、小夜子は縛りつけられていた。柱を背負うように後ろに廻された両手を縛り合わせた縄がむき出された胸を二巻き三巻き、肌に喰い込んで居る。両足は、つま先立ちになって、これ又、柱をはさむ恰好で後ろにまわされてギッチリと縛りつけられていた。身動きもならない。腹部にまつわりついた縄が呼吸を圧



迫している。首縄は、首を固定して、頭、背すじ、尻、ふくらはぎが、柱に密着している。文字通り、身動き一つできない、すさまじさだった。寒さと、不自然な姿勢の為、もう体全体の感覚がなくなり首から上だけが、反対に異常に冷え切って、涙が後から後から流れ、のどがヒイ／＼鳴った。

事の起りは、今日の午後五時だった……。

どこの会社でも、退社時刻が迫って来ると、皆パタ／＼と帳簿をしまい始める。一日の気づまりな仕事から開放されて、やれ／＼という気持ちがどの部屋にもワツとばかり、ふくれあがって、時ならぬ活気を呈する。

小夜子の所属している所は研究室だけに、さすがにそんな現金な雰囲気はなかったがそれでも手のすいた連中は、

ウーンと伸びなどして、そそくさと上着をつけはじめ。中には、まだ試験管や計器と取り組んでいる連中に、悪気のない憎まれ口をたたく者もある。一杯ひっかけるべく、同志を糾合する声が、あちこちとび交う。

「オイ、小夜ちゃん、今夜つきあえよ」

と、まんざら冗談ばかりではなさそうな眼の色で、顔をのぞき込む若い研究員もいた。

小夜子は机の上を片附けながら、相手の気を悪くしない様に、やんわりと断わりをいう。それを引き取って、ハタから「コラ、小夜子、怪しいぞ。彼氏が、できたんだろう」「来いよ。今夜はみんなで、つるし上げてやるからさ」「ああ、我が恋、破れたり」などとかしましく、はやしたてる。小夜子は、まあ失礼ね。とか、アラ。とか適当にあしらいながらも幸福だった。

俊介さん——想いは何時も、そこへ走る。そして、はや今夜への期待に胸がふくらんで来るのだった。二人の仲は誰も知らない。ましてや二人があのような愛し方、愛され方をしているようとは、周囲に群がる者、誰一人として知らないのだ。他の関知をゆるさない秘密をわかちあっているという思いが、更に二人の愛情をこまやかにしていた。

小夜子を取り巻いてワイ／＼やっている若い男達を掻きわけるようにして、一人の女が頭をのぞかせた。

「小夜ちゃん。こんな狼共の相手になっちゃあダメよ。さあ／＼、みなさん。小夜ちゃん、あたしがシッカリお預りしましたから、どうぞ御心置きなくお引き取り下さい」

道下キミだった。小夜子はギョツとした。

「女斗士にかかっちゃ、かなわねえ」とか何とかボヤきながら、ゾロ／＼散って行く男達に、負けずに応しゅうするキミの横顔を、小夜子は恐る恐る盗み見た。相変らず美しい顔が、心なしか蒼白く引きつっている様に見える。

俊介との事があって以来、キミと会うことは自然と間遠になっていた。課が違うので、その気にさえなれば、会わずにすます事も、さほどむずかしい事ではなかった。組合関係の仕事からも、あれ以来、遠ざかっている。俊介のこと以外、何にもかかわりたくないというのが小夜子の本音だった。キミに悟られやしないか、という恐れと、うしろめたさがいつも小夜子の心を苦しめてはいたが、かといって、俊介を一方にひかえながら、他方でキミと今まで通りの交際を続けることは、不

潔な感じではなかった。

キミの方は、廊下で出会った時など、「近頃はちっとも来ないわね」と、笑顔を見せるだけで、別に深い詮索の眼を向けることもなかったが、小夜子は、そのたびに縮みあがる思いだった。

「キミちゃん、あたしたちのこと気がついてるんじゃないかしら。あのひと、あまり感情を表に出さない方だから、こわいわ」俊介と二人きりの時、小夜子は、よく胸の不安を訴えたものだ。

「何かそんな気配でもあるの？」

「別にコレといっていないんだけど」

「気のせいさ。二人でかくれて、こんな遊びをやっているんで、気がとがめるんじゃないのかな」

「でも、いやだわ。何とかしなきゃあ」

何とかしなければ、という気持は、二人の胸にいつもわだかまっていたのだが、さて実際にどうするかとなると、良い考えも浮かばないままに、ズル／＼ともう二カ月になっていた。

今、思いもかけず、キミの方から小夜子を訪ねて来た。何かある——小夜子は直感した。キミの顔には、どこかといって、けわしいもの

はなかったが、それだけに不気味だった。

「今日これから、ちよっと附合ってくれるわね。組合の事で相談したい事があるの。何か他に約束でもあって？」

約束など、どうでもいいという口調だった。小夜子が後ろめたさにひるんでいる間にキミはひとりで決めてしまつて、気を取り直した時には、一緒に行かざるを得ないようになっていた。小夜子は屠所にひかれる仔羊さながら、力なく後に従った。来るべきものが、遂に来たのだ。抵抗するには、彼女はあまりにも非力だった。弱味は、こちらにある。

組合の事務所には、会社の敷地の外れにボツンと建っている古い倉庫が当てられていた。組合側からは、会社の取扱いが冷たいと一時は大いにいきまいたものだったが、実際に使ってみると、案外、都合が良かったので、今日までそのまま使っていた。第一、本館から離れているというのが、組合側の秘密を守る上に都合が良い。それに、形の上でも一応本館と対立した恰好にあるのが組合員の士気を高めた。平常は、ほとんど使用される事はなかったが、この頃、年中行事の様になってしまった年末、季末の斗争の時は、指令部として貴重な場所だった。

だだっぴろい資材置場を二人は黙々として横切った。工場の周囲を取り巻く田んぼから時折、冷たい風が吹きつけて、ドラム罐の山に渦を巻いた。一直線に走っている高圧線の果てに、夕陽がようやく傾むきかけていた。「組合の仕事って何なの？ 夏季斗争には、まだ早いし」

オズ／＼と問いかける小夜子に、ハッとする程きつい顔をキミは見せた。高まって来る不安に足は自然と重くなった。

「サア」

グイと腕を取られて、小夜子は絶望的に歩を進めた。

倉庫の重い鉄扉を閉める音が、うつろにこだまして、小夜子はゾッと身ぶるいした。まるで牢屋に入れられたみたいだわ。

中は広さ三十坪あまり、雑然と並んでいる机や椅子、壁に立てかけてある古びたプラカード、破れたビラの山。そんなものが、高い所にある小窓から差し込む斜陽に、ほこりっぽく浮び上っている。キミはパチッと電灯をつけた。白々しい明りが、薄闇よりいっそうあたりの殺風景さをあらわにした。

「さあ、そこへお掛け」

俄かに、豹変した声だ。いつもブレイで二

人きりになると、キミはこんな声を出す。以前なら、いくら声をきつくしても、その裏にお芝居だという甘い気持があつて、安心しておれた。だが、今は違う。それをブレイとして受け取れない罪の気持が小夜子にはある。「最近、組合活動をサボっているのは、どうしてだ」

向きあつて腰掛けると、キミはきつい声で始めた。

「別にどうって……」

パシッと頬を張られた。あつと頬をかばった。涙がポロリと落ちる。

「そんな生ぬるい返事は聞きたくない。女子部長のあたしにも、よそ／＼しくして、まるでなっていない。今日は、ハッキリした返事を聞くまでは帰さないから、覚悟をきめて答えるんだ」

あの事をいおうかい うまいか心は迷った。

答をしぶっていると頬を張られる。

「あたし、組合の委員をやめさせていたきたいのです」

「なぜ？」

「あたしみたいな者は、いくら勉強しても、皆さんを指導して行くだけの力がないと気がつきましたから」

「あたしが、あれほど一生懸命に教えてやったのに、今更そんな事がいえた義理か」
平手打ちがとぶ。小夜子は椅子をつかんで身を支えた。カッと我を忘れた。

「キミさんは……キミさんは、自分の楽しみの為に、あたしを引っ張り込んだだけじゃないの。組合だの何だのって、結局は、あたしをブツたり縛ったりして自分を満足させたかっただけじゃないの。今更あんまりですッ」

しまった——と思った時は、もうおそかった。一番いたい所を突っ込まれたキミは、真赤になって立ちあがった。すごい程の美しさだった。これで二人の仲は永久におしまいに なった事を二人は知った。女王は取りすました仮面をかなぐりすてて嫉妬に燃えた。奴隷は屈伏の姿勢をはねとばして、俊介との愛の防衛に立ち上った。二人は獣の様なうなり声をあげ、もつれあつて床上にころがった。

しかし格闘となると、キミに一日の長があった。これまで何度となく膝下に組み敷いて縄をかけた事のある相手だ。今は相手も必死とはいえ経験の差はどうにもならなかった。靴はとび、ブラウスは千切れ、スカートを裂かれた小夜子が我に返った時は、もうキツチリと椅子にくくりつけられてしまった後だっ

た。胸にまわった縄は、情容赦なく胸乳をしめつけ、両脚は二つにさかれて、それぞれ椅子の脚に固定された。縄さえ秘かに用意して来たキミの決意の固さに、小夜子はあらためて、そそけ立つ思いだった。

「ああっ、ゆるしてっ」

悲鳴をあげる小夜子にかまわず、キミは首にかけて縄を後ろ手にかけて、グイと引きしほる。頬にたれていた乱れ髪が、パラリと耳

のうしろにすべって、苦痛にゆがむ顔が、無理矢理、上を向かされる。涙と汗にぬれた頬に、ゴミがベツトリとくっついていた。

キミは乱れた衣服をととのえると、もつれかかる髪をサツと後へ掻きあげて、小夜子の前に立ちほだかった。

「やれ〜、世話をやかせるわね」

小気味良げに、上向きに固定されている小夜子の顔を見おろす。手には、何時の間にか

細身の革バンドが握られていた。

「いい加減に白状したらどう。今夜は遊びじゃないんだからね。いわなきや、徹底的に絞りあげるわよ。もっとも、あたしの方は、あんたが強情を張り通してくれた方が、責め甲斐があつて楽しみだけだね」

口の端に冷笑を浮べて、小夜子のすっきり通った鼻筋をグイとつまんで捻じあげる。ツーンと痛みが頭に突き抜けて、涙がポロ／＼こぼれた。無抵抗に仰向けられた小夜子の可愛らしい顔は、感覚のなくなるまでキミの嫉妬の嵐にいたぶられた。小夜子は屈辱と苦痛に、身をもんで呻いた。

「まだ白状しないか」

もう、一切をブチまけてしまいたい小夜子だったが、自分からいいだすのは、さすがにためらわれた。何か相手がキツカケを作ってくれば、すぐにでもいってしまうのに――と、ためらう間もなく、次の責めが襲いかかって来るのだ。

ピシッ

「ヒィー」

今度は鞭が太腿の上に鳴る。スカー



トがむしり取られ、ナイロンのスリッパが、いさぎよい音をたてて裂ける。剥き出しになった白い肌が破れて、真赤な血がブクリ盛り上り、やがてツツと筋を引いて流れた。

「ウッ……や、やめてッ」

椅子をギシ／＼きしませて、小夜子は不由な身を悶える。

パシッ。

「いうか」

「いいですッ。いいですから、ゆ、ゆるしてッ……あっ」

胸をのけぞらして、彼女はヒ／＼あえいだ。

「あ、あたしは……あたしはキミさんに……か、かくしていることがあります」

「あたしを裏切ったというのね」

「え、ええ……でも……」

「でも、どうしたっていうの」

ねずみをいたぶる猫の、惨忍な喜びに、キミの眼が妖しく光る。

「キミさんにすまなくって……いつ打ち明けようか、いつおわびしようかと……」

「うまいこというわね」

ピシッ

「あっ——本当なんです。でも、何だか悪く

って……つい……」

「で、どうなの。早くいってしまいなさい」

「あたし——す、好きな人があるんです」

「フーン、いったい誰？」

「俊介さん——イエ、あの……木戸さんってかた……」

俊介という名前を口にした時の、うっとりとした表情が、キミにはグッと応えた。血が頭に上って、眼の前が真赤に染った。

「畜生、ちくしょう、裏切者ッ」

かほそい小夜子の頸に、キミはむしゃぶりといて行った。

「ア、アッ……グーッ」

殺される——という意識のひらめきを残したまま、小夜子は黒い淵に沈んで行った。

キミは、気絶した小夜子の軀を前にして、呆然と立ちつくしていた。荒々しく起伏する胸と、流れる汗だけが生きている。

なんにもない。あたしには、なんにも残っていない。いままでは、小夜子を責めることに充実した喜びを感じたのに。本当に満ち足りたおもいが、いつまでも残ったのに。憎しみだけで責めつけたって、何にもならないのね。あたしは知っていた。ひと月も前から、小夜子に俊介という人ができた事を知ってい

た。そして、まるで野良猫のように夜の会社にひそんで、二人のする事に嫉妬の炎を燃やして来た。みじめだった、あたし。うわべだけは何気ないふりをしながら、心の底では小夜子を憎み、小夜子に哀願していた。どうして率直に話し合えなかったのか。ほんとにいやらしい、あたし。

でも、可哀そう。小夜子には俊介という人がある。責めれば責める程、小夜子は殉教者のような輝きをおびてくるのに、このあたしには何も残らないじゃないの——ひとりぼっちに棄てられて——

自分のみじめさを思うにつけても、眼の前にいる小夜子が憎らしい。この美しい体を、きたならしい男の手の罫目にまかせた小夜子の裏切りが許せなくなる。キミは我を忘れて再び、グッタリした小夜子に襲いかかった。

腹を絞めつけられる苦しさに、ムムと、うめいて、小夜子は失神から醒めた。軀中が、うそ寒い。

「あッ」

思わず息をのんで身をもがいた。

いつのまにか、両手足とも柱を後ろ抱きにした恰好で、くくりつけられているではない

か。小夜子は羞恥に肌を桃色に染めながらも新たに加えられた暴虐に悲鳴をあげた。

柱をうしろに抱いて、突き出た恰好になった胸の双房が、きびしい縄目にくびられ、細腰にも、脚にも荒縄は容赦なく食い込んで、身動きすらできない。つまさき立ちにされた両足は、柱の後ろに廻され、足首をひとつにしてくくられているのが、小夜子には耐えがたかった。

「もうゆるして——あっ」

首縄が細くびにかかって、グイと顔を仰向けられる。小夜子の哀願する眼が、キミの妖しい光をおびたキラ／＼する眼に跳ねかえされた。キミのこめかみの血管は不気味にふくれあがり、蒼白に変わった頬がヒク／＼痙攣している。

遂にキミは嫉妬に狂ったのか？それとも、愛憎を超えた責めの喜びに眼覚めたのであるうか？

俊介さん——小夜子は心の中で、恋しい人の名を呼んでいた。

（あたし、頑張ります。これで、あたしたちの愛情がつぐなわれるんですもの。この試練さえ、のりこえれば、あたしたち誰に気がねもいらなくなるんですもの）

スーッと苦痛が抜けて、夢の様な陶醉感が体いっぱいに拡がって行く。

キミは、そんな小夜子をく／＼しげに、ねめつけた。鞭が、ほんのり色づいた胸にとぶ。

「いくらでも強情をはっているがいいよ。このままにしておいてやるからね」

「ええっ？」

小夜子は、思いもかけないキミの意図に動てんする。

「いやっ、そんなこと、いやですっ」

「フフ、せい／＼色男に責められている夢でも見ることね」

「お願いです、あたしをこのまま置いて行かないでっ」

「心配しなくてもいいわ。あしたの朝か、早ければ今夜のうちにでも、誰か見つけて、ほどこしてくれるからね。ただし、その人はお前の想っている男じゃなさそうね」

「ああ、かんにんして」

「その縛られた恰好を、他の男の眼にさらしものにしているがいい。あたしは、こうされるのが好きなんです——と書いてお前の頭の上にはりつけておいてやったよ」

「ああ——」

そんなことを考えただけで、小夜子は、はずかしさに気が遠くなった。

（そうになったら、もう何もかもおしまいだわ。生きてなんかいられない。いっそ、今、ひとともに舌を噛み切って……）

「俊介さん、助けてっ」

小夜子は、恐怖に我を忘れて恋人の名を呼んだ。

「ハハ、だめよ。いくら呼んだって誰も来やしないから。それに、ホラ、こうしてやる」

呆然と開いた口に、すばやく布が押し込まれ、ムムと呻く間もあらせず、その上から、しっかりと猿ぐつわをかけられてしまった。

「舌でも噛まれたら台なしだからね」

堤を切った様に、小夜子は泣き出した。嗚咽が猿ぐつわにひしやがれて、ヒイ／＼悲鳴になった。

「気のすむまで泣いたら、おとなしくねんねするのね。じゃ、明日の騒ぎを楽しみにしてるわよ。バイ／＼」

パチッと電灯が消された。ガチャーンと大きな反響を残して鉄扉が閉り、靴音が次第に遠ざかって行く。

真暗な中に、小夜子は泣き声をひそめ、耳をすましてその靴音を追った。

(行った。本当に行ってしまった)

絶望感が、あたりの闇よりも濃く、胸の中をぬりつぶした。時が静かに流れて行った。

遠くで汽笛の音がする。しびれ切った軀が間をおいて、はせくり上げる。もうろうとして来た意識の中で、小夜子は「俊介さん」と叫び乍ら、柱に必死にしがみついていた。

資材置場で、ガターンと何か倒れる音がする。小夜子は全身に冷水を浴びた様に鳥肌だった。何かがチョコチョコ足元からはい上っている。ねずみだ!

四

ジリリ電話のベルが、俊介の眠りばなにおそいかかった。安眠を引き剥がされて、不気味に舌を鳴らしながら電灯をつけて見ると、十時過ぎだ。

「もし〜、こちらK化学工業です。……はあ、木戸俊介ですが……エ?なにっ」

眠気は完全に消し飛んだ。

「きみはいったい誰だ……なに、小夜子をどうしたって?……ナニッ、あの倉庫に? 畜生、君は道下キミだな。小夜子に何のうらみが——」

相手は抑揚のない声で、ゆっくりしゃべっ

ていた。

「本当は明日の朝まで、あのままに放っておくつもりだったんです。そして、あなた方二人に、あたしの事を思い知らしてあげようと思っていたんです。でも——」

俊介は、もう聞いていなかった。受話機を放り出すと、パジャマのまま部屋からすっ飛んで行った。

切れた電話を前にして、キミは、なおも話し続けていた。誰にでもなく、自分みずからに——

「あたしはバカでした。嫉妬で狂っていたんです。何が何だかわ

からなくなっていた

んです。でも今は、もう平静になりました。たわ。もう、どうし

ても取り返しはつかないのね。小夜ちゃんを責めたって、心

は俊介さんの方に傾くばかり。本当は、

あたし淋しかったんです。あたしみたいな

な性癖を持った者を理解してくれる人は

懸賞原稿募集

☆ 規 定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

一、必ず未発表の自作であること。

一、枚数に制限はありません。

一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。

一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。

一、賞金は発表と同時に送りいたします。

他にありませんもの。せつかくここまで育ててきた小夜ちゃんを失って、又もとのひとりぼっちになるのが、こわかったんです。どうしたらいいか判らなくなって、カッとして小夜ちゃんをいじめたの。かんにんして下さい。ゆるして下さい。もう、あきらめました。ひとりで、どうにかやっていきますわ……さようなら。ほんとうに、さようなら」

公衆電話のボックスの中で、キミはひとり声をしので泣いた。自動車のヘッドライトが、濡れたその頬を、一瞬、蒼白く描き出し、ては通り過ぎた。(完)

女教師に詰腹を切らせたというお話

ある復讐

上 田 美 路

1

あるターミナル・デパートの婦

人服売場。さつきから、ちらちら

私の方を眺めていた同じような年

恰好の婦人が近付いて来て

「失礼ですけど、上田みちさん

……ではありません？」

「……………」

私の方でも、とうから躊躇^{ためらい}がち

な視線を送ってよこすその顔に、

何処か遠い記憶につながるものが

ある様な気がしていたのですが、

「あら失礼、わたし土岐子……、

奉天の——」

云いかけるのを、みなまで聞か

ずに、

「ああ、山下さん！」

一瞬、思わず、覚えていそうも

ないと思っていた、その人の名前

が、口について出たのには吾なが

ら驚くばかり。

二人は人のあやしむ中に、背中

を抱き合って奇遇をよるこび合っ

たことはもちろん。それもそのは

ず、山下土岐子さんは私が女学生当時、二年間も寮生活を共にした人。終戦以来、しばらくして消息が絶えて、それが十五年ぶりの邂逅でした。

「ほんとに奇遇ってこのことね」

いっしょだった頃の思い出話、そしてその

後のことなど、買ものもそっちのけにして話

は尽きず、それでも少しは落着いた頃に

「あのこと覚えていらっしゃる？」

土岐子さんの言葉に、私は首を傾げました。

「あのことって？」

「ほら、裁縫室でお腹を切る稽古をしたとき

のこと——」

「ああ、あのこと！」

昭和二十年——終戦の年、私達はまだ十七才、奉天市の——高等女学校の四年生でした。私の父は職業軍人で、その所属部隊は吉林省にあり、その駐屯地の近くには日本人女学校がなかった事から、私はひとり両親と離れて学校の寄宿舎にいた訳でした。

いまのハイティーンとは違って女学校を卒業すると、すぐお嫁にゆく人も多く、そんな年頃に近い女五人が一つの部屋に起居するのですから、良いにつけ悪いにつけ面白い事も

多かったのですが——それは又、別の機会にゆずることにして……、ともかくその頃、同室だった四人のうち一番仲が良かったのが土岐子さんでした。茶目ッ気の多い陽気な土岐子さんには、私は事あるごとに笑わされたもので、私達二人がなんとなく気が合ったのは、土岐子さんの父も軍人だと云うことの外に、二人とも可もなし不可もなしという程度の宙ぶらりんな成績の共通点の故だったかもしれせん。というのは、学校側ではどういう配慮か、出来るだけ学年の違うものも、同じ学級の生徒同志も同室させないことになっていました。私達の部屋では土岐子さんと私をのぞく三人は、それぞれ級でも二、三番をあらそう人ばかり。それに三人とも五年生だったことも土岐子さんと私を仲良くさせたのでしよう。

昭和二十年八月八日。突然、私達は孤児同然の境遇に追いやられました。この日、不意の宣戦布告と同時に大挙してソ満国境を越えたソ連軍は、関東軍を蹴ちらして南進したのです。寮にいた私達は茫然と一時は目の前が真暗になりました。父は国境守備隊にいたのですが、母も弟や妹もそこにいたのです。今にして思えば、父はその時、戦死し、家族も

行方不明になったのでした。

軍当局へ両親の消息を訊きに出かけても、そこも混乱があるばかり。ソ連軍が侵入して数日をでないうちに関東軍は潰滅し、上層部からして逃腰だったのです。重大な事は軍の機密だといって何の得るところもありません。土岐子さんの方も同じでした。

その中にソ連空軍の奉天空襲を見越して当局は、市民に疎開命令をだしました。学校は事実上、休校してしまい、寮生だけが不安の中にとり残されてしまったのです。

寮にいる生徒は、元々私の様に何かの都合で両親のもとを離れていた人達でしたが、それでも急遽、駆けつけた肉身や知人に引取られ、後にはいいよ、よるべのない十五、六人が残りました。勿論、私も土岐子さんもその中で、私達の部屋からは室長の孝子さんと都合三人が残留組でした。

市民の疎開につれ、私達も舎監の南地先生に引率されて荷馬車にゆられて、———なんという処だったかもう忘れましたが片田舎へ疎開しました。他にも沢山来ている奉天市民に、女ばかりの私達一行はめずらしがられたり同情されたり、そのうち私達をどきりとさせたのは、どういふつもりか軍が疎開者全員

に、自決用の毒薬（青酸カリ）を配ったことでした。

兵隊さんが、茶色の薬包を一封ずつ各自に配って歩いた時、

「……………」

南地先生が無言でそれを押戴いたので、私達もそれに倣ったのですが、どきりとしたというだけで、さして異常にも思えなかった程緊迫した雰囲気にはまき込まれていたのでしょう。今になると、かえってどきりとさせるものがある敗戦心理でした。

八月十五日の正午、陛下の玉音が放送されるというので、私達はラジオの前に集められて、あの聴き取りにくい放送を聞いたのですが、何の事かすぐには意味が具体的なものになりません。

——戦争が終ったらしい。

周囲の人々の口々に云うのを聞いて、そうだなと思っても、停戦というのが果してどんなことなのかは容易にはのみ込めませんでした。

神州不滅。戦っては必ず勝つ——。

そんな風に教育されてきた私達には理解のとどかなかったのも無理ではありません。ただ、あたりの異様な気配と、

「ううっ……」
放送が終るや、その場に俯伏して慟哭する南地先生の姿に、ようやく事の異常さを感じるほかないのです。

2

南地先生——私達の舎監のこの先生は、二十六、七だったが、眼鏡をかけた、はそおとてどことなく冷たく細面でしたが、まず立派な、人によって美人と呼ぶかもしれない程の人でしたが、わけがあつてか、その頃、未だ独身で大政翼賛会の婦人部員で、私達の薙刀の師範でもありました。私達が入学したのは太平洋戦争も初期の頃で、学校では忠君愛国の思想をきびしく教えていたのですが、そこは外地の事、形式主義的なところも多分にある中に、若くして内地



から赴任した南地先生ばかりは愛国の至情に燃えていました。学校は次第に竹槍や銃剣術の稽古が多くなりだすと、南地先生の厳しい稽古ぶりに、しばしば私達はねをあげてしまう事も多く、固苦しく面白くもない講話に三時間も床に正座させられた事も少なからずありました。

南地先生が教科の中でそれをやるには、私達は喜ばずとも仕方のない事とあきらめもついたのですが、唯、やり切れなかったのは寮内の厳格さでした。どちらかといえば、職業軍人の私の家庭でさえもかなり自由に振舞える大陸の気風に染って育てられた私達には、それに対する反発もあったのは当然のことでした。けれど、三尺下って師の影を踏まず——大和撫子として教育された私達は、敵国用語として禁じられた言葉の中か

ら、

「オールド・ミス」――

渾名をつけることで秘かに復讐する位しか
 気持のおさまることはありませんでした。

さて、玉音放送を聞いた午後からは、もう
 疎開者たちは市内へ引上げを始めました。敗
 戦となれば満人がいつ蜂起するか知れず、そ
 の難をのがれるには日本人同志が密集した都
 市の方が有利だったからです。私達一行もそ
 の日の内に寮に戻ったのですが、帰って見る
 と寮母さん二人は去り、私達十五人は、南地
 先生と唯一の男手である老小使さんの中に
 取残されることになったのでした。満人が暴
 動を起すというので戦々兢兢たる街の中の、
 がらんとした学校に。

その翌日――

「南地先生が裁縫室に集合するようになって
 ー」

よく訊いてみると、刺子一枚に馬乗袴の稽
 古着姿で小太刀を持って来るようにというこ
 とです。薙刀の稽古はいつもその姿だったの
 で不思議はないとしても、裁縫室というのが
 何時もと違うのですが、私達は決して疑問も
 持たず用意をしました。木剣は常に使わない
 ものでしたが、道場がわりの雨天体操場の壁

には五十振りばかりの備品があり、私達はそ
 れをとって裁縫室へ行きました。

裁縫室というのは二階正面のやや大きい目
 の教室で畳敷になっています。

私達がそこへ顔を出した時、南地先生はす
 でに同じく稽古着姿で、正面に端座していま
 した。

さて私達の顔がそろつと、

「きよう、皆さんを集合させたのは、お話し
 ておきたいことがあったからです。外でもあ
 りませんが――」

陛下の赤子は不忠にして力足らず、国破れ
 たりといえど、大和撫子は万一の場合、舌を
 噛んでも日本人の面汚しにはならないように
 その覚悟をととのえておいてもらいたいの
 です――それだけの前置をして、

「軍人精神は何によって支えられていますか
 ？――佐野さん」

佐野さんとは室長の孝子さん。

「はい――武士道精神によつてです」

「では武士道精神、つまり大和魂ですが、そ
 れは？」

「……」

お気に入りの孝子さんも答えかねたよう
 でした。

「それは、切腹、腹を切る精神です。解りま
 すか――」

南地先生は皆の顔を一わたり眺めわたしま
 した。そして切腹の精神について、いろいろ
 故実を上げて説明すると、

「誰れかお腹の切り方を知っている人はいま
 せんか」

勿論、唯一人として手を上げる者もありま
 せん。先生は切腹の方法を話してから、

「私が今ここでこういう話をするのは、危急
 の機から、いざという場合には女の誇りを守
 って自決する胆力を養ってほしいと思うから
 です。――では、胆力を養うためにその稽古
 をします。皆んな用意をなさい」

用意――といっても何をしていたのか私達
 は、まごついてしまいました。

「いいですか、腹は体のなかでも一番柔かい
 部分です。上へ何か着ていては、とうてい突
 き立てられません。腹を出すのです。腹を」

一瞬、私達は顔を見合せて躊躇しました。
 いかに切ばつまった状態の中にもせよ、や
 はり日頃の羞恥が出るのは無理ありません。
 いくら女同志とはいっても、お風呂場以外で
 肌を見せ合う様なこともなかったのです。

が、一、二年生が刺子の稽古着の前を開き

はじめると、上級生もじっとはしてはいられず、何とも面映い^{おもはひ}気持で紐をほどくと、照れあった顔で稽古着の前を細くあげました。ふと見ると孝子さんだけは、一時が万事まじめすぎる人だけに、広く開けひろげ袴のくくりまで押し下げ、お臍まで出しているのです。私など人を見るさえ羞しいのに。土岐子さんが思わず、うふふ……と笑出してしまいました。誰れもが同じ気持だったとみえ、たちまち笑いが広がって行こうとした時、

「何ですか、山下さん、あなた、それでも日本の女ですか！」

突然、南地先生の怒りに蒼くなった顔が、にらみつけました。

「皆さんも皆さんです！そんな事でお腹を出したといえますか、臍を出さない臍を——佐野さんを見ならいなさい。……よろしい、あなた方がそういうつもりなら未だ駄目です。稽古着を脱ぎなさい！」

剣幕に驚いて、恥しい気持も吹っ飛び、私達は稽古着を脱いでお臍の下まで十分に袴のくくりを押下げました。ふだんから稽古着の時はずっと何もつけることを許されていないので、たちまち半裸の姿がそこに並びました。

南地先生はそれを見とどけてから、正面へ

正座して私達と同じような姿になり、木太刀をとると、

「私が手本を示しますから、よく見ている様に——」

一・二・三！と号令をかけて、左脇腹に突立て、お臍の下まで引っぱり、そこから又、右脇まで——という具合に動作を示しました。「解りましたね。では皆さんで稽古します。佐野さん前へ出て——」

孝子さんも矢張り羞しそうでしたが、仕方なく正面へ進み

「一——二——三……」

号令をかけて、先生のしたようになぞってお腹に木太刀を擦りつけました。私達もそれにならって二度・三度。

「山下さん！前へ出て」

今度は土岐子さんが指名されました。

土岐子さんは、見るも可哀そうな程、顔を真赤にしながらも、皆んなの前でひとりその動作を繰返しました。

「号令がありませんよ、もう一度！」

意地悪く先生の声がとび、

「一・二——三……」

土岐子さんの蚊の泣くように細い掛声が震えました。

「もっと大きな声を出して！」

それが二度ならず三度まで続き、「一！二！三！」自棄的に土岐子さんが大声を上げるまで続きました。

土岐子さんは、今度は本当にお腹を切っている様に蒼白になって、今にもわっと泣き出さんばかり。そのお臍の下は、もう蚯蚓^{みみず}ばれが出来るほど真赤。

南地先生は、四度目でやっと許して、土岐子さんを窘め^{たしな}めました。

「いいですか、あんな時、笑うような事では、日本の女としての資格はありませんよ」

3

土岐子さんはその時、よほど深刻な屈辱を感じていたとみえ、部屋へ戻ってから泣いて泣いて手がつけられず、二日程は碌々口もきかなかった位。

——本当にあの時は、南地先生を殺して上げたいと思うほど憎かったわ。

やがて七ツになる坊やがいるという現在の山下——結婚して姓が変わった。かつての山下土岐子さんは云う。

「だからね、あなたが行ってしまった後、つい、かっとしてあんなことになったのよ——」

「あんなことって？」

「それがね、私、お腹を切ったのよ」

「本当？」

「嘘もないのよ——でも信じられないでしょ？　見せてあげようか、私のお腹——」

「だけど、どうしてそんなことになったの、また」

正直のところ、私には信じられませんでした。あんな快活で茶目ッ気たっぷりだった土岐子さんが……。

あの事があってからすぐ後の日、ようやく駆付けてくれた父の知人に引取られ、私は寮を去ったので、引揚げて現在に至るまで、その後の事は知らずにいたのです。

私が寮を離れた時は、——近くの千代田公園や市街に満人暴徒がなだれ込み、日本人の家宅に侵入しては暴行、掠奪、殺戮、市内いたる処で日本人が虐殺されているという情報。まだ日本軍の手には武器がありました、が、市内の治安は混沌としていて、奉天駅の駅長室で暴動を鎮圧しようとした憲兵隊が一人残らず射殺されたり、街には早曉からひっきりなしに銃声が訝して、弾丸がレンガ壁にはじかれてピシリという音、遠くの手榴弾の爆発



音なども聴える——そんな状況下でした。「空襲こそなかったけれど、あんな切迫した

ね」
気持は内地にいた人には、とても解らないわ

以下は土岐子さんの話から――

4

南地先生が、日本の女として、辱しめをうけるよりは清い軀のうちに自決しようと思ひ出したのは、私が去った日の午後のことだったというのです。それを聞いて、

「……………」

みんなが無言のうちに頷いたのは、やがて乱入する満人暴徒に辱しめをうけた揚句、銃剣で突き殺されるものと覚悟していた時でもあったからでしょう。

「兵隊さんに戴いた自決用の薬は捨てずに持っているでしょうね。――よろしい、それを持って御真影安置室の前へ集りましょう」

みんなが一斉に立上った時、土岐子さんは思わず、

「先生――！切腹して死ぬのじゃないのですか……………」

「……………」

南地先生は少し怯んだ顔になって、

「私が皆さんにああいうことをお話ししたのは、ただその胆力を養って貰うため――」
実際には女が腹を切るなどとは出来にくい事を説明しはじめるのを、

「でも私達は日本の女ですから出来ないことではないと思います」

柄にもなく切腹を主張する土岐子さん。

――どうしてあんなことを云出したのかしら？その時、むらむらと南地先生への憎しみが込み上げて来たという他に、自分が切腹するなどという現実感もなかった故かしら。そんなことになれば、自分も痛い目を見るのは分りきっているのに、ただ南地先生を思う存分、苦しめたい。復讐したい。そんな気持ちで一ぱいだったのね――と土岐子さんは云う。

いよいよ先生は怯んだ顔になったそうですが、そのうち一瞬にして表情を更にこわばらせ、

「よろしい、それでこそ大和撫子です。……皆さん聞きましたか。日本の女として立派にお腹を切って死にましょう」

しかし――いざとなつて困った事はお腹を切る刃物の問題でした。先生は守刀に懐剣を一振り持っていました、それぞれの部屋にある持物の中から剃刀や切出、鉛筆削りのナイフまで持出しましたが、刃の鋭利なものは殆んどありません。

結局、一、二年生の無理もあり、上級生（四、五年生）六人はともかくも、下級生は青酸カ

リを飲むなり、なんなり自由ということで納得しました。

さて、いよいよとなり、講堂脇の御真影安置室の前に横一列に並んで床に正座して、御真影室の錠のおりた扉と東方を拝して後、
「では皆さん覚悟も出来ている事でしようから立派に死んで下さい。私が第一番にゆきますから、すぐ後に続いて下さい」

声を震わして、やっとそれだけの事を云うと、みんなに背を向け眼鏡を外しました。もんの腰紐をほどいて双肌ぬぐ――上級生六人もそれに倣った事はもちろんでした。

広く薄暗い講堂の片隅に、花はずかしい少女の裸形がひっそりと座をしめました。

そして、突立てかねたのか三分、四分と――常の一時間はどにも永いと思われる時間が流れました。そして突然、
ううっ……………

南地先生の口から、悲鳴とも呻きともつかぬ声が出て、短刀を腹に突立てたことが知れました。横へ一文字、――勿論、先生の背中しか見えませんが、その苦痛の様子はその白い背中（うしろ）の蒼きにも察せられました。

と先生は、

「ううっ――ッ」

床に腕をつっぱり、はげしい呻きを漏しました。どうなる事かと見守っていると、先生はもう苦しみへのたうつばかりです。

短刀は右脇腹までを切裂いている様子なのですが、それでも死にきれず、やがて短刀を左の首筋に運び、片手でぐっと掻切りました。血が音をたてて吹きこぼれ、南地先生はその中に俯伏してしまいました。まだヒュー／＼という不気味な呼吸音がしばらくは残っていました。

佐野孝子さんは顔を顰めて嗚咽を漏しながらも、手にある切出をお腹に刺して、少しづつ右へ引きながらも、なお激しく泣きじゃくる——その頬に不思議と涙のあとがないのでした。

土岐子さんも、云い出した責任もあり、もう冷静な気持も失っていたのと、かっとした追いつめられた気持とで、

——山下さん、これを使って下さい。

無言で下級生が差出した西洋剃刀を受取る

と、

「……………」
右腕をのばして、ざっくりと左の下腹へ切り込みました。

軀が前へ引き倒されそうな苦痛に耐え（し

かし、その時はさほどに感じられなかったという事です。刃を一気にお臍の右下まで引いた時、絹を裂くような音と一緒に、プリプリとした手ごたえが腕に戻って来て、

「一たん刃をとめたらもう駄目……」

お腹から軀をしばらくするような劇痛に思わ

ず、

「ぐふっ——ぐふっ……………」

呻きが口を衝いて出ました。

軀が宙に浮いて、ともすればゆれ動いているような錯覚が、劇痛とは別に土岐子さんを捉え、自分が遠く近くゆきつ戻りつする中に下級生が恐怖の極に達して、わあっと泣きはじめたのが意識されても、それも遠い気持。時々、ふっと気が遠くなつて劇痛が薄れるので、早く遠くへゆきたいゆきたいと思ひながら、仲々失神できず、……やがていつの間にか気を失つて俯伏してしまつたのだそうです。

が、結局——死んだのは南地先生と室長の孝子さん。孝子さんはお腹の疵が浅く、それだけに苦痛も少なく、泣いていたといつても気持はしっかりしていたとみえ、喉を切つていたという皮肉なこと。

泣き喚いて逃出した下級生が小使さんに知らせたので、土岐子さんは命をとりとめたと言ふこと。唯、街が混乱状態だったので、手当が随分と後になり、それで疵口はかなり大

きく残つたのだそうです。

「痛かつたでしょう。突立てるときの気持どんなだった？」

訊いてみた私に、

「その時はそうでもなかったけれど、無我夢中だったから。でも手当された時が大変だったわ。一晩中ほんとに死んでしまった方がよかったと思つたわ」

その後、残つた十三人は校長先生の家に引取られ、引揚開始までそこで過したのだそうです。

5

土岐子さんは時々、七ツになる坊やを連れて遊びに来るようになりました。

なんのおりだったか、

「南地先生には上手く復讐出来たって訊ね。しかも佐野孝子さんまで道連れにして——」

私が云うと、土岐子さんは笑つて

「そうなのよ。だけど佐野さんは可哀そうだとは思つてゐるわよ。けれど、あれがなくて一斉に青酸カリをのんでいたら皆んな死んじやったのよ。それを思えば——」

「人助けだって訊ね」

二人は大笑いしたものでした。

徒筆・迷筆

和装古典下着のあれこれ

牧

高志



昨今の急激な洋装ブーム（ということ自体が、おかしい程、老いも若きも便利な洋服時代）に反比例して次第に影をひそめて来たのが名にしよう伝統のキモノ——つまり和装である。

事実、今日の日本でキモノ姿が見られるのは、儀礼

的な正月を除けば、花柳界、料亭、一部のパ、結婚式場、デパートの売場の一部、演劇時代劇の映画などに限られてしまったのは何んとしても寂しいが、専ら活動着を要求する時代の流れには抗すべくもない。そのうち気がついた時には日本語がとっくの昔に廃れて国際語に切り換えられているかも知れない。

然し、まあ先走った冗談はさて置き、私は今曲りなりにも伝統を持ったキモノと若い女——何も特別、若いと限定しなくも脂の乗った美しい年増でも結構だが——を結んで、おまけに御存知、縄目を想定すると、落語ならぬ三題談しが即座に出来そうだが、この場合片やピンク水玉のネグリジエに対するに片や

中二図



緋縮緬の長襦袢と来れば、いずれがアヤメか
カキツバタの感がしないでもない。欲張った
物の云い方をするならば同一人が洋館に住ん
で美しい和風の寿司をつまむのと何等、変ら
ないであろう。ただ洋風、板張の上は、のん
べんだらりと曳いて歩く訳にも行くまいから
先ずはタタミの上に絹ずれの音を放つ日本間
から、その日本間では多分こうなるだろう、
いや路を歩く時にはこうして欲しいと理想の
(少々怪しいが……) 女性を主として描写し
ながら、下着の愚論を開拓してみたいと思っ
たのである。

い縛り人形である
うとまで当初、P
Rしたつもりだが
一皮むけば洋装の
下着にキモノをま
とったに過ぎな
い。
今、さりげなく
デパートのファッ
ション・ショウに
行ったとする。
神妙に観賞遊ばす大衆の女性の吐き出す溜
息は、同性モデルの顔の美しさに非らずして
満艦飾の衣裳(それも表^{おもて}ばかりの)のため
であろうと思うが、
「本当に済みません。訳あって、その袋帯を
解いて呉れません
か。そんなにお澄
ましになったつて
序でに伊達巻の一
つ位は解いても元
禄時代の娘さんじ
やあるまいし、コ
ルセットにキャミ
ソール、おまけに



中三図

ナイロン製のパンティと来りや、間違ってお
尻をお捲くりになろうとも、こちとらビクと
も驚くような男性では御座ンせん……」など
と、尻上りに半ば不可解なタンカを切って辛
ろうじて自慰的に満足せざるを得ない世の中
とは相成ったが、つい十年前、否、三十年前
頃は少くとも、そうではなかった。
早い話が春の潮干狩にも純和風な下着に満
艦飾な晴着で出掛けて行ったものである。見
渡す限りきらびやかな紅、黄、紫、青のキモ
ノ、キモノのオンパレードであった。つまり
海辺とは云うが、そのままがお座敷の延長で
あったから、その昔(半世紀前)御屋敷勤め
の御殿女中や腰元衆が、きまって必らずそう

第四回



した如くに100%裾を端折って捲り上げ、緋縮緬ならぬ色取りどりの柄模様の長襦袢を競艶展示したのであるが、潮の満干加減によつては、更に長襦袢を勇敢にかなぐり捲り上げ、真紅の腰巻おこしかピンクの裾除けを潮風になびかせて、大いに俗興をそそったものである。その折の実例スナッフ写真は他日、稿を改めて御披露することとして、今回は先ず、いちいち降さずとも用の足せる前あきパンティにナイロン製ナイロン（アセテートもある）の白又はピンクの裾除けを召した近代女性の表型（ハタチ）（第1図）

から皮切りに、本篇を封切申上げたと思うのである。

森繁久弥氏のセリフじゃないが、しみじみと明治は遠くなりにつけりゝの感の通り、フランスのさるホテルの女中さんが火事の際、ノーパンティで飛び降りて死んだり、同様に花のお江戸は東京日本橋、白木屋の火事でつい裾に気を取られたばかりに女店員があたり若い番の生命を（……と今でも語り草に引例されているが）の如き地上最大の本当にあったことを除くと、今日の女性には先ずノーパンティは絶対に有り得ないことになってしまったが、嬉しいことに独り芸能界では、女らしさの味と線を出すには、ノーパンの腰巻論を断乎、肯定しているのは実に面白い。このノーパンティ（ノーズロとも云った）は唯単に覆い物が無いという意味ばかりでは

なく、あれこれの猿又類をギチギチと嵌めたい処に女の腰の線が出る、つまりどういう訳か、お腰類を巻くと途端に歌麿調の曲線カーブがにんわりと出てくるというのである。

結局、短裁の穿き物が何枚も重なることによって断層が出来るみにくさを、上から下までのずんでん胴の腰巻なら容易に防止出来るというに外ならない。試みに夏の宵、万事、薄着の際にやってみるとすぐ判ることだ。然しそうだからと云って金網どんす数枚着の花嫁姿では、もともと表示する目的が違っているのだから、目を奪うことはあっても新婦の腰の線は披露宴が済むまでは不要であろう。もっとも、筆者は式場から新婚旅行を終始一貫、涙ぐましく献身さにも拘らず、裾から文字通り風（邪）を呼び、病床に斃れた若干の花嫁御寮を識っているが、慣れたパンティをいさぎよく脱いで、慣れぬお腰だけでも結構困るものと見える。ただ、この盛装胸高帯の和服で外をお歩きの際は、お端折から上に重心があがっているから下穿きの有無に拘らず精々蹴出し（裾除）がチラリと見える程度の裾の乱れが一番好ましく、腰巻の内側まであらわにするようでは艶消しも甚だしい。心してメンストリート（メンストリート）を潤歩して頂きたいもので

ある。

処で、或る意味で有形無形文化財でもある花柳社界に飛び込んでみると、キモノに対する感覚はガラリと活気を帯びて最もエコノミカルに通貨的な様相を呈して来る。つまり百万両が百万両の衣裳に掛目なく化けてくるから妙だ。

曾って或る有名儒学者が、心底から惚れた女郎の腰の物を、しっぽりとわが手の中に抱いてみたいと宣言なすったが、筆者が何回となく観た各所、季節の日舞に唯の一回たりと

も彼女等の古典下着（ふだん着のお腰の類）を親しく拝見するの光榮にあずからなかった——事程左様に慣れた彼女等の裾さばきは洗練されているらしい。（第2図、第3図）

また、この社会では、きものと同様に「長襦袢」というものが自己の浮沈に關係する重要なファクターとなっている。従って出の衣裳にせよ、裾からはみ出す長襦袢の色合いは文句なしにオールマイティであるから、その下に着る腰の物は勢いネグレクトタイプな存在とならざるを得ないだろう。今は故人となった

筆者の友人は、ふすまを開けてタタミに三つ指を突く芸妓の顔色を見るやいなや、

「貴様、腰巻を替えンで来たナ……」

と喝破し必らずお改めの儀を行うのが癖であつた。思うに彼は表べの長襦袢ばかりで男一匹を見損うなどという反撥心から正

々堂々と演じたに相違ないが、爾来、彼にお改めを喰った芸妓諸君は、新調にいとまがなかったという嘘のような実話がある。

しかし、同じ色恋の社会でも廓（くわく）となると、名称もぐっと江戸調となつて、湯文字と替り、肌襦袢も何んとなく正倉院時代に近くなる。

先般、惜しくも逝去した溝口健二監督が若し総天然色で撮るとすれば、真先に取組んだであろう処の大映、歌麿をめぐる五人の女、は批評の如何を問わず、われわれを大いに娯ませて呉れた映画だったが、ふんだんにスクリーンにふり撒かれる赤の色彩は、月並みな言葉だが色気たっぷりであつたと思う。

「でねえ——歌さんったら、小車花魁を湯文字一つにして……その真ッ白な肌に刺青の下絵を描いたんだって。」

「へえ……そんなもんかねえ。吉原で大文字屋の小車花魁と云われるほどの全盛が、私のような駆け出しの客まで取らなくなつていいじゃないか。」

「きつい御法度の花魁の刺青だつてさ。あたしもいっそのこと湯文字一つになって歌さんに描いて貰おうか知ら……」

「馬鹿ねえ——ヘン、面白くもない。」

てな具合に半ば棄鉢な花魁同志の会話（時



第五回

代映画、第五巻第十号、シナリオ「歌麿をめぐる五人の女」を少々改訳してみた）はどうでもいいとして、女郎の赤い湯文字がどのような細かに揺れて気持をゆすぶるかを、つぶさに観賞してみると、公開映画の手前、演出にあ



第六図

たった木村恵吾監督の云う「健康なエロを全篇から発散させて、極力ズバリ主義で押し通したい。何かと問題はあるだろうが、そうすることが歌麿の精神にも通ずることだとも思ふので……」には、矢張りほど遠かったと思われてならない（第4図）。

何故なら、花魁の湯文字が文字通り本当の「縮緬」であつたかどうか、化繊では色は胡魔かせても、あの持味は如何なレンズも描写は出来ない筈のものであるからである。余計なことだが重目正絹緋縮緬の湯文字は昭和の今日デパートの特価で購入しても二千元近く、甚だ高価なものであることを申添えて置く。

だからして、女剣劇の王座である大江美智子一座の花魁道中でさえ、似て非なる湯文字を使わざるを得ないのである。

参考に入れたスナップ写真が、歌麿をめぐる五人の女、ばかりであるためでもないが、由来、キモノと風は因縁浅からぬ関係があつて、戦前は大風の吹いた日の夕刊か、翌日の朝刊にはきまって「突風云々……」の見出しで

よく若い女が前を押えたり脛もあらわに髪を押えて戸迷いした写真が載つたものである。また、梅雨が上つて、カッと初夏の日ざしが照りつけると、わざわざ逆光線でキモノ姿の女性を月の裏側から撮つて、結の季節来る、ナンテ逃口上を書添えたりした——。要するにいずれも下着をよく御覧じろと云う意味でよく云えば美術日本の表徴の一つをねらつたものかも知れない。

さて、もう一度、歌さんのシナリオを拝見すれば、お江戸日本橋の情景を次のように脚色してある。

（風の日）カッと照りつける昼さがり。突然吹上げる川風に丁度通りかかった町娘は裾を高々と吹きあげられ慌てて前を押えている。

註：このシーンのスナップは勿論あるが今回は割愛させて頂く。

（雨の日）今日は雨、橋の袂の高札に柳の枯葉がへばりつく……とあつて通行人の描写がないがスクリーンでは御覧の通り（第5図）黒襟の下町娘が、唐傘を斜めさしに裾をからげ真赤な湯文字をからませて、勇敢に前進して来る場面がワンカット。

風の日と云い雨の日と云い誠に貞節にして而も開放的であり、男が求める女の着物姿に

しては満点に近い価値を持っている(昭和35年4月29日附日本観光新聞、参照)ものと云えそうだが、更にこれを、思い切って湯文字一枚の裸体姿を求めてみると、第6図のスナップの如く誠に派手やかな、且つ、けんらんたる姿態となるのである。見方によっては、ひどく動物的で嫌悪すべきものかも知れない。知らぬが仏、名物羽二重餅が薄汚れた姿の腰巻の上でコネられて焼かれるのと全く同じだよ……とわざわざ忠告をして呉れた友人もいたが、緋の無地に桜と、でんでん太鼓をあしらった湯文字——いや白布をつけている処から近代のお腰とも云うてよかろう——をブル

ンとふるわせて歌さんにからみつく春川ますみのストリップ振りは蓋し壯観ではあった……は筆者の偽わらざるオマケである。以上、まるで、らつきようの皮をひんむく様にきものを削ぎ古典下着に一応、焦点を絞って見たが、髪を赤く染めても英語の喋れぬ日本人である限り、衣食住を全部、洋式に替えることはナンセンスであるから、せめて憩いのわが家の夜のひとときは、キモノ姿の日本人に還ってみるのもお互い一興ではあるまいか。キモノ姿の日本人とは正統派のそれを意味し、女ならば必ずお腰と長襦袢といういで立ちを指す。決して行燈のそばで

パンティの紐をいじってはいけない。「ねえ、あたしの赤いお腰しをよく御覧になってよ。そして思い切り後手に縛って頂戴!」昼間の歌麿にはお洋服だけど夜は別。女の身体曲線がお腰に包まれたポーズって素敵でしょ。いやあーん、何してんのよ、早くあたしを縛ってえ……」と来れば和装古典下着も以て冥すべしであろう。

いつの日か陽の目を見ん文献の数々、そして忘れられて行く日の本、古典下着に想いを寄せて斯くは一筆……。

(一九六〇・五・三) — 完 —

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

悦慮雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

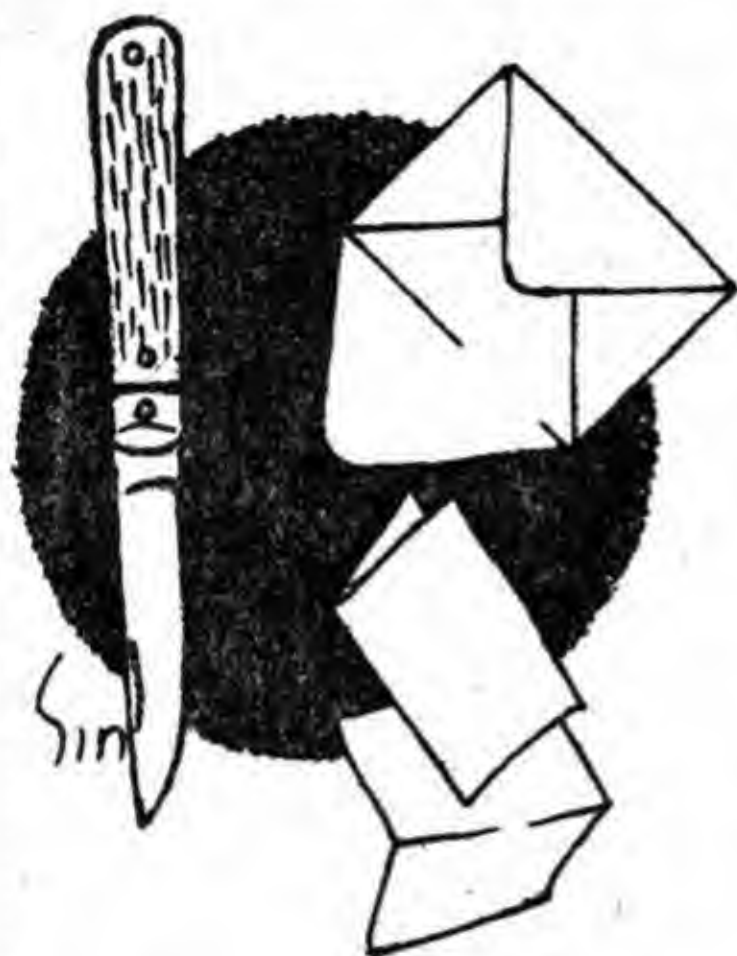
5枚1組 四〇〇円

禪刑事捜査ノート

裸

(はだかまつり)

祭



榎村 奏

青木 審・画

戦後、警察では一般市民からの投書を、かなり重要視するようになっていた。民主警察としては当然のことだが、「窓口の応待が面白くない」とか、「某巡査の私生活は不健全だ」などといった投書が多いのには悩まされた。

その投書に混って、一通の奇怪な文面の封書が配達されたのは、成人の日。もすんで漸く正月気分も抜けた一月の下旬のことだった。奇怪な文面とは、

『来る二月十一日、K神社裸祭の当日に殺人が行われる。宜しく警戒に当られたし』

というもので、犯人からの挑戦状とも、いわゆる情報提供者の警告状ともとれる内容である。

それにしても、殺人の予告とは余りにも突飛で、今流行の推理小説ならいざしらず、どうも信憑性が薄い。部内の意見が二つに分れたとしても無理のないことだったろう。

情報提供の目的ならば、もう少し詳しく書かれていなければ意味をなさないので、やはり大胆不敵にも犯人からの挑戦とみるほうが妥当だが、しかしどうもピンとこない。それで

悪質な悪戯だとする見方が七割以上を占め、一応は警戒策を構すべきだと主張する意見は、少数で押されがちだった。つまり、投書による特別警戒について、賛成と反対に割れたわけで、毎年祭礼の当日には、数万の人出を予想して、百人近い制服警官が動員されて警備に当たっている。万一、事件が起きたとしても、例年通りの警備態勢で充分だというのが反対派の見解。賛成派のほうは、いわば慎重論で、たとえ数名でも私服刑事を張込ませたらどうか。幸い事件が起らなかったとしても治安の維持という観点からすれば、あながち無駄というわけではないのだから、として仲々譲らない。

そうして協議は連日に渡ったが、少数意見ながら、たとえ非番を返上しても自分がその任に着くという高梨部長刑事の熱意が効を奏し、結局五名の私服を張込ませるということに決った。

すると、あたかもそれを知った者からのように、第二の投書が舞い込んだのである。

『殺されるのは裸男。万遺漏無きよう警戒は厳にされるべし』

まことに人を喰った文面で、さすがに刑事達も憤然とした。

裸祭は、その名の通り数千人の裸男が参道一杯にねり歩くので、その間は見物の為に架設された機敷以外は、一般の参詣、並びに立入りを禁止する。したがって裸男を殺そうとすれば、犯人もまた裸男になっていなければならない。ということは、張込む刑事の私服とは晒の六尺褌一本を指すことになる。

高梨部長は、躊躇せずに風間刑事を指名した。刑事係では、いや全署員の中で六尺褌の常用者といえば、**褌刑事**と異名のある我らの風間建太郎刑事を除いて、他には一人もないのだ。部長以下四名の張込み要員の人選は、高梨部長に一任され、選ばれたのは、風間刑事の他に、谷口刑事、あと野島、上田の両刑事だったが、旧海軍の兵曹長だった高梨は別として、残る若い三人は、褌など一度も締めたことがないばかりか、締め方さえも知らない。そこで早速、風間刑事が六尺褌の締め方を教示することになった。宿直室に集った三人の刑事は、寒さを我慢して、与えられ晒を手に、風間の説明を聞き、実演を熱心に見守る。簡単なようでいて、はじめてとなると仲々手際よくいかない。それでも三、四回、繰り返しやっていくうちに要領も判ってき、固く締め込んだところは、いずれも体格

がいいだけによく似合った。

「もう永いこと締めておらんから、俺も一つやってみるか」と高梨部長も参加したので、その有様は一寸した壮観だった。

面白がって見物に來た手の空いた刑事連中が、

「へえ、仲タイカスねえ。実にいいよ」

などと、ひやかすので、いつもは静かな宿直室も、ときならぬ騒ぎ。だが、それも

「よせよ。見世物じゃないんだぞ」

と谷口刑事が云ったはずみに大きなくしゃみをしたので、それを合図のように珍妙な講習会も終了した。

「みんな、いいか。家へ帰ってから、なお充分に練習しておけ。当日になってモタモタしているようじゃ困るからな」

そう云って高梨部長が出ていってしまったと野島が、

「あーあ、当日が思いやられるよ。どうして選りに選って寒いときに裸祭なんかやるのかなア」

と慨歎する。

「去年は確か雪が降ったぜ。寒いだろうな」

上田も溜息まじりに同調するのへ、

「オイオイ、意気地のないことを云うなよ。」

祭の当日には、あの広い参道が一杯になるほど禪男が出るんだよ。その中にや五十過ぎたオッサンだって混ってんだ。俺達ア若いんじゃないか。それに仕事となりゃア、寒さなんか飛んじゃうサ」

と風間刑事が先輩顔で云い、

「まア、まア、とにかく、祭の当日は、我ら五人、一世一代の裸男さ」

と谷口刑事がしめくくりをつけて、一同はドヤドヤと宿直室を出た。

風間刑事は、精悍な、どちらかといえば荒削りな風貌を持ちながら、どこかに少年のような人懐っこさがあつて、部内外に多くの友人が自然のうちにできてしまうというふうだつたが、その中で峰村だけは特別な存在だと云える。といって、では普通の友人とどこがどう違ふと指摘するものがあるわけではない。つまりは親友であり、よき助言者であるわけだが、しかし、それだけでは云い表せない何かがあるのだ。強いて云えば、峰村が三十をいくつか過ぎてゐるのにまだ独身であることから、随分うがった憶測をする者もいるということぐらいである。峰村がいつまでも独身を通してゐることについては、風間もき

わめて常識的に疑問を持ったことはあつたが「結婚して絵が描けなくなるくらいなら、奥さんなんか貰はんほうがマシだよ」と笑う峰村の言葉に妙に感心してしまつて、

（芸術家氣質つてもンなんだろう）と、よくは判らないながら納得してしまつた。絵は描くが峰村は画家ではない。

いわば趣味の一つで、何々会の会員というでもなく、ただ同じような無所属派で小さなグループを作つてはいた。

風間刑事が訪ねたとき、ちょうど製作中だつたとみえ、峰村は、絵具で汚れたブルースにベレー帽で現れた。

「お仕事中だったんですか」

「いや、ナニ、今一段落つてとこだ。さア、あがれよ。すぐコーヒーを入れる」

例によつて峰村は自分でコーヒーの支度をしながら、

「何か面白い事件でもあるかい？」

「イヤ、まだありません。それより、峰村さんを愕かすことがあるんですよ」

「ホウ、どんなこと？」

「ホラ、裸祭ネ」

「ウム、ウム、K神社の。あれは確か旧暦の一月十五日だろ？」

「ええ。実はネ、今年は僕も出ることにしたんです」

「出るって、君が裸男になるのかい？」

「ええ」

「フフン。さては何かわけがありそうだな」

「それは、ご想像にお任せします」

「云えないんだな、今は。ふうン。こいつア興味深々だ」

「云いたいんです、本当は。でも——」

「いいよ。どうしても訊きだそうとするほど俺も非常識な男じゃない。それに、いずれは判ることなんだろうしな……。ま、コーヒーでも飲めよ」

峰村は自分も一口飲んでカップを置くと、急にニヤニヤして、

「そうだ。俺もいくことにしよう」

「え？ あなたも裸男になるんですか？」

「まさか。俺はそんなことはしないよ」

「そうでしょうねえ」

「写真を撮るんだ——」

「写真っていえば、裸祭りを撮ったのがあったでしょう。いつか見せて貰った記憶があります」

「うン。しかし、今度は狙いが一寸違う」

「——っていうと？」

「つまり君が被写体さ」

「僕を撮るんですか！」

「群集の中の『禪刑事』。しかも、君は文字通り禪一本だ。このモティーフを逃がすわけにはいかないネ」

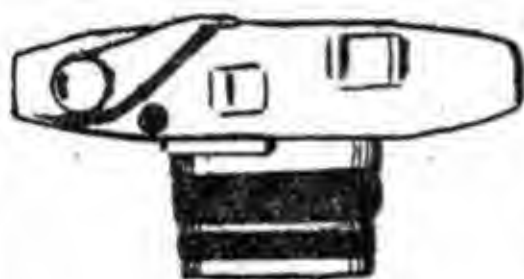
風間刑事は一言文句が云いたくなかったが、そうなるといきおい全部を喋ってしまった。峰村には絶対の信用をおいているが、刑事の立場としては、たとえ夫婦の間であっても秘密は守らなければならない。

「何だが照れくさいけど、でもどんな写真ができるか楽しみですよ」

風間は、そんなことでも云って自分を誤魔化すしかなかったのだが、その言葉が後になって実に重要な意味を持ってこようとは、さかの『禪刑事』も気がつかなかった。

二

祭礼が年々大掛りになるのは全国的な傾向のようだが、殊にそれが『裸祭』のような奇祭ともなると、市や町当局が大々的にのりだし観光事業の一環として宣伝に努める一方、交通会社は臨時ダイヤを組んで



車輦を増発、参詣人というよりは見物人の動員に拍車をかける。



K神社の裸祭の呼びものは、何といっても、延々二時間余に渡る裸男の神事だが、気の早



い若い者達は寒さもものかわ、血気に委せて朝から裸で街に現れる。普段の日なら気違いと間違えられるか、警官に見つかればただではすまぬ禪一本で、目抜きの大通を濶歩する姿も珍らしくないし、そのままの恰好で縄暖簾をくぐったり、中には平気で電車やバスに乗る者もある。警察もその日だけは目に見えているらしいが、見馴れた土地の者は別として、はじめて目撃する人には神事以上に奇観として映るのだ。昼近くなると早くも酔っぱらった裸男が一般の参詣人（といっても多くは顔見知りの男だが）を寄ってたかつて裸にし、勇敢なのになると、警備に当る制服警官にまで悪戯して、帽子を奪ったり警棒をひったくったりする。昔なら「オイ、コラ」で連行できるが、今ではそうもいかず、苦笑しながら一生懸命に宥めすかして大汗をかいている警官の姿は、それが厳めしい制服であるだけに、一層気の毒だし、おかしくもあった。毎年のことながら峰村は、そんな光景を見て歩くことに、余人には判らぬ楽しみを味っていた。

峰村が秘かな楽しみを求める場所が、もう一つある。それは一般の人には余り知られていない裸男達の脱衣所だった。脱衣所といっ

ても、それは付近の民家が家中を開放して一日だけ開業するもので、特別な設備があるわけではない。近い者なら自分の家から裸になって出ればいいが、乗物を利用して来る者は、そうはいかない。数軒ある脱衣所は、どこも超満員で、部屋へ入れない男達は、庭先で禪を締める。何のことはない、銭湯の男湯の脱衣場が現出したようなものだが、祭気分酔っている連中の天衣無縫な振舞いは、見ているほうが恥しくなるほどで、その騒がしさといったらなく、峰村みたいな異端者がまぎれ込んで、誰一人、気にかける者もない。かといって、余り長居しても気がひけるから、次々と回り歩くが、一時間や二時間はすぐに経ってしまう。脱衣所の光景は、本当は神事の果てたあとのほうが壮観で、泥ンこになった裸男達が帰りを急いで一時に殺到し、小さな内風呂の順番が待ちきれない人々は、井戸端に先を争って群がり、あるいは庭や道にまでバケツ、たらいの類を持ちだして水を浴びるのだ。神事の昂奮の醒めやらぬ彼等は、文明人であることを忘れたような傍若無人さで、偶に「おい、エチケツトぐらいは守れよ」などと云う者でもあれば、忽ち罵声が飛び、理窟にならぬ理窟で逆にやりこめられてしま

うのだった。とにかく、凄じょうな眺めだが、峰村は、さりげない振りをして、最後の一人が帰るまで脱衣所回りをやめないのである。風山刑事と打合わせはしてなかったが、峰村は社殿に近い脱衣所へ入っていく刑事達の一行を、うまい具合に見つけることができた。風間を含めて、いずれ劣らぬ屈強な青年四人に、一人の肩巾の広い中年の男を。しかし誰も、まさか刑事だとは思えない。そのうえ、裸になれば、なおさらである。

既に脱衣所は満員で、縁先で手早く禪を締める、裸になるだけですんだ風間を先頭に狭い通路を出てくる刑事達を待ち伏せて峰村は、すかさずシャッター・ボタンを押した。あとを追って参道に出たところを背後から狙う。老若男女の参拝者に混って、三々伍々、裸男達も参道を往ったり戻ったりしているが、大抵は四、五人が連れだち、寒さをまぎらす為に「ワッショイ、ワッショイ」と、かけ声をあげて走っていくものが多い。そうかと思うと、陽溜りにたむろしてふざけ合っている男達もある。

刑事達の体は、逞しさににおいては五人共に遜色がないが、筋肉の締り具合や均斉のとれている点では、欲目かもしれないが、風間が

断然、光っていた。峰村は改めて満足し、敏捷に位置を変えては次々とシャッターを切った。

そのうちに、そういう手筈になっていたものか、風間刑事が単独行動に移ると、峰村はソツと近寄って、

「かまわんかね？ 話しかけても——」

「いいですよ。でも、よく僕が判りましたね」

「俺がだよ、君を見逃す筈がないじゃアないか」

「しかし、この雑踏ですからね。で、もう撮ったんですか？」

「うん。お仲間と一緒にところを五、六枚」

「早いなア……」

「サア、今度は君一人のところを四、五枚——。アア、君は自由にしていたまえ。俺のほうで勝手に撮るから」

峰村が続けて三枚ばかり撮り、更に離れてファインダーを覗くと、どこから谷口刑事が現れ、風間の耳に口を寄せた。

「まずいよ。知った奴に逢っちゃった。『何かあったんですか？』って訊かれてギョッとしたね。『酔狂さ。こんな恰好で仕事でもないじゃないか』って、とぼけといたが、ヘンな顔をしてやがるんだ。おまえのほうは大丈

夫なンか？あのカメラを持った男……」

「心配ないんだ。あの人は」

「そうか。そんならいいが。とにかく早く何とかならんかなア。雪は降らなくて幸いだったが、ヤケに寒い日じゃないか」

「当りまえサ。二月に裸だもの」

二人の若い刑事は、ツイ本音を出して頼えながら情けなさそうに笑い合ったが、

「皆さん。まもなく午後一時になりますが、一時になると一般の参詣を禁じ、参道内の通行、立入りはできなくなりますから、さようご承知ください。参道内は裸男で一杯になります。本日の祭礼を最後まで楽しく意義あるものとする為に、どうか協力ください——」と警備班のアナウンスが始まると、サツと職業意識を取り戻し緊張した。

この日、集まる裸男は勿論、氏子の青壮年が主体となるが、参加は自由だから、沿線の市町村からも大勢来ているし、その中には自慢の刺青をこれみよがしに見せびらかすヤクザもいれば、単車で遠征して来る愚連隊もある。こんな状況の下でもし予想通りの事件が起きたとしたら、現行犯のスピード検挙でもない限り、容易ならざる事態になりかねない。

風間刑事は一抹の不安を消し去ることができなかった。

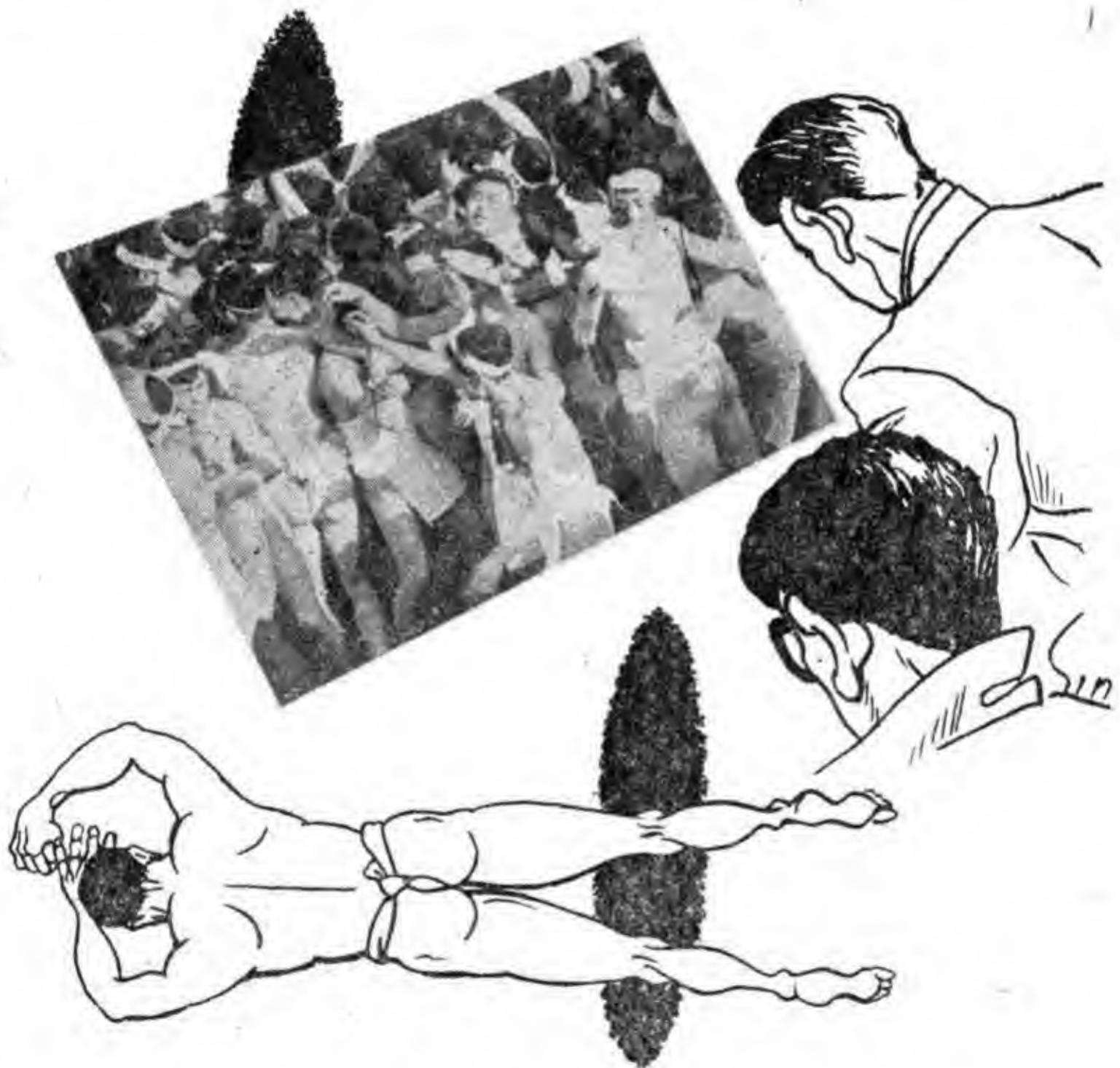
「裸男の皆さん。今日のあなた方は、神に仕える神聖な行事を行うのです。あくまでも敬虔な気持を失わず、万一にも事故などを起して、神域を汚さぬように、お互に気をつけてください——」

余り上手ではないアナウンスだが、係の警官の声は真剣である。もし、この裸形の大群集の中に、あの殺人予告をした犯人がまぎれ込んでいたなら、どんな気持でそれを聞いているだろうか。

棧敷席へ上った峰村は、なおも風間の姿をカメラで追っていたが、ぞくぞくと網集してくる裸男の群に、とうとう見失ってしまった。参道は既に裸形の大集団で一杯に埋まり、喚声をあげて揉み合いながら、少しずつ本殿の方へ移動していく。万に近い肉体が押し合い、ぶつかり合って、熱気が渦を巻き、鉄の焼けるような臭気が砂埃と共に噴き上る。その頃になると、周囲から一斉に水がかけられるが、熱した肌からは忽ち蒸気を吐く凄じさ。間断なく飛沫を散らす水は、みるみる参道に黒い泥濘をつくり、裸男達の足元を汚しているが、躍動する上半身は益々艶やかに輝き光

るのだった。

裸形の渦の中心が本殿近くまでいき、棧敷の下の辺りが、やや疎らになったとき、一人の裸男が地面に這いつくばるようにして倒れているのが見えたが、そんな事は、さして珍らしいことではない。すぐにも起きあがって駆けだすものと思ったから、誰もが気にもとめなかった。峰村でさえ、起きないうちにと急いでカメラを向けたが、ファインダーの中へ制服の警官がとび込んで来たので、はじめ（オヤ）と感じた。すぐに立ちあがりそうもないので転倒したはずみに軽い脳震盪でも起したのかと近寄った警官は、ベッタリと



泥に塗れた男の胸が妙にヌラヌラした手触りなのにハッと、それが血だと判ると思わず蒼くなった。

三

遂に予告は実現した。数万の観衆の目前に於て祭を血で汚す惨劇が行われたのだ。

被害者の杉山茂夫は氏子の青年だが、定職がなく、酒癖が悪くてよく喧嘩をするので、近所の評判はよくない。中には「あんな死ざまをするのも自業自得だ」という者もあるくらいである。当然、大小の恨みをいくつも他人から受けていたわけ、怨恨の線が最も固いと思われた。

致命傷は心臓部の一刺しで、兇器に使われたジ

ヤック・ナイフは死体から二、三十米離れた本殿寄りの参道の端から発見されたが泥に塗れてさんざん踏みにじられた為、完全な指紋の検出は諦めざるをえなかった。ナイフは鋭利に研ぎすまされていたが、相当に古い品（戦前の製品と思われる）で、出所をつきとめることは殆んど不可能だ。

せつかくの特別警戒が無に帰し、まんまと犯人に翻弄された形の高梨部長刑事は地団駄を踏んで口惜しがったが、実際問題としてそのような状況下では、たとえもっと人員を強化して警戒に当たったとしても、犯行を未然に防止し得たかどうかは疑問である。だとしても、衆人環視の中の予告殺人とは、警察を嘲弄するにもほどがある。その憤激が係長をはじめ刑事の面々に、（犯人をあげずんばおかじ）の感慨を一段と強めさせた。

杉山が前述のような人間だったから、容疑者の割出しには苦勞を要さず、有力と思われる者を絞って直ちに三人の男が揃った。三人共に動機があり、いずれも当日、裸男として参加している。だが、いかに取調べを進めていっても、その中の一人を犯人とするキメ手がないのだ。例の投書の筆跡鑑定の結果も失望だった。というのは容疑者の中には該当者

がなかったからだ、しかし必ずしも犯人自身の手で書かれたものとは限らないから、もしそれを書かされた人物が判明すれば、そのほうから割れてくる望みはある。

だから投書の主だと云って自首して来た少年があったときは、係官一同スワと色めきたった。だが、結果はもっとみじめだった。少年の投書は全くの悪戯だったのである。高年生の彼は推理小説に熱中しすぎて、ツイあんな架空の殺人予告をする気になったと云う。勿論、警察が本気にするとは思っていなかった。ところが偶然にも予告通りの事件が起き恐ろしくなって申しでたというわけだった。念の為、少年のアリバイを調べてみると、祭にはいいっていないことが確認され、係長が説諭を与えて帰宅させたが、残念ながら捜査はそれで壁に突き当たってしまった感じだった。

「苦いね。このお茶は」

上田刑事の注いだ番茶を一口飲んだ高梨部長は、必要以上に顔をしかめた。

彼の不気嫌さは誰にもよく判る。警察年令の永い彼は、昔の取調べ方をよく知っているだけに、有力な容疑者を目の前にしながら、証拠のない悲しさで手も足も出ない状態がどうにも我慢のできない口惜しさに違いないの

だ。

電話のベルが鳴り、受話器を取った上田刑事が、

「風間さん。あんだだ。峰村とか云ってますよ」

と云った。

風間刑事は、何となく部長に気兼ねして電話口にてだが、二言三言、応答しているうちに急に面を輝かせ、電話を切ると同時に部長へ向きなおって、

「部長。友人からの電話なんです、何か手掛りがえられそうなんです。とにかく、すぐにいって来ますから」

と云うなり、オーバーを驚嘆みにした。

事件発生以来、風間は峰村に逢っていない。したがって峰村は新聞報道による以外、事件の知識を持たない筈だ。しかも一頓挫とはいながら、捜査は容疑者の口を割らせるだけの段階まできている。数々の事件によって峰村の推理力には全幅の信頼をおいている風間だが、またそれだからこそ、勢い込んで署をとびだして来たのだが、峰村の家が近くなるにつれて、余り期待は持てないような気がしてきた。

待ちかねていた峰村は、風間刑事の顔を見

るなり、

「どうだ、容疑者は口を割ったかね？」

「いいえ。それで苦勞してるんですよ。昔のように拷問で泥を吐かせるわけにはいきませんしね」

「つまり証拠が無いんだな」

「それですよ。弱りました……」

「ねえ君、もし俺がその証拠を握っていたとしたら、どうする？」

「何ですって？　しかし、どうしてあなたが――」

「これを見たまえ」

そう云って峰村がさしだしたのは、六ッ切に引き伸した写真である。画面全体が裸の群で埋めつくされた、裸祭のスナップであることは一目で判った。

「これが――？」

「ホラ、右端にいるこの男」

「あッ！」

風間刑事の口から、思わず叫びがついてでる。そこには、揉み合いながら片手をヘンな具合に曲げた裸男が写っていて、よく見ると、その手にはジャック・ナイフが握られているではないか。

「俺もそいつを発見したときは愕いたよ。あ

のとき、機敷の上から望遠レンズで君の姿を追っているうちに、だんだん混雑してきて君を見失ってしまった。それで一旦は撮影を中止しようとしたんだが、フィルムが大分余っているんで、やたらにパチパチやった中の一枚にこいつがあつたってわけさ。偶然の契機が犯人をあげる。こんな事件があつてもいいだろう」

峰村が得意気に喋るのに比べて、さっきから凝ッと写真に眼を当てていた風間は、頻りに首をひねりはじめた。

「君、どうしたんだ？　バカにうかぬ顔をしてるじゃないか――」

「ええ、どうもヘンなんです」

「ヘン？　て云うと、その男は容疑者の中にいないとでも云うのか？」

「そうなんです。少くとも三人の中の一人じゃありません。もしそうなら、これで一挙に解決なんですがねえ。こんな動かぬ証拠があるんだから――」

「とすると、別に犯人がいるわけだな」

「そうです。しかし、三人の容疑者が全部白だと判ただけでも、実に重大なことです。

捜査は、はじめからやりなおしですが、今度はもう犯人の顔が判ってるんですから、時間

の問題ですよ」

「そうだ。犯人もこの写真があっちゃあ運の尽きさ」

「そうですとも！　とにかく、この写真いだいていきます」

立ち上りかけた風間刑事は、不意にビリッと電流に撃たれたように表情を硬ばらせた。

「思いだした！　峰村さん。この男が判りましたよ」

「そうか！」

「さっきから、どうも見たような顔だと思っていたんです。でも、そうだとすると、こいつは妙だ……」

「誰なんだ、そいつは？」

「被害者ですよ」

「被害者？」

「そうです。殺された杉山に違いありません。どういふことでしょう、これは――？」

「ふうン、被害者と犯人が同一人物とはね……」

余りのことに二人は顔を見合つたまま暫くボンヤリしていたが、腕を組んで峰村は考え深そうに、

「その杉山という男は、自殺するような人間じゃアないんだろうな――？」

「とんでも！ 人を殺すことはあっても、自殺なんかする奴じゃありませんよ」

「人を殺す——そうだ、こういう推理は成り立たんかね。つまりだ。杉山は誰かを殺す目的で晒の腹巻にナイフを忍ばせて祭に行く。

揮一本といっても腹巻を締めている者は大勢いるし、その中へ貴重品を入れたりしているから、誰にも怪しまれる懸念はないわけだ。

杉山は祭が最高潮に達したときを狙って、揉み合う振りをしながら相手に近づき、素早く背後から刺すつもりだった。衆人環視といってもあの混雑だ。祭の興奮で誰も一人々々の細かい動作に注意を払っていないから、それが一つの盲点になる。そこを利用した犯人は仲々脳がいいが、しかし誤算があった。それは、激しい動きの渦中にいて、目標を正確に狙うことがいかに困難であるかということだ。刺そうとした瞬間に横から突かれて腕が振れ、狂った手許をたてなおそうとするまもなく、今度は後から強く圧された。それで一巻の終りさ。他人を殺そうとして自分を刺した滑稽な死体は、まだ生きているようにそのまま揉まれていて、やがて倒れる。だが皮肉にも彼自身の予想通り、誰もそれには気がつかない。落ちたナイフは蹴られたり飛ばされ

たりしながら、現場から離れた場所へ持っていかれた。これが恐ろしき茶番劇の筋書だ。

どうだね？」

風間刑事はふうっと大きな溜息をついて、

「イヤ、実に愕きました！……」

「ハハハ、しかし、こいつはあくまで部外者の推理だよ。俺はこの写真を提供するだけさ。あとは君達に委せたほうがいい」

「感謝します。じゃ、とりあえず署へ戻りま

すが、あらためて、また——」

「ああ、待ってるよ。君の写真も見せたいし……」

慌しく風間刑事が戻っていくと峰村は煙草を啜え、もう事件のことは忘れてしまったように、風間の揮姿のスナップを卓子の上に並べ、独りでニヤニヤと悦に入った。

(完)

限定版特別号 第一弾！

「緊縛フォトアラベスク」

略号「あらべ」 特価 五百円

△収載内容▽全部縛られた女体のポーズばかり二十六項目、写真七十七葉一挙掲載！
限定版特別号の第一回発刊として、昨年度上半期撮影の美人モデル嬢の緊縛ポーズを網羅し文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐きわまりないモデル嬢の緊縛姿にて埋めました。
(限定版のため一般書店へ出廻っておりませんから直接発行所宛お申込願います。)

増刷出来！乞御申込

限定版特別号 第二弾！

「緊縛写真と緊縛画集」

略号「緊縛」 特価 五百円

△収載内容▽四馬孝傑作緊縛画集二十五項目、二十五葉と「素晴らしき写真集」緊縛写真十九項目、八十四葉とを以て絵画写真が渾然一体となつて奏でられる限定版の醍醐味！
発売以来大好評にて圧倒的なお申込を受けました。一時品切中の所、今回若干増刷！まだごらんにならない方は、売切れぬ中にお早く！



マゾヒズム百景

馬場好男

第三十五景 女が階段を上る時

近所にデラックスな喫茶店ができた。私は好きでよくあちこちコーヒーをのみに行くが、此処へ二、三回行っているうち、我々愛好者ならずとも男にとっては特等席なる場所を発見をした。それは豪華なテーブルと椅子が点々とうまく仕切られたボックスに収められている店内の一カ所に、二階に上る階段のすぐ脇にある一つのボックスである。すました顔で此処へ座を求め、素知らぬ顔でコーヒーをのみ乍ら、この階段を上ったり降ったりする女性を、下からチラ／＼と眺める事が出

来るのだ。勿論、こういう処に来る女性は若い人ばかり。それに最近ではショートスカートと来ているから願ったり叶ったり?

ましてボックスの中とあれば、他の座席の者から「おや、彼奴、チラ／＼と上ばかり見てやがる」と気ずかれる心配もない。

まして大都会の男女は自分達の事で一杯で他人の事などかまっておれない。素晴らしく形のいい脚の若い女性が此の階段を上る時、私は心ひそかにその脚にキスを送るのだ。

ふまれてみたい、蹴られてみたい。そんな願望は果されないが、僅かの時間、夢をよんではコーヒーの味をたしなむのも、人生のよ

ろこびの一つともいえる。

映画「女が階段を上る時」の中で、私が気をひいたのは高峰秀子の圭子とその実兄になる織田政雄である。此の兄妹は兄の方がんでお人好しのグズと来ているから女房に小児マヒの男の子を残されて逃げられてしまう。そしてバーの雇われマダムになっている妹にいろ／＼と助けられている。此の關係に非常に興味をもったのである。此の兄と妹は仲がいいが、兄の無心も時によっては妹のバトウを買う。それに対しては口答え一つ出来ず妹に頭を下げている兄だ。妹が病気で臥しておれば、肩や腰を揉んでやる兄と、それをさせる妹。これを作りかえてゆけば一つの面白い話が出来そうである。マゾの兄とサドの妹、何もマゾ、サドにしくなくても、気の弱い兄と気の強い妹、此の二人の生活を結べば到る所に我々好みのものがみられるわけである。

第三十六景 浣腸マゾ

本誌によく浣腸の記事や告白、その他が出ているが、正直な処、私はこういう読物は余り興味をもたず、目も殆んど通さない時さえあったのだが、実は此の処、私は痔を悪くして一寸した経験をふみ、多少、これらの人々

の気持を感じとったものである。

私のは脱肛性内痔核で少々タチの悪いもので、勿論手術となったのだが、此の手術前、私は生れて初めて（?と思っている）の浣腸をされたのだ。

肛門医院の看護婦は、こんな処ばかり見ているのだがその気持はどうだろう等とよいいな事を考えていたが、二十二、三才の割と顔立ちのよい看護婦に「足を上げて下さい」と浣腸器をつきつけられていわれた時には、いささか女性のいう「しゅう恥」を覚え、不安をかくす事が出来なかった。

顔をホテらせていると此の看護婦、チラと時計をみて、私に

「今すぐですと薬だけ出て何にもなりませんから二、三分間はよく我慢してから行って下さいね」

と、やさしい笑顔でいった。

私は、ハアとうなずいてじっと耐えていた。

「トイレはあちらです」

と、その看護婦は私にいつて、又やさしく微笑んでくれたが、此の時、私は浣腸マゾという言葉を胸に思い起したのである。

額に汗し乍ら美しい女性、いや女王の鞭の許に耐えているとしたらどうだろう。私はこ

の看護婦をいろ／＼なものに想像したりしていたものである。話は浣腸の事といわれるが手術を施行の時には、此の看護婦が汗をぬぐってくれたり、みっともない恰好だが、あくらを組んで膝を抱えている私の手を抑えてくれたりして、上から覗かれればのしかかられる事を想い、薬をのませてくれれば、女神の神酒と、痛さを耐え乍ら考えているのだから全く私もいい気なものである。

手術後、カーテンで仕切ったベッドに休まされ看護婦に毛布をかけてもらい乍ら「三十分も御休みになると落ちつきます。どうぞ御ゆっくり」

といわれて私は眼をとじ乍ら、不思議に此の看護婦が手に浣腸器をもって、私に足をあげさせたポーズを思いうかべたものである。

勿論、私には此の性癖はもてるまいけれども、実際に体験してみると自分のマゾなど、まだ／＼井の中の蛙何とやらという諺を思ったりするのである。

それだけに此のK誌が、幅の広い編集方針をとっている事は、偉い事だと思う。ただ何としても此の誌が悪用され、評判そのものが早い話、悪いのが全く残念だが、医者がカルテにドイツ語で書く様に、K誌も何か、スタ

イルだけでも専門的な風格をこらしてみたらとも思うがどんなものだろうか。誌名にしてもKKだけで通用するとも思うのだが――。

扱て全然、話をそらせてしまったが、私が思うのに、先刻の看護婦の場合、始終、微笑をもって私に接してくれたのは勿論、患者をいたわるためであろうが、手術の最中に男が顔をしかめたり、或は、きまり悪げに浣腸をうけるその顔をみて、別な意味で笑ったとしたら、これは一寸面白いものである。

私がベッドに休んでいる時、カーテンに仕切られていたから顔は判らないが、別の男の患者が、今日で四日間、通じがないと訴えていた処、

「それじゃ浣腸をしてあげましょう」と簡単に医者は看護婦に命じている様子だった。

そのうち自分も、もう一回位?そんな事を考えもした私だった。

只、断っておくが、此の景は手術後三日目に書いている、正直な話、その時は痛さを耐えるのに無我夢中で、何の感興もなかった事を伝えておく。

×

×

×

時代小説

狼谷の魔女

塔婆十郎



1

武州と甲州の国境、雲取山の山中――。

ここはその中でも狼谷と呼ばれる深い谷間にある細道だった。

夜である。

だが、元和六年三月の満月が、いまこの深山の真上にあつて、樹葉を洩れる青白い光りが、雑草におおわれた山道を昼間のように照らしていた。

（――おや？……）

旅姿の源七は行く手の草むらに、白く輝やくものをみて足をとめた。じいッと眼をすえて、その異様なものを確める。

（――女だ！裸の女だ！……）

白く輝やくのは、月光を浴びて横たわる女の裸体であつ



た。死んでいるのか、草むらの中に、身動きもせず突っ伏している。

源七は小走りにかけて、その女に近寄り、注意ぶかい眼で凝視した。

わずかに、腰のもの一枚をまとっただけの若若しい肉体である。肩のあたり、背中から腰にかけてこのむっちりしたまるみは、この深山の中であるだけにまるで魔物のような妖しい美しさであった。

「おい、おい……」

源七は声をかけた。が、返事はない。

（——死んでいるのか？……）

源七は、女の肩に手をかけて抱き起こす。肌には、ぬくもりがあった。

と——閉じていた女の眼が、ふいにパツとあいた。

「ああ、こわい！」

源七の胸に、かじりついたのだ。源七はおどろいた。

「なんだ、どうしたのだ、生きていたのか」

「く、く、くま、熊が、そ、そこに！」

女は、恐怖にひきつった眼で、うしろの笹藪を指さした。

「なに、熊だと！」

源七は、ギクリとしてふりむいたが、なんの気配もない。

「そうか。お前、熊に襲われたのか。だが、どうしてそんな裸でいるのだ？」

「熊にであつたら、裸になって死んだ真似をしろと教わったの」

女は、恥しげに身をくねらせていった。

「ふうむ？」

源七の眼が、疑惑の色で女をみた。

なるほど、二、三間さきに、女の衣類が点点として脱ぎ捨ててあった。

と、源七の背後の笹藪が、こんどはガサリとうごいた。

「こわい、はれ、そこ、そこに！」

女は悲鳴をあげて、源七の胸に顔をうずめた。裸の肩を、源七に押しつけるようにするのだ。

「風だ、風で藪が鳴ったのだ。心配するな。それより、早く着物を着たらどうだ。風邪をひくぞ」

源七は、女が脱ぎ捨てた衣類を親切にひろい集めてやった。

若い源七の眼には、この女のとびでるように大きく突きだした乳房が、まぶしくてならないのだ。

2

女は紫地の小千谷縮を体にくるくると巻きつけ、その上から細帯でとめた。

肌着もろくに着ていない様子である。奇妙な女だった。

「ああ、どうやらこれで生き返ったようだ。旅のお方、どうもありがとうございます」

女は黒眼がちの大きな瞳を妖しくうるませて、礼をいった。

「こんな夜ふけに、山奥の道を女の一人歩きか。熊だからよかったものの、狼だったら、もうめちゃうくちに喰い殺されていたろう。お前さんはいったい、どここの何者だ？」

源七は鋭い眼で女をみた。

「秩父から三峰を越えて、塩山というところへいく旅の途中なんだけど、連れにはぐれたばかりに道に迷い、こうして難渋しているのですよ。——申し遅れたけど、あたしの名はおりん、といいます。これから先、まともな道に出られるまで、旦那のお供をさせてくださいな」

おりんと名のった女は、人なつこい微笑をうかべていった。

「おれも先をいそぐ旅だから、とてもお前さんと足を合わせるわけにはいかない。ついてくるならば、勝手についてくるがよい」

というと、源七は先に立ってスイスイと歩きだした。

飛ぶような速さで歩くのだが、おりんも負けずについてくる。

（——この妖しい女、どこかで、まいてしまわなければ、まずいな……）

源七は胸中でつぶやいた。

秩父の乱波、仙十郎の住家は次第に近づいてくる。

——この源七という旅の男……実は伊賀者であった。それも、伊賀の頭目、笹山森兵衛の手の者である。

源七が、はるばる伊賀の国から山伝いに秩父へ現われたわけは……

近頃、秩父の仙十郎が、乱波仲間の掟を破り、百姓町家の財産を乱暴な手口で強奪しているという噂を聞きこんだからであった。

乱波同志の掟では、里へおりて一般の村人たちの物を盗むのは、ある程度ゆるされていた。

日頃は半農半盗で、いざという時には武將に雇われて敵地へもぐり、諜報活動するのが彼らの生活手段であった。

しかし、集団盗賊となり、山賊と化してしまつては、乱波全体の名誉にかかわることである。これは厳禁されていた。

その命令を、この秩父の乱波どもが破っているらしい。

そこで伊賀の森兵衛は、その実情を探ぐるために、配下の腕きき源七を密偵として放ったわけである……

「——ちよいと旦那、ずいぶん足が早いねえ。まるで乱波者のよう……」

おりんが、源七の背中であつた。

「旅馴れているからよ」

源七はギクリとした。ますます怪しい女である。源七はいっそう足を早め、風のように走りだした。

伊賀の源七には、もう一つの重要な使命があった。

それは——秩父の隣りに位置する甲斐の透破、轟重内一派が近頃勢力をのばして近在の同族を狙っている。という噂をつきとめることである。

忍者同志の争いは、凄惨冷酷である。それは、血が血を呼ぶ争闘となつて、世にも陰惨な地獄図絵を展開する。だから、仲間の秩序を乱す反逆者は、勢力をのばさないうちに、制裁を加えなければならぬのだ。

秩父の仙十郎と、甲斐の轟重内一派を内偵する——という難しい重要な任務をもつてこの山中を進んでいく源七であつた……。

「ちよいと、旦那。待っておくんないな。そんなに早く歩かれては、息が苦しくてついていかれやしない」

おりんが、源七の帯に手をかけていった。

「嘘をつくな。息が苦しいという口のきき方ではない」

源七は、女にかまわず、ぐんぐんと足をとばしていく。

3

いよいよ、めざす仙十郎一族の部落が近づいた。

(——まずいな。この女、まだ離れない)

源七が腹の中で舌うちして、チラリとおりんをふり返ったときである。

まわりの樹蔭、草むらから、いっせいに、

「わあッ!……」

と、かん声をあげて、十数名の男たちがとびだしてきた。源七がくるのを、待ち伏せしていた気配である。

「しまった!」

いつもなら、姿は見えなくとも風のそよぎだけで、敵のひそむのを知る源七である。

おりんに気をとられていたのが、不覚であつた。

「ひゃあッ!」

おりんもこの襲撃に悲鳴をあげた。逃げる足もとを、男たちにすくわれて転倒した。

源七はすかさず腰の脇差を抜いた。だが、その刀は前後左右から山猫のように襲いかかった男たちに、いちどきに叩き落とされた。源七とおりんの上に、まるで投網でもかぶせるように、男たちが折り重なつた。

二人の腕はうしろにねじあげられ、縄がキリリとからみつく。

「お前たちは誰だ。どこの奴らだ。うぬッ」

源七は、わめいた。

「なにするんだい。痛いッ。あれえッ」

縄の苦痛におりんも泣き声をあげる。

男たちは、しかし無言のまま、二人の縄尻をとって引きたてる。

「くそッ!」

源七は齒がみした。男たちがかけた縄には普通ではない術があつた。

源七が思った通り、つれてこられたのは仙十郎の小屋であつた。このあたり山間にひらけたわずかな平地である。同じような形をした小屋が十幾つも建ち並んで、部落の様相を呈していた。

「——お前ら、どこの何者だ。この夜ふけに、しかもこの山奥へ何用あって踏み入ってきたのだ？」

仙十郎が、一族の頭らしく、落着いた貫禄で、ひげだらけの顔を源七にむけた。

「旅の者だ」

源七は、むっとりとして答えた。

「ただの旅人ではないな。本当のことをいったらどうだ」

「……」

源七は、唇をへの字にむすんだ。しぶとい顔つきだ。そのつら魂が、この男の普通でない素性をあらわしている。

「ふうむ……。いわないのか」

仙十郎の眼が、源七からおりに移った。

その白い顎に手をかけ、ぐいと仰向かせるのだ。仙十郎のその手を払いのけようとするが、両手をうしろに縛りあげられた身は、その抵抗もむなしい。

「な、なにをするんだよ！」

おりんは口で反抗した。

ここへ引きたてられるまでに、髪は乱れ、襟もとはひろがって、しどけない姿になっている。

むっちりとのぞいた乳房の上に、縄が二巻き、三巻き、ぎゅぐゅと喰いこんでいる眺めは、むざんなものであった。

「お前がいわなければ、この女房の口からいわせてやるぞ」

仙十郎が、うすら笑いをうかべていった。そして、その節くれだつた手を、おりんの胸もとのほだけたところへ、ついッとのばす。

「あれッ！」

おりんは、肩をよじった。

「待て。この女は、女房でも何でもなし。ただの道連れだ」

源七がいった。

「ふん、何をいう。夜ふけの狼谷に、女房でもない女と道連れになんかなる筈があるものか」

仙十郎は、せせら笑った。

こんなことをしては時がたつ。めんどろだ、女を責めてこの怪しい二人連れの素性をあばいてくれよう……と仙十郎は思った。

「おい、この女を裏の物置き小屋の中へ運びこむのだ」

仙十郎は、部下の一人に命じた。

「なにをするのさ。あたしは本当にこの人とは何のかかわりあいもない、旅の女なんだよ。ひどいことをすると、承知しないよ！」

おりんは、首をのばして仙十郎に訴えた。

しかし、男の一人は「おう！」と返事をする、おりんの縄尻を荒々しくつかんだ。うしろ手にくくり合わされたおりんの両手首が背中に、たかだかと引きしぼられた。

「ううッ、痛ッ！」

おりんの顔は、苦痛にゆがんだ。

「さあ、素直に立て。こっちへくるのだ」

縄尻をとった男は、容赦のない力で、おりんを引きたてていった。あとに残った源七も、縄尻をとられてこの小屋の外へ引きだされた。

部落の小さな広場に、巨大な一本の楠が生えている。源七はその大樹の根もとにくくりつけられた。

一夜をここでさらされるわけである。山が深いので、このあたり

夜露も重くはげしい。縄が夜露に濡れば、自然に源七の身を責めあげるという仕掛けなのだ。

(——不覚だった……)

源七は齒がみしたが、この男も伊賀の忍者であった。身を大樹に



に、妖艶ともみえた。

「……」

仙十郎の問いに、おりんは無言である。

「ふふふ……。いわぬな。いわぬとあれば、いよいよ臭い……」

いましめられながらも、まだ心には余裕があった。

(仙十郎のまぬけめ。あんな女をいくら責めたところで、おれの素性がわかるわけではないのに……)

源七は腹のなかで、せせら笑った。

4

物置き小屋の中で、仙十郎とその部下たちが、おりんに加えた責めは、凄惨なものであった。

「さあ、いえ、いわぬか。あの男は何者なのだ。何の目的があって、この狼谷に足を踏み入れたのだ？」

仙十郎は、どっかりと床几に腰をすえていった。その足もとには、縛られたままのおりんが、うなだれて坐っている。

髪がくずれ、顔の前に垂れ下がった数本の毛を、かっきりと唇に噛んだおりんの白い面貌は、熟れきった女だけ

仙十郎は、残忍なうすら笑いを洩らした。彼の左右には、四、五名の屈強な部下がひかえている。仙十郎は、その中の一人に、顎をしゃくって命令した。

「土呂助、やれ」

「へい」

土呂助と呼ばれて進み出たのは、筋骨たくましい、岩のような大男だった。

「裸にむいてな、秩父の乱破のおそろしさを存分に味あわせてやるのだ」

「へい」

土呂助は立ちあがると、のっそりと、おりんの背後にまわった。いったん縄目を解くと、それから、おりんの身にまとったものを手荒くむしり剥ぐ。

「あれッ！」

一度自由を得たおりんは、別人のようにはね起きて抵抗した。この小屋の出口をめがけ馳けだし、逃げようとした。が、無駄だった。一人の男が大手をひろげて、おりんの逃げ口をさえぎった。べつの男が背後からおりんの足をつかんで引き倒した。

「ああッ！」

おりんの身体は、にぶい音をたてて床に転倒した。数本の毛むくじらの足が、おりんの腰を、脇腹を、肩を蹴りつけた。

こうなっては、猫の群れに囲まれた、一匹のねずみだった。色の白い、美しい、そしてむせるほどに色っぽい女のねずみである。

「無駄なあがきはやめろ」

土呂助がいった。

兇暴な乱破どもの好色に燃える眼の前にさらされながら、なおも逃げる隙をうかがっているおりんだった。

土呂助の膝頭が、おりんを俯伏せに組み敷いた。大男の重みが、おりんの背骨に、ぐりぐりと鳴った。

「うううッ！」

おりんは、両手で床をかきむしった。骨がくだれるかと思うばかりの疼痛だった。

土呂助の手には、黒っぽい色の縄が握られていた。この縄は丈夫な蔓草の一種を編んだもので、秩父の乱破たちが使用する特殊なものであった。

「うッ、痛ッ！」

おりんの素肌に、そのザラザラした蔓縄の感触が喰いこんだ。左右の腕が、土呂助の強力でまた背中になじあげられた。腕の関節が、へし折られるのではないかと思うばかりの乱暴さで、手首が交叉され、背骨の上でくくり合わされた。

その縄が肩にかけられ、前へまわって盛りあがった二つの乳房の下に、ギリギリと噛みつく。

つきたての餅のように白く、豊満な隆起の上に、黒蛇のように喰いこむ蔓草の縄。

白と黒との対照。そして、柔と硬との、むごたらしい組み合わせだった。

「ああッ！」

おりんは、身もだえて火のような息を吐いた。黒い蔓縄は、その身もだえにはいっこう構わず、びしびしと縛りあげる。

「白状しろ、女。お前の連れのあの男は、いったい何者だ！」

仙十郎が、おりんの膝へ足をかけ、また訊いた。

「知らないよ、何度いったらわかるんだ。あの男とは、つい半刻ばかり前に、狼谷の入り口で連れになったのさ。お前たちこそ何者なんだい。あたしみたいな罪のない女を、こんなにめちゃうちゃに縛りあげやがって！」

おりんは、くやしげにさげんだ。

普通の女ならば、このように容赦のない縄目にしめあげられるだけで、泣いて許しを乞うか、さもなければ、恐怖のあまり失神してしまうところだ。

ところがこの女は、苦痛のうめきこそ洩らす、眼光はますます不敵に冴えていくようである。

「うぬッ、しぶとい女め！」

仙十郎は、うなった。はげしい侮辱を受けたような気持になった。
(くそッ、この白狐め、どうしても泥を吐かせてくれるぞ!……)

5

「——土呂助、かまわぬ、鞭をやれ！」

仙十郎は、あらたな命令をくだした。

「へい」

土呂助の手に、こんどは割れ竹の鞭が握られた。先端が割れて、ささらになっっている竹棒である。

「ゆくぞ、女」

土呂助は、その割れ竹を、たかだかとふりかぶった。

ひゅうッ——空を切る音がして、すぐそれは肌を打つ残忍なひびきに変わって小屋中にはね返った。

びしりッ……

どちらかといえば、肥り気味のおりんであった。その肩のあたりに、割れ竹はきびしい力で打ちおろされたのだ。

「うむむッ！」

のけぞり返って、おりんは唇を噛んだ。

白い肩に、みるみるうちに赤い鞭痕がふくれあがった。おりんの咽喉が、鶏のようににびあがり、ヒクヒクとあえいだ。

ひゅうッ——空を切る二度目の音。

そして、びしりッ……と肌に鳴る、ささら竹の鞭。

「ぐうッ！」

おりんは、背をまるめて苦痛を耐える。眼をつぶる。こんどは、背中にまわされている腕のつけねのところに、割れ竹があたった。みるみるうちに、そこにも赤くふとい線が生まれ、ふくれあがる。

びしりッ……

びしりッ……

びしりッ……

土呂助の腕力が、非情な正確さで、おりんの肩を、腕を、腰を打ちすえた。むざんな音が発するたびに、白い身体が海老のように折れまがり、そしてピンピンとはね返った。

「ひいッ、ううッ、くくうッ！」

いくら歯を噛み、唇をむすんで耐えようとしても、嵐のようにふりそぐ割れ竹の下には、おりんも悲鳴をあげて七転八倒した。

ささら竹の鞭は、おりんの首筋を打ち、のけぞった胸を叩き、そして太腿にも数条の赤い痕を走らせた。

もう羞恥も見得もなかった。おりんは足をまげ、のぼし、苦し

ぎれに床を蹴った。

ごろごろと床をころがり、髪をざんばらにふり乱して、のたうちまわった。

ぴしりッ!……

ぴしりッ!……

ぴしりッ!……

同じところを、三度四度と打たれると、皮膚が破れ、血が流れだした。

「ああッ、ち、ち、ちくしょう!」

おりんはうめきながら、なおも身を屈伸させて、床の上を這いずりまわった。すこしでも、割れ竹の雨からのがれようとする努力だった。

だが、おりんを取り巻いている男たちは、自分の前へおりんが逃げてくると、足をあげて、その肩や胸を蹴りつけ、身体をまた鞭の下へ突きだすのだ。

「ひいッ、ひいッ、ひっひっひいッ!」

おりんは、次第に弱っていく。白い肌のおちこちからフツフツとして血がふきだしていた。

しかし、仙十郎の責めは、まだつづいた。

「だいお肌が裂けたようだな。よし、それではつぎに、あの水桶をここへ運びだせ」

仙十郎の命令で、その水桶が中央に据えられた。

この物置き小屋の片隅に、それはむしろをかぶって置かれてあったものである。形はちょうど一人用の風呂桶に似ていた。

中には、褐色に濁った水が、いっぱいに満たされている。これは

ただの水ではなかった。

蔓草の縄を編むときに使う、灰汁だったのだ。その使い古され、溜められた灰汁のなかには、人間の肌を刺激する蔓草の汁が混っていた。

この水桶の中に、おりんは縛られたまま、投げこまれたのである。

ざおり!……音がして、水しぶきがはね返った。縄尻だけは、桶の外で土呂助が握っている。

「ああーッ!」

たちまち鋭い悲鳴があがった。

鞭うたれて、全身十数カ所が血だらけに裂けたおりんの肌。その肌のなまなましい傷口へ、灰汁が急激にしみこんだのだ。

これは、全身が火に包まれたような激痛だった。傷口に焼け火箸を押しあてられたような熱さだった。

「ひいッ、ひいッ、ひいーッ!……」

水の中でありんは絶叫し、必死になってあばれた。水がしきりにはね、桶の外へこぼれた。

「さあ、どうだ、白状しろ!」

仙十郎が勝ち誇った顔でいった。

「いうッ、いうッ、何でもいうから、こ、ここから出しておくれようッ!」

おりんは、ついにそう叫んでいた。

灰汁浸しになったおりんの身体は、やっと水槽の中から引きあげられた。だが、まだ縄は解かれない。

ぐったりと床に横たわったおりんの濡れた顔を、仙十郎は上からのぞきこんだ。

「ふふふ……とうとう参ったらしいな。さあ素直にいえ。お前たちは何用があつて、この狼谷にやってきたのだ？」

おりんは、咽喉を、せえせえ鳴らしながらいった。

「あ、あの人は、伊賀の笹山森兵衛の秘命を受けて、お前さんを探ぐりにきた源七という密偵だよ……」

「そうか。やっぱりイヌだったのか。どうせそんなところだろうと思つてはいたが……。して、女、お前は？」

「あたしや、あの人の女房で、おりんというのさ」

おりんは、ぬけぬけとこたえた。

「ふうむ……」

仙十郎は、灰汁に濡れてギタギタと光っているおりんを、改めて眺めまわした。

おりんは本能的に足を縮める。仙十郎の眼に、好色が燃えた。

6

おりんは、物置き小屋から出された。

そして、源七が縛られている楠の大木の根もとに、同じようにくくりつけられた。

「二人とも明朝早くあの世ゆきだ。せめてものなさけに、二人仲良く同じ木につないでおいてやるから、ゆっくりと名残りを惜しむがよい。うふふふ……」

仙十郎が、死神のような冷酷さで笑った。

「あッ、ちくしょう！それじゃ、あたしを助けてくれるんじゃないのかい！」

おりんが、くやしげに叫んだ。白状すれば命だけは救ってやると

いった仙十郎の言葉は偽りだったのだ。

「だれが生かしておくものか。おい、源七、お前は伊賀の森兵衛の密偵だそうだな。うふふふ……。お前のような未熟な若僧を寄越すとは、森兵衛もおいぼれたものだよ。あッはははッ！……」

仙十郎は胸をゆすって哄笑した。

「なにッ！」

源七の顔色が変わった。

（——どうしてそれがわかったのだ？……）

まさか、この女が白状したわけではあるまい……この女は、おれの素性を知るはずはない……。とする……

源七の胸中は、不安におののいた。

「お前がこんな秩父までやってきた用件は、もうおれにはわかつている。おれたちの一族が、近頃、山賊の仕事ばかりするので、その制裁にやってきたのだらう？……あははは……おれはもう、森兵衛の指図など受けんわい。秩父の乱破は、秩父の乱破のやり方で、これからは生きていくのだ。どうだ、わかったか、あははは……」

仙十郎は、また夜空を仰いで哄笑した。

「うぬッ、裏切り者め、むほん者め、伊賀の忍者のつら汚しめ！」

源七は、縛られた身をふるわせて叫んだ。

「はぎけ、わめけ。どうせ朝までの命だ。おれはそれまで、ひとねむりするとうか」

そう吐きすてると、仙十郎は部下たちとともに、自分の小屋にひきあげていった。

あとに残った源七は、火のような怒りを抱いて、夜空をみあげた。木の枝葉越しに、星がキラキラとまたたいている。

ウオッ、ウオッ、とこだまするのは、狼の遠吠えである。凄愴ななかにも、どこかもの悲しげなその鳴き声は、更けきった深山の気配に、しんしんとしたうそ寒さを加えた。

「お前さん、どうするの？ たいへんなことになったねえ」

しばらくたってから、おりんが細い声をだした。

「夜が明ければ、おれたちは殺される。乱破の仕置きは残酷だぞ。

穴を掘って、縛ったまま逆さに投げこむのだ。足だけを地面の上に逆さにだしておいて、そのまま土を埋めてしまうんだ……」

「生き埋め？」

「そうだ」

「生き埋めはいやだ。逃げようよ」

「うむ。お前にその元気があれば、お前のうしろ手をうまく動かして、おれを縛った縄を解いてくれ」

「あいよ」

おりんは、しばらくの間、縛られた手首をモゾモゾと動かしていたが、

「駄目だ。手を動かすと、胸にかかった縄がよけいに喰いこんで、痛くてたまらない。お前さんが先に、あたしの縄を解いておくれ。その方が早いよ」

「よし」



源七は、尻で這って、おりんの横ににじり寄った。おりんの肌の匂いが、源七の鼻から胸のなかに深く入りこむ。

おりんの両手首、固く縛り合わせた縄。それを、源七の指が爪をたてて執念ぶかくほどいていく。

「痛い。あんまりひっぱっちゃ痛い。あたしの身体は、竹の鞭で叩かれて傷だらけなんだよ。静かにやっておくれ」

おりんは低い悲鳴をあげてもだえる。おりんの膝が割れて、月光の中に白い太腿がさらけだされる。

「静かにしろ、声をだすな」

苦心の末、やっと縄が解けた。

ほっとして立ちあがるおりん、ゆたかな乳房の上に、縄目の痕が三筋四筋、むごたらしい紫色をみせてしみついている。そして全身にふくれあがった赤い鞭痕だ。

しかし、おりんは不思議に元気だった。柔肌のなかに、強靱な体力を秘めているかにみえた。

「ああ、痛かった。さあ、こんどはあんたの番だよ」

こんどは、早い時間で源七の縄が解けた。

「おい、女。お前は先に逃げる。おれはもうすこし、ここにいます」

源七は、おりんにいった。

「そうかい。それじゃ、あたしはひと足さきに……」

というと、おりんは、さっとひるがえった。樹々の間へ、煙りのように消えてしまう。

「——まったく、不思議な女だ……」

源七は、あっけにとられておりんの消えた方角を見送る。

「——だが、おれもいつまでこうしてはいられぬ……」

源七は氣をとりなおすと、そっと仙十郎の小屋に近づいていった。

7

源七は、するりと仙十郎の枕もとに忍び寄った。一人だけで寝ている小屋だ。

仙十郎は、軽いいびきをかいて眠りこけている。嚴重に縛りつけておいた男が、まさか縄めけしようとは思わない仙十郎だ。

源七の手が、枕もとに置いてある脇差をつかんだ。

「おい、起きろ」

といって、腰のあたりを蹴った。

「うむむ？」

蹴られてとび起きた仙十郎の胸に、脇差の刃が、ぴたりと突きつけられた。

「むほん者め、かくごしろ！」

白刃は、ずぶりッと仙十郎の胸を突き刺した。有無をいわさない制裁だった。

「むむッ！」

一言うめくと、仙十郎は仰むけにぶっ倒れた。その胸から、鮮血がドクドクとあふれだす。一撃で仙十郎は絶命した。

力あまって、よろよろとした源七の背後から、いきなり、

「けらけらけら！」

という女の笑い声がひびいた。

「誰だ！」

源七はギクリッとしてふりむいた。

「あんた、やったね！とうとう仙十郎を倒したね！」

女は——おりんである。外から小屋の入り口へ、白い顔をのぞかせている。縄から解き放たれて、先に逃げたとみせかけたが、いつのまにかまた源七の背後にひそんでいる。

「おい、おりん、お前はいったい、何者だ、いえ！」

源七は鋭い眼で、血に濡れた白刃を、こんどはおりんにむけた。もう、ゆるしてはおけない……。

「おっと、あぶない！」

おりんの顔が消えた。

源七も小屋をとびだし、おりんの後を追った。

おりんは樹間をぬけ、猿のような素早い足で、谷川沿いの道をかけのぼった。

「待て！」

源七は追いつづける。もう生かしてはおけない、と決心した。

追いつ追われつ、数丁も走った。

と——左手に吊り橋が掛っているのがみえた。山に住む人間たちが渡る。縄を編んで丸太を渡しただけの粗末な吊り橋だ。

数十尺の下には、溪流が岩を噛んで流れている。

その吊り橋を飛鳥のように駆け渡っていくおりん。つづいて源七も渡りかける。

と——。

十数歩早くむこうの崖についたおりんが、くろりとふり返った。

「伊賀の源七さん、かくごおし！」

みると、いつのまにか、おりんの手には一本の短刀が握られている。

おりんは、その短刀をふりかぶると、吊り橋の縄を、いきなり切った。

「うわあッ！」

と叫んだのは源七である。

片側を切り落された吊り橋は、大きくゆれて落下し、崖の一方にだらりとぶら下がった。

「うむッ！」

源七はさすがに身が軽い。縄の一端を必死につかんで、崖の途中に吊り下がった。

眼下数十尺には、岩と急流だ。

「くそッ、お前は誰だ！」

源七は首をねじまげ、崖の上をにらんだ。

源七の眼に、おりんの白い笑顔は、まるで魔女のように見えた。

源七にとって、この女は、たしかに地獄へ突き落す魔女にちがいなかった。

「ハハハ……。知りたければ教えてやろう。あたしはね、ほんとう

は、甲斐の透破、轟重内の娘なんだよ。お前が伊賀の森兵衛のもとからきたイヌだということは、はじめから知っていた。狼谷の入り口で熊が出たなんてのも嘘ッばちさ」

おりんは、かんだかい声で笑った。

「うッ、ちくしょう！」

切れた吊り橋にぶら下がったまま、源七はうめいた。

「うちの親父どののいいつけで、秩父の仙十郎を殺しにいく途中でお前があとからくることを知ったんだ。そこで、仙十郎を殺すのはお前にまかせ、あたしはこうしてお前を殺そうという次第さ。アハ

ハハ……」

おりんは、いまや得意絶頂という表情であった。

「そうか！すると甲斐の轟重内は、やっぱりむほんを企てていたのだな！」

源七は歯ざしりした。吊り下がっている縄がのびて、源七の身体は、ズルズルと崖を落ちはじめた。

「そうだよ、いまにうちの親父どのが、この秩父から甲州にかけての乱破の大頭目になるんだ。アハハハ！」

おりんは崖の下をのぞきこんで、勝利に酔った笑声をあげた。

源七の身体が、激流の中へ落下するのにもう、あと十数える間もなさそうだった。

と——このときである。

源七の四肢が、いきなり、狼のように宙にはねあがった。

足で崖を蹴り、吊り縄から両手をはなしたのだ。

同時に、源七の右手から、白刃が直線をひいて、光りの矢となって飛んだ。

「ぎゃあッ！」

崖の端に立つおりんが、両手で胸をおさえてのけぞった。

源七の投げた白刃が、おりんの胸にふかふかと突き刺さったのだ。

だが、縄から手をはなした源七の身体は、そのまま、溪流の中へまっさかさまに墜落していった。

どぶーん！……水しぶきがあがる。

「むううッ……」

白刃を突きたてたまま、おりんは前こごみになって倒れた。崖の

端に立つおりんの身体も、やがて頭から、もんどりうって激流の中へ……。

おりんの白い身体は、巨大な妖しい花びらのように、水中へ没した。

二つの命を呑んだ狼谷の溪流は、降りそそぐ月光をこまかくくだいてほとばしり、あとには、山奥に遠吠えする狼の聲が、陰々とひびくばかり……。

並の世間を遠くはなれた、この奇怪な乱破族の血なまぐさい争闘を知るものは、ただ、秩父雲取山の狼谷を照らす、元和六年春の満月だけであつた……。

(終)

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せっかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歎

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 儀(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

告白

由紀子の手記

上原由紀子

由紀子は平常から自分の抱いている夢を書き綴ってみました。夜、寝る前に寢床の中にじっとしている時や、電車に乗ってぼんやり窓の外を眺めている時には、よくこのように自分を主人公にして考えているのです。でもいざペンを手にしてみると、なかなか思うように書けませんので、いらいらしてきます。あとで読みかえしてみても、いっそうのこと破りすててしまおうかとさえ思いましたが、若し誌上にのせて頂けなくとも、編集部の方にも、或る風変りな乙女の夢としてごらん頂ければと思ってお送りいたします。きたない字でそれに間違った文字もあり申し訳ありませんがお宥し下さいませ。

編集部様

由紀子拝

「一」

私が目を覚ますと、もうすでに四月半ばのやわらかい春の日ざしが、さんさんと窓からさし込んでいます。私は、まだ寝足りない眼を薄っすらとあけ、何故こんな見知らない所に寝ているのかしらと、夢うつつの中で考えます。甘い、うっとりとするような夢心地の中で、寢室のドアをノックする音と共に

白衣に身をつつんだ、スラッとした明るい感じの女の方が入って来ました。

夢心地から目覚めた私は、やっと自分がここに寝ていた理由をさとりました。私は家には、お友達と旅行に行きますということにして、昨日からこのK医療美容院に入院しているのです。そして今日は、その第一日目なのです。

「由紀子さん、お目覚めになった？」

「ええ」

「それじゃ着替えをしてから、すぐ先生のお部屋にいらしてね、先生がお待ちですから。」

先生のお部屋、おわかり？ 右の三号室よ。じや、なるべく早くね」

そういって、その看護婦さんは軽い足どりで室を出て行きます。

「二」

私は、まだ入ったことのないドアの中のことを思って、誰でも抱く、胸のときめきを感じながら、三号室の前に立っています。この入院は成功するかしら？ お医者さんは小さいときから嫌いだけど、今度の先生はお優しい方かしら？ どの様な方法で美容術をして下さるのかしら？ そうした期待に一時不安

もまじった気持で、私はドアをノックしました。
「お入りなさい」
澄んだ女の人の声でした。まだ三十ぐらいの上品な女医さんで、その左右には、さっきの看護婦さんと、もう一人の看護婦さんがい



ます。
「由紀子さんですね。お若いようですが、お年おいくつ？」
「十九才です」
「ティーン・エージャー最後の年というわけね。この年頃で、本当にしっかりした美容法を

しておいたら、中年肥りなんてことにもならないし、賢明なことですね。
本当に今が一番大切な時だわ。それであなたに美容法を行うにあたって、由紀子さんの方で特にこうして欲しいという希望がありますかしら？」
「そういわれても、思いつかぬまま黙っていますと、先生は」
「それでは、私の方で適当と思われる事をしてさし上げますわね。すべて私にまかしていただけますか？」
「はい」

私は、この先生なら、きっと上手にやって下さるに違いないという莫然とした安心感で、お返事をしました。

「それじゃ、そうしましょう。ただ一つだけお断わりしておくけど、短期間で仕上げなくてはならないので、時には辛い事もあるかも知れないけど我慢して頂けるわね。ここに居るのは看護婦さん二人と私の三人だけだから、楽な気持でいらしてね」

「こうおっしゃると先生は、机の引出しから一枚のカードをとり出されて、
「では一番初めに、あなたの体のサイズを知

っておかなくてはならないから、あちらで脱衣してきて頂戴」

私は脱衣という言葉を聞くと一寸ハッとしましたが、体のサイズぐらい計るのはあたりまえの事ですので、隅に仕切られた脱衣所でスカート、セーター、ブラウス、シュミーズを脱ぎますと、

「じゃ、こちらにいらして頂戴」

という声に、私はあわてて脱ぎすてた衣服を籠へ片付けて、ブラジャーとパンティだけになって先生の前に立ちました。

「あら、駄目よ。それじゃ、正確に計れないわ。全部脱いでしまわなくちゃ」

「でも……これでも……」

私は、どきまぎしていいました。だって、これまで脱がされるとは思ってもいませんでしたもの……

「駄目、駄目、いいかげんな事で済ましちゃうならともかく、ちゃんとした美容法を行うなら、正確なサイズを知らなくちゃならないのよ。そのくらい常識よ。さあ、思い切って取ってしまいなさい。それに、ここには女だけしか居ないのよ。なにも恥しがることないじゃないの」

そういわれると、私は反対することも出来

ず、反射的にブラジャーの紐に手をやって、ずり下げました。しかし、先生は更に目で最後のものも取るように命じています。私は許しを乞うように先生を下から見上げましたが「さあ早く、それも取って」と、おっしゃるだけです。もうこうなってはどうしようもございせん。小学校の六年生の時、何かの理由で教室に立たされ、級長の私が立たされたというので皆んなの注目のまなこを浴び、大変恥しうございましたが、今の恥しさは、その遠く及ぶ所ではございません。私は、消え入るように体を小さくして立っていますと看護婦の一人の方がメジャーテープを持って私に近ずき、ウエスト、ヒップ、バストはいうに及ばず、首の太さから、乳首間の距離等を計るのでございます。こうして約一時間もかかって、一枚のカードにびっしりと数字が書き込まれました。出来上ったカードを手にとって、

「あなたの体は可成りスマートだわ。ヒップもあるし、足も日本人にしては驚く程長くて美しいわ。でも、ヒップの割にはウエストが一寸太いし、バストの盛り上りもあと一息ね。だから、この二カ所に特に重点を置いて、仕上げをしましょうね」

こういうと先生は、看護婦さんに命じて、私をベッドの方に連れてこさせました。

「それでは今度は、なぜ一寸アンバランスになっているか、医学的に調べますから、そのベッドに横になって下さい。もしホルモン系統の欠陥なら話は簡単だけど、あなたの体の状態なら、そんなこともなさそうだわ。矢張り、食べもののせいじゃないかしら」

回転する様に造られている、ベッドというよりは診察台といった方がピッタリとする台に乗せて、両手を頭の方に上げるようにと、お命じになります。

「バストの方は一種の生れつきの体質によるものだから、人工的に吸引器を使ったり、注射がいいようね。ウエストの方は由紀子さんすこし便秘しているためと、一般に肥りすぎの傾向だかららしいわ。でも、ちょっと辛いかも知れないけど、このくらいすぐ矯正できるから辛抱するのですよ」

看護婦さんと、こそこそ何やら話しをしていましたが、しばらくすると一人の看護婦さんが戸棚から黄味がかった透明な小ビンを持って来ました。そして私の横に立つと、

「あなたの便秘を直すために、まず下剤をかけましょうね。最近じゃ色々新しい下剤が売

られているけど、ききめが適確で早く効くのは、まだこのヒマシ油に優るものはないわ。

一寸飲みにくいのが欠点だけど、ほんの三〇CCだけだから我慢するのよ」

という、その液を太めの大きいシリンドーに十分に含ませ、シリンドーの先に短いゴム管をつけてそれを私の口にくわえすと、静かにピストンを押し下げ始めました。それと共に、私の口には、あの何んともいわれない飲みにくさの、ネバツこいヒマシ油が注入されます。由紀子は、その気持の悪い液の責めから脱しようと必死になって飲み下してしまおうとしますが、仲々のどを通りません。こうしている中にもシリンドーの液は、どんどん私の口に移され、口のヒマシ油は増えるばかりです。やっとの事で二〇CCぐらいのヒマシ油を飲み下すと、あまり一度に多く飲んだ為か、胃につき上げるような衝撃を感じたと思ったら、今まで飲んだヒマシ油を全部吐き出してしまいました。

「あらっ駄目ね、もっと小さきみに飲まなくちゃ。全部、飲んじゃうまで許さないわよ」尚も新しいヒマシ油をシリンドーに含ませます。こうして私は、このヒマシ油の苦しき味わねばなりません。三〇CCのヒマシ油が

胃におさまった時、私はもう、ぐったりとしていました。

「三」

ヒマシ油の苦しさに疲れた由紀子は、眼を閉じて、じっとベッドに横たわっていますと、傍でカチカチと固いものが触れ合う音がしています。私は、もしや浣腸されるのではないかしら、もしそうだったらどうしようと、結果がわかるのが恐い気持で固く眼を閉じ、音のする方を見ない様に見ない様にしていました。矢張り怖いもの見たさの心理に勝てずウッスラと眼を開いてしまいました。台の上には更に太いシリンドーやゴム管がありました。ああ矢張りそうです。私の恐れていた浣腸なのです。中学校の三年生の時、盲腸の手術で死ぬ程恥しい思いをしたあの浣腸なのです。ああ又、浣腸をされるのです。ああスタイルなんか今のままでいい、浣腸だけはいやッ。いやだわ……。こう心の中で叫びましたが、今更もうどうすることも出来ません。こうしている中にも用意が進められ、看護婦さんがビニールを持ってベッドに近ずき、ひんやりとするビニールを下に敷いてしまいました。

「お浣腸をしますから、うつ向きになって。なんでもないわよ。じき済みますから我慢しなくちゃ駄目よ、痛くもなんともないんだから。ほらほら、じっとして。じっとしないとよけいにグリセリンを注入しちゃうわよ。そうそう、そしてもっと体を柔くして……」

こういわれると、あの美しい看護婦さんが何んとうらめしく見えた事でしよう。グリセリンを一杯に含んだ浣腸器を取り上げ、嘴管のついたゴム管をつけると、嘴管をグリセリン液の中に一寸浸して、私に近づいて来ました。「嫌やッ、嫌やッ」と心の中で叫びますが、もう今や観念しなくてはなりません。私はジッと観念のまなこを閉じました。

浣腸。それはなんと無慈悲な療法でございましょう。しかし今の私はジッと耐えるより、しようがないのです。若い女のこの苦しき、恥しさ、ミジメさを、どれ程の人が理解して下さるか疑問でございます。例え若い女の方でも、実際に浣腸をされてみた人でないと、このつらさは、おわかりにならないかも知れませんわね。

しかし、浣腸の苦しさが終わったわけではございません。いいえ、むしろこれからが本当の浣腸の苦しき、つらさかも知れません。五

〇CCといっても、石ケン液と異ってグリセリン液でございます。その強力な脱水作用は、由紀子の直腸から大腸にまで浸み込んで、ジクジクと強力な責めを開始します。

「そうね、今十時十五分だから十時半まで十五分、我慢なさいね。そのくらいしなくちゃ良くお薬が効かないのよ。それから中の方にお薬が浸み入るように、少し頭の方を下げましょうね」

一分ですら我慢出来そうもないこの責めを十五分、しかも手足を固定されて……。

私は「うっ、ウツツ」「ああッ、アアッ」というような言葉にならない言葉を口にしながら、わずかに動く体をよじり、お腹を波打たせて必死に便意をこらえるのですが、そんなことでこのつらさから抜け出せる筈もございません。

「ああッ、あッ、どうでもう許して下さい。

もう我慢出来ません。先生、許して……ああッアアッ……」

と、由紀子は身をよじりますが、

「駄目よ、何いってるの。まだ五分じゃない。私の療法を受ける人は、皆これを我慢するのよ。由紀子さんだけ我慢出来ないことはない筈よ。さあ、あと十分、我慢なさい。美しく



なりたいでしょ」

冷く二人の看護婦さんと見下すばかりで一向、許して下さいる気配すら見せて下さらないのです。

こうして一分が一時間、いや一日にも感じられた十五分が過ぎ、手足のバンドを解かれ

た私は、そこに置かれた便器に恥しさもなにも忘れてとびついたのです。こうして、やっとグリセリンの苦しさから解放された私の眼には、後から後から大粒の涙が上ってきてベッドに顔を埋めたまま、しばらくは顔を上げることが出来ませんでした。

「四」

どれ程時間が経ったでしょう。時間にしたら、あるいは五分も経っていなかったのかも知れませんが、浣腸に痛めつけられた由紀子には、時間の尺度が、すっかりわからなくなってしまうていました。私は、ようやくベッドから顔を上げて、ハッとしました。

あつ、私の眼の前には鉄の脚に大きいガラスの容器が取りつけられたもの……そうです。シリンダーのグリセリン浣腸器よりもっと恐ろしいもの……そうです、イルリガートルが置かれています。しかも、その中には白く濁った石ケン水が一杯に満たされているではありませんか。私は、もうただ本能的に叫びました。

「先生、お願い！イルリガートルだけは許して、もう便秘はなりましたから……。どうぞ、イルリガートルだけは……」

「あら、今のは直腸と大腸にあったものを出しただけよ。由紀子さんのお腹の中は、まだきれいにさうじされた訳じゃないのよ。さつき飲んだヒマシ油だって、まだお腹の中にあるのだし、小腸の中にはきのう飲べたものが、きつとまだ残っているにちがいないわ。」

だから十分、洗腸しなくちゃ何んにもならないわ。さあ、いい子だからベッドに上って」

「でも、もう……どうぞ、お願い！イルリガートルだけは……」

必死になって止めてくれるように頼みましたが、先生は急にキツとなって、

「由紀子さん、ここでやめては何んにもならないのよ。そりゃ辛いのはわかるけど、みんなちゃんと辛抱したのよ。あまりダダをこねると、罰として一〇〇CCグリセリンで十五分、我慢させますよ！ね。いい子だから我慢なさいね」

こういわれると、私はもう逆らう元気もなく、しかたなく、自分から再びベッドの上に臥せなければなりませんでした。

イルリガートルの液面は次第、次第にその高さを下げ、私のお腹は目に見えて、そのふくらみをまして行きます。二リットル近くも液が注入されたのでしよう。便意は前のグリセリン程ではありませんが、なにしろ多量の石ケン液が腸に充滿しているのですから、そのつらさはグリセリン浣腸に勝るとも劣りません。ああ何故こんなつらいことを我慢しなくちゃならないのかしらという気持、でも矢張り、美しくなりたいという気持が混り合

って、泣きながらも、とうとう三回もの多量高圧洗腸浣腸をされてしまったのでした。

「五」

浣腸が終ると、先生は何やら看護婦さんに命じました。何回もの浣腸で心持ち細くなった私の体に、再びメジャーテープがあてられます。

「そうね、二センチ程細くなったわ。でも、まだまだね。看護婦さん。では、あれを持ってきて下さい」

あれって何かしら。まさか、もう浣腸はされないでしょう。私が不安な気持でまわっていると、看護婦さんが戻って来ました。看護婦さんが持って来たのはウエスト・ニッパ―でした。ただ普通のウエスト・ニッパ―と違って、これはしなやかなめし皮で出来ているのです。三つ四つの中から、先生が適当なのを一つ選ぶと

「これから締った体の線を作りますから、一寸きゅうくつかも知れないけど、このニッパ―をつけてもらいますよ。これは体の線が出来るまで、当分の間、つけっぱなしにしておくのよ。お便所とお食事の時……といつても、両方とも浣腸器のお世話になるんですけ

ど……以外は、はずさないから、そのつもりでいてね」というと、私を直立させて両手を上に上げて革バンドで固定すると、助手の方に命じてニッパを締め上げにかかります。普通にしている六十八センチある私のウエストは、実に十八センチも締め上げられて、五十センチにまでしぼられる事になりました。六十センチあたりまでは快い緊縛感でしたが

五十センチ台になると、もう息をするのが精一杯で、歩いてみても腰の関節のあたりがガクガクして、それはつらい事でした。それでも美しくなるためという希望が、カギがついて自分で取り外しの出来ないこのウエスト・ニッパも遂に我慢させたのでした。

「六」

こうして一週間の入院中、食事といえは熱めの牛乳を滋養浣腸され、ウエスト・ニッパの他には何も着る事を許されず、整形のためには乳房に何本もの注射をされるような生活、こうした生活に由紀子は強いあこがれを抱いているのです。どなたかこの様な生活のお相手をして下さる方が居らしたら、由紀子はどんなに幸福でしょう。

(おわり)



(144)

トイレ読本

「主婦の友」誌五月号には、特集「トイレ読本」が載っているそう。同誌はまだ見ていないが、昨年の秋に出版された、住宅雑誌、

愛好者の記録

——アブの楽園にてうたえる——

とやま

——かづひこ

「朗」日本電建KK発行」にも特集として新しいトイレの造り方を紹介していた。

どうやら、トイレの革命期という感じだが、女王様用人間トイレのアイデアに到達するのはまだまだ程遠いことらしい。こんなに

便利で、すばらしいものはないだろうと思うのに。

胸に値札をブラ下げて、トイレ器具店ウインドに並んでいるかづひこを、美しい女王様が買い取って行かれ、専用の道具として使っ

て戴けたら——。かづひこの頭の中には、そんな夢が果しなく拡がって尽きるところをしないのだ。

(145)

一〇〇〇円

四月十四日の昼さがり、前日から腹の調子の悪かったかづひこが、日本橋は人形町まで社用で出向いた時に、急激にさしこみを感じて慌てた。幸い水天宮さまの境内に公共トイレがあったので、とび込んだまではよかったが、運悪くふさがっている。ジリジリしながら待つかづひこの前へ、扉を排して出てきた女性、チラッとかづひこへべつをくれ、ツンと澄まして外へ出ていったが、この女性がなかなかの美人。思わず腹の痛さも一瞬忘れて、いつもの夢の中にひき入れられてしまったが、入れ替りに入ったトイレの中で、その夢が余計に大きくなった。

公衆トイレにつきもののような落書があったのだ。千円で吞ませて下さい。壁に、マジックインクでクログロと書かれたこの文字を先程の女性も必ず読んだに違いない。

一体あの女性は、この落書をどう読んだだろう？ あら、必要以上の澄まし方は、何か

を感じとったからではなかったか？ そんな想いが、かづひこを捉えて離さなかった。

(146)

テープ・レコーダー

所用で友人のT氏を訪れた。

T氏は、ノーマル族だが、折にふれて話しかづひこのアブ談義に多大の興味をもっている。

「ちようどいいところへ来たネ、いま面白いものを録音したんだ」

自慢のテープレコーダーのフタを開けて、用談もそっちのけで、スイッチを入れようとする。

傍らの夫人が「イヤヨ！」と慌てて止めようとするが、T氏は構わずスイッチを入れる。夫人が顔を覆って逃げ出した。

レコーダーは回り、事情の分らぬかづひこの耳に、いともたえなるガス憤出音がとびとんだ。

二人でお茶を飲み乍ら、テープレコーダーをいじっている内に、偶然、夫人の粗相がキヤッチされたのだという。夫人が逃げ出すのも道理と、かづひこには合点がいった。

「どうだい？ 君むきだろう」

おくさんの美しいのが自慢のTさんは、得意そうにかづひこをのぞきこむ。

音によって空想を描くのは、勿論わるくない。かづひこは繰返しての演奏？を、何回もT氏に頼んで、用件の方は忘れていた。

(147)

痴人の愛

大谷崎の名作が、再び映画化されるのを歓迎し、その完成を千秋の思いで待っているのだが、『週刊文春』四月二十五日号グラビアは、そのスチルを紹介している。

その中で、ナオミが寝ている夫の身体に半分腰かけているシーンから、かづひこは人間トイレを連想した。枕元の灰皿まで、何か暗示的に思えるのも奇妙だ。

このグラフでは、叶順子の半裸姿態も数種掲載されて目を楽しませてくれる。

ついでながら、同号二十六頁のコラム『特等席』で弟子（フランキー堺）がトイレ掃除をさせられ、済むのを待っているおかみさんにガミガミやられる場面のスケッチや例のフランス映画『青い女馬』で、ヒロインが草むらで用を足すシーンを紹介、かづひこにとっては嬉しい号であった。

告白手記

遠い昔に夢を求めて

松井 籟子

奈良や大和の寺を歩いて、天平時代の仏像や仏画を見ているうちに、私はふと、万葉の頃にアブノーマルな希求をもった人はいただろうかという疑問が頭にひろがってきた。

仏像や仏画にえがかれている女の姿があまりに豊満で、そこに被虐の匂いが感じられなかったからだ。

どうもすぐそんなことを考えるのは、私の悪い癖なのだが、大体、女というものは、肉体的にも被虐を悦ぶ要素をもっているし、精神的にもそうなりやすいと思っていたのだが

もしかしたら、日本の政治や家族制度や宗教や、いろいろなものの影響で、後世になるにつれてだん／＼変化してきたので、万葉の頃の女性はどっちかという、加虐的ではあっても、決して被虐的ではなかったのではないかと思いついたのだ。

私は家へ帰って、早速、万葉集をひもといてみた。万葉の歌の中に、少しでもアブノーマルな匂いが嗅げるかどうかと、それを頭においてよみ直してみた。

しかし、数々の万葉秀歌は、今のこせ／＼

した日本人の気質から考えると、夢のように明るく大らかで、悦虐の匂いなんて薬にたくもない。

ただ柿本人麿の歌に

「愛しと吾が念う妹は早も死ねやも生けりと
も吾に依るべしと人のいわなくに」

というのがあった。

可愛く思うあの女が、いつそ死んでくれた方がいい。どうせ生きていたって私のものになりはしないのだから、という意味だと思うがこうした男の独占欲は往々サジズムに形を

かえることがある。しかし同じ人の歌に
「恋ひ死なば恋ひも死ねとや我妹子が吾家の」
わがもこ わがへ

門を過ぎて行くらむ
というのがある。



恋死にをするなら勝手にしなさいというように、あの人は私の家の門を素通りして行くだろうという歌の意の中に、冷たい恋人の態度を受身になってかみしめている精神的マゾヒズムを私は感じた。

大体、悦虐に興味を持つ人には往々、どっちにでもなれる両刀使いがいるものだ。私自身にも両方の希求があるように、人磨も両刀使いだったかもしれない。

歌聖といわれる人磨をつかまえて、マゾヒストだなんていうと、国文学者や史家は目の色をかえて怒るだろうが、遠い昔に死んでいる人だ。真実は彼自身しか知らない。

今、彼の一つ一つの歌を此処へ並べても、古典に興味をもたない人には退屈だろうから、沢山の例はひけないが、とに角、情熱のほとばしるような歌が多いし、歌で有名なわりには身分が低かったらしく、宮中に仕えてはいたが転々と随分、方々へ旅をしている。

彼の恋の歌が一人の女性に捧げられたものとは思えない。私のカンのようなものが当たっていたら、案外マニヤだったかもしれないのである。そして、自分を満足させてくれる女性にゆきあえず、恋人から恋人に移っていったかもしれない。

仏画にえがかれた天平の美女は、二重あごのふっくらとした容姿で明るく、なごやかに微笑んでいる。その顔が苦痛にゆがむ凶は、どうにも想像出来ないのである。

むしろ、その微笑に、もう少し高慢さと皮肉さを加味するのはやさしい。そして、そんな美女を愛した時、いじめるよりは、いじめられてみたくなるのではないだろうか。

人麿だけマゾヒストと断定するのではなくこの時代の男たちは、女を可愛がるより、可愛がりたい性質を通有していたような気がするのだ。

大伴家持の歌にも、「この寒い夜に愛する人の手枕もせずに一人で寝るのはわびしい」といった意味の歌がある。

他にも女の手枕を歌ったものがあるが、男が女に手枕をしてもらう形は、男が女に甘えている感じになる。現代の外国映画などでは大抵、女の方が男の広い胸に頭をのせ、むしろ

男の手枕で寝ていることが多い。

それに天平の頃の男性は、すみれや桜をかざしたりして、多分に女性的だ。

それと対照的に、仏画の美女が、女性的ではあっても、ひどく体格がよい。江戸時代の女にくらべたら、雲泥の違いだ。

そこで私は、万葉の頃に、もし悦虐的あそびがあったら、女が加虐者の立場に立つ方が自然なように思われてきたのだ。

たとえば、その頃よく行われた野辺へ薬草をつみに行つたとする。

女は、わざと愛する男に、藪へもぐって珍しい草をとってやることを命じる。

「イバラの刺で上着を裂くといけないから、裸になっていらっしやい」

と女はいう。

「裸ではイバラで傷つきます。せめてうすい下着を着せて下さい」

と、男は哀願する。

「いいえ、いけません。獣は着物を着ていないではありませんか。あなたも獣のように、何にも身につけずあふ藪の中へ這ってゆくのです」

女にいわれて、男はしぶく／＼上着も袴もとってしまふ。

「そんな恰好では、どうせ遠くへ行かれないでしょうが、逃げるといけないから、これをつけておきましょう」

と、女は腰にまいているリボンのような長いきれを、男の腰に結びつけて、そのさきを手の中へ握り

「さあ、行ってらっしやい」

と、動物を扱うように、小枝のさきで男を突く。男が犬のように這って藪へ入ると、わざと紐を引張って

「ああ、そっちではありません。こっち、こっち」

と、横へ引張り、男が膝でよろめきながら引かれた方へよると、

「もっと、さきの方よ。ほら、ずっと、さきの方へ行くのよ」

と、長い木の枝で男の尻をつくののである。

男は泥と汗にまみれた体に、木の葉を一杯つけて、藪の中を動きまわる。その姿がおかしいといって、女は声を立てて笑う。

空は今よりもっと澄んでいて、私のよくいう明るい悦虐が展開されるのではないだろうか。

○

万葉の頃の行事の一つに正月の式がある。

正月は春のはじめとして、寿ぐのは今も同じことだが、春の色、陽の色として、青を尊んだ。そして、その陽の色の獣を見れば邪気を散らすことが出来るという迷信があつて、青みのある白馬を正月七日に天皇の前に引き出して、宴をはったそうさ。

最近、外国映画に「青い牝馬」というのがあつたが、日本の昔にも、青い馬をもてはやしたなんて面白いことだと思ふ。

こうした宮中の行事を民間で真似しないものでもないだろう。

そして、馬のかわりに、裸の人間を草の汁で青くいろどつて、大勢の見ている前に引き出したらどうだろう。

この場合も、女より男がいいと思ふ。

一人の男を女たちがよつてたかつて裸にして、青い草の汁をこすりつける。男は、くすぐったくて悲鳴をあげるかもしれない。いくら昔の暦でも、正月といえ、春とはいえまだ肌寒い。男の体は毛をむしられた鳥のように、毛穴が一粒ずつ立ってしまうだろう。

男がもがくと、女たちは馬をつなぐように男を縄で立木へつないでしまう。そして、容赦なく、男の全身へ青い汁をぬりつけて行くのだ。

皮膚呼吸が止るので、男は苦しむかもしれない。そこで女たちは、男が死なない程度に青い汁をぬりつけない所を残しておく。四つ這いに馬のように這わせて、地面へ向く胸や腹を残しておけば良いわけだ。

そして、こういうことを、その儀式の当日にするわけにはいかなから、男は一晚そのままで小屋の中へとじこめられなければならぬわけだ。逃げられないように監禁しようと思へば、当時の建築様式では、檻のようなものに入れるより仕方ないだろう。

青い人間の獣は、そうして檻の中で夜をあかし、あくる日は衆人の中へ引き出される。

けれど、これはあくまで刑罰などの加虐ではなく、祝典の爲の犠牲者なのだ。

される男も、する女も、のび／＼と明るく悦虐をたのしめるだろう。

この時代にはまだ警察のような制度がなく村長が一人で農業の指導も、税のとりたても犯人逮捕もやっていた。

それでも罪人をたたくムチは、長さ三尺五寸直径三、四分の節をけずりとったツエときまっていた。

それをふるうサジスト的男性もいただろうが、もう一つあとの平安朝の頃よりは、どう

ものんびりしていたような気がする。

奴隷もいたらしいが、それ程苛酷にこきつかつたとも思われない。

そこで、私にはあそびのような悦虐しか考へられないのである。

その頃の行事に、馬を走らせて、その年の農作か凶作かを占うことがあつた。

これは、天候の占いにも応用され、白い馬が勝てば晴天がちで、黒い馬が勝てば雨が多いというような、きわめて単純なものだが、これも又、馬ではなく、人でやってもいいのではないだろうか。

全身にびったりとつく衣服を男に着せて、女がまたがるのだ。

男の衣服を黒と白にわけろ。

そして、四つん這いにして馬のように首へ縄をかけ、女はその上に乗ってムチを振う。

女のうすものが風になびき、見物の群衆はわあ／＼と弥次をとばすだろう。

道はかならずしも平で、なめらかとはきまっていなから、這っている男は、たとえタイツをはいていても、石で膝を傷つけ、手をすりむくかもしれない。

負けそうになると、女は夢中になってムチを振うだろうし、見物の中から小石がとんで

くるかもしれない。

ただかけるさえ大変なのに、四つん這いになって、重い女をのせていけば、馬になる男の苦痛は想像にあまりある。
それでも勝てばいい。

「負けた男は水さえ飲ましてもらえず、もっ

ともっと女に奉仕する義務を与えられる。

まして人々が晴天を望むのに、白い衣裳で負けたとなると、一寸やそつとでは許してもらえない。

又、雨どいを望むような年に、黒い衣裳で負けたとなると、これも大変だ。

雨どいの為に黒毛の馬を神に捧げるような

儀式さえあった時代なのだから、馬になった男を神のやしろの前に、一晚中つないでおくことぐらいは誰でも考えつくだろう。

清めの為に頭から水をかけ、土を掘って、半身を埋めてしまふかもしれない。

そして、生きている人間のまわりに、死んだ鹿や、猿や、猪などを、いけにえとして積み重ね、おかしい祈念をあげるかもしれない。

すでに仏教は広まっていたが現代でさえ祈禱で殺される人がいるぐらいなのだから、迷信の種類は数限りなくあったろう。

私は時々、自分が教祖さまになった気で、どんな儀式をこしらえようかとたのしんでいる時がある。

たとえば、万葉の頃、すでに孟蘭盆会を各寺院で行ったというが、これはウラバーナという仏教の言葉が、ウラボンになったのだといわれる。

そしてウラバーナというのは

黒毛の馬を神に捧げる



餓鬼道に落ちて、さかさまにつるしあげられて苦しんでいる死者のことで、これを救うために供養するのがウラボンエなのだそうだ。

そこで私がもし教祖さまなら、この死者の姿を現世で真似て、あの世へ行ったら再び苦しむことのないように、仏に祈るといふ儀式を作る。

そしてその為には、地獄で逆さまにつるしあげられるのと同じように、何分間か逆さ吊りにされることを信者に行う。そして、その為には一日断食させて、お腹はぺこ／＼にすかさせる。水ものませない。

それを逆さ吊りにして、目の前の、すぐにもとどきそうな所へ、食べ物や水をおくのである。食べ物に近付くと、それが焰となってもえてしまうという仏教の教義そのままに、時々下から焰で顔をあぶってやってもいい。いくら苦しくても、信者はそれで救われるという宗教的儀式なら我慢するだろう。

万葉の時代に一人ぐらい、こんな考えをもった女性はいなかっただろうか。

吉祥天女のような美しい姿で、地獄の責苦を再現する女があってもよかったような気がする。

そんな夢を私におこさせる程、仏画の女

たちは、虐げられる暗さよりも、虐げる側のびやかさをもっているのだ。

まして、手が何本もあるような仏像の顔は決して男性ではなく、女性のように見えるがあの何本もの手は、いじめるのにこそ役立つ。でも、いじめられる側ではないような気がする。

それと反対に、この時代の仏像で、四天王や仁王の表情は、苦痛を訴える顔にみえるから不思議だ。

戒壇院の四天王なども、体が小さくて貧弱な感じがする。専門家にいわせれば、大した傑作なのだろうが、素人目にはのびやかな夢がなく、観音像や天女の絵などにくらべるとこせ／＼しているように感じられる。

国宝級の仏像に虐げられる男の暗さを感じるなどといったら叱られそうだが、どう見ても、女性の方が加虐者的なのだ。

私は、万葉の女性と男性の体の中に眠っていた欲求を私なりに解釈してみたが、もし奈良や大和を旅して、ふだんあまり興味をひかない寺を、私のような興味のあり方で歩いて頂けたら、何かの足しになりはしないかという気がするのである。

○

万葉ののびやかさからくくると、平安朝に入ると、とたんに暗くなる。

それは検非違使庁^{けびいし}というのが出来て、犯罪を専門的に取扱いだしたことから始まる。

権力を笠にきて、威張り散らす集団が出来たことは、犯罪の恐怖から守られても、別の恐怖に人民がおののかなければならなくなつたのだ。

特に、検非違使の配下には、いろ／＼な下役があったが、中でも放免とよばれる人達がいた。

この放免は、一度牢屋に入れられるような罪を犯かした者で、人なみには扱われない者なのにかかわらず、政府はこれを手先に使って、盗賊逮捕に役立てようとしたのだ。

こういうのが一番、始末に悪い。

祭の時の行列に従う人の服装が、派手すぎるといって、その場で衣裳を奪ったりした。

抵抗すれば打ちたたき、衣裳をびり／＼に引きさく、気に入らなければ縄をかけて引いてゆく。公務執行妨害とでもいうような法律をたてにとつて、乱暴のかぎりをつくしたらしい。まさにサジズム的行為だ。

こうなると犠牲者は女性の側だ。

道行く女の人の市女笠^{いちめ}を、検非違使の手先

が禁制品だといって、片っぱしから切つてまわるようなこともした。

大抵の女は市女笠を放り出して逃げるだろうが、もし、少し強気な女がいて、

「これは禁制品ではございませぬ」

と、手向いしたら、いいカモとばかり、よつてたかつて後手に縛りあげてしまふだろう。

そして大勢の見ている前で、ムチで打ち、「禁制品をそうでないなどと、お上の目をこまかす気か。恐れ入りましたといえ」と責める。

それでも女が強情に

「いいえ、これはたしかに御禁制のものではございませぬ」

というと、

「笠でさえ、禁じられているものを、そうでもないと思つてゐる以上、身にもきつと御禁制品をつけてゐるに違ひない」

といつて、手先達は女の着ているものを無理やりぬがす。

「あつ、それは……」

と、女がもがいても、荒くれた男たちの手は、上着も下着も引き裂くのにひまはかからぬ。

見物している群集は、あとのたたりが恐ろしいから、ただ遠まきにしてゐるばかりだ。

顔さえ人に見られることを恥しがった平安朝の女は、大勢の見てゐる前で、裸にされてしまふ。

こうして男達は加虐者となり、女たちは被虐者になる。

胸を張るような万葉の女の姿は、ひかえめにいつも顔を扇や笠でかくす平安朝の女に變つてしまつたのだ。

又、この時代は陰陽道おんようというのが中国から入つてきて広まつた為、年月日や方位に関するタブーが種々あつて、一々吉凶を占つた。

源氏物語などにも、光源氏が方角よけをするようなくだりがあるが、随分それに制限されたらしい。

ある女房が、若い僧に曆を作つてくれと頼んだところ、僧はいたずらに、「はこすべからず」という日を作つた。「はこ」とは大小便をすることをさしている。

何しろ、こういうタブーをおかすと、どんな厄がふりかかるかもしれないと、まじめに信じられていた時代だから、女房は苦しいのをこらえて我慢した。

しかし、あくる日も又「はこすべからず」と書いてある。

女房は両手でお尻をかかえて、物もいえずに苦しんだあげく、ついに失心してしまつたという。

こんな話は一種の諷刺なのだろうが、夫が妻をこのタブーでいじめることは出来ただろう。

何しろ物忌ものいひの日は、まるで牢屋へとじこめられたように、一室にこもつていなければならぬのだ。

陰陽師は、目に見えない神をつかつて、術を使うことが出来ると信じられていたから、美しい女を、一室にとじこめて、悪霊を退散させると称して、思うままの姿態をとらせることが出来ただろう。

奇妙な呪文をとこなえながら、長い黒髪を波打たせる女を、這わせたり、立たせたり、逆さにしたり、くたくくになるまで動かして、それでもまだ悪霊がついてゐるといふて、ムチで打ったり、火で焼いたり、さまざまにいじめさいなむことが出来るのではないだろうか。

平安朝の上流の女たちは、現代の和服のよきに、何本もの紐を使って、きちんと身をし

めていないから、激しく体を動かしたら、乳房まで見えてしまいそうな服装をしていたらしい。

そんな衣裳とあの長い髪の毛は、悦虐をよ

り一層美しくいろどるだろう。

なまじ縄なんてもので体を拘束せずに、衣裳が自然にぬけて裸体になってしまうまで、

悪霊や鬼神にかこつけて苛めぬいてみたいよ

うな気がするし、そんな姿でいじめられてみたいような気がするのである。

(おわり)

〔新版〕女体緊縛フオート オンパレード

R組 百花撰

大手札判 (印画紙 9×13 ㎝)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
薄羅の後手緊縛	くさりセメ	松樹後手しぼり	変型足手しぼり	高小手しぼり	逆エビ責め	股間しぼり後手	後手吊りセメ	逆さ本吊りセメ	梯子責め	強烈な椅子セメ	帆立しぼり	いたふり	足場椅子セメ	緊縛横臥	立木野外しぼり	トイレでの縛り	猿くつわの魅力	開股しぼり	尻立後手しぼり	女学生制服しぼり	股間しぼり正面	鎖しぼり晒責
(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(藤千恵子)	(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	(春日ルミと伊吹)	(伊吹真佐子)	(厚狭春江)	(村田那美子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)	(川辺砂登子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(伊吹真佐子)	(藤千恵子)	

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ファンタジア

マゾヒスティカ



山本節夫

二十五 思い出(その二)

小学校の二、三年の頃であろうか、おしんという一寸、顔立ちの整った女中がいた。本所の大工の娘とかで、チャキチャキした処があった。

いつだったかの宿下りの時、私は連れられておしんの家にいった。お菓子や御茶を振舞われていろいろな遊びをやったりしたが、その家におしんの従妹という女性がきていた。一つ年下というから当時十六、七だったろうか。色の浅黒いボーイッシュな女で、子供心にも随分、足の長い女だなと思った。今でいえばスラリとしたグラマーだったのであろう。勿論、みんな和服であった。二人は仲よしとみえてキヤアキヤアいいながら、ふざけ合っていたが、やがてチャンバラ・ゴッコを始めた。当時はキネマの全盛時代で、阪妻や林長二郎(今の長谷川一夫)市川右太衛門達が若い役者の第一線であった。寄らば切るぞ。今宵のコテツは血に飢えている。とかなんとかいいながら、チャン、チャン、チャンと口三味線を入れながらの切り合い。やがておしんが切られて、どうと倒れると、勇敢にも従妹はおしんの腹の辺りに馬乗りにな

って押えつけ、刀を喉元に突きつけて、往生致せ」と迫る。おしんは切られまいともかくので、従妹はぐつとのしかかって胸の辺りから首の附近に誇って、どうじゃ、宝の在りかを申すか。申し上げますから生命だけはオタオタ……。

× ×

はなれた二人は、また向き合って、今度こそは不覚はとらぬぞ。何を生意気な、返り討ちだ」と、また始める。無念」と這いつくばうおしんの背中に馬乗りに跨った従妹は足もはだけさせながらゴシゴシと首を切る真似をし、バツタリおしんが倒れると尚も組みしいて、止めをさす。みている私は何だか自分がいじめられている様でゾクゾクしてきたが、二人は夢中で私の様な小さな子供の存在など全く無視していた。不思議に手向い始めるのは、いつもおしんなのだが、負けて殺されるのも又、おしんなのである。どうも男らしい従妹の刃にかかっていじめられたい気持があるのではなかったかと、その当時でもおぼろ気ながら感じたことであった。

おしんの従妹には、その後、会う機会はなかったが、幼い私の空想の中によく現われておしんの代りに私が組敷かれていじめられる

姿をよく想像したりした。

二十六 幻想

外は春の雨が煙っていた。女子大生N子のアパートは渋谷の高台の閑静な一劃にあった。沈丁花がつんと鼻をつく坂道を上って行くと、二階の真中辺りにN子は待ち構えていた。私は電話で呼び出されたのである。

ドアを開けると、その入口にペタリと跪ずいて私は最敬礼した。尊い御主人様、御呼出しにより哀れな奴隷めが推参いたしました。N子は品のいい室内着でベッドの傍に腰を下していたが、おもむろに、よく参った。

うい奴、近う寄れ、恐る恐る御足許に近ずき足先にいつものように口づけをすると、ほんと、その形のよい足で私の首すじを蹴りながら、退屈だからお馬のけい古がしたいのじや。早く用意を致せ、そんなことだろうと思つた。私は素早く上衣とズボンをとるとランニング・パンツの姿となり、かいがいしく女王様の足許に這って、御乗りになるのを待った。女王様はストッキングを御取りになり、新しいレインシューズを御召しになると手綱を私の口にかませ、鞭をもって全く手なれた調子でドッカと馬の背に御跨りになった。ギ

ユツと両足がしまり手綱がしぼられて、私は折柄、鳴りはじめた「競馬」のレコードに調子を合わせながら歩きはじめた。

ハイシ、ハイシ、何と御上手な責め方であろう。馬は手綱と両ももで指示される方向に首を高々と上げながら歩きつづけた。

一廻りすませて馬上のまま休憩が許されている時、戸口のベルがなった。どなた、私、ああミツコ、ええ、どうぞ、鍵はかかってないわ。あら、なあに、その格好は、ごらんの通りお馬のけいこ最中、馬上御免。どうぞ、御ゆつくり。それにしても勇ましいわ、御姉さま。どう、ミコも跨ってみる？ うん、だけど恥しいわ。あたしのいうことときかないとミコもお馬にしちゃうぞ、いいか。じゃあ仰せにしたがって跨ります。よし、もう一責めするからみておいで。コラッ、走れ。ハイシ、ハイドウ。

観客がいるので、しかも可愛がっているSのミコがいるのでN子女王様は一層はり切つて、やたらに体をゆすって乗り廻される。馬はとうとう悲鳴を上げてバテてしまう。

コイツ奴、怠けるとただでは置かないぞ。どうだ、これでもか。

馬は首の上に偉大なる女王様の御尻を戴い

て涙ぐむ。

少し休ませたら、やさしいミコちゃんか助言して下さい。そうね、お前も乗るんだから一息いれてやろうか。

そして、やっと御仕置が許される。

× ×

そもそもN子との関係は、こんなチャンスで始まった。夜も大分遅い時間、電車はひどく混んでいた。坐っていた私の前にスタイルのいい、目もとの美しいというより少しきついぐらいの美女が立った。手には相当大きな荷物があり、人に押されて苦しそうであった。その時、席を立て譲ろうかと思ったがそれも恥かしく、せめて荷物を持ちましょうかぐらいいった方がいいなと自分で思いながら、いいそびれていると、美女の方から無言で私の膝の上にそれを置いたのである。先手を越されてドギマギしながらも黙っているとくだんの美女は次の駅で、どんどん出口の方へいってしまふ。もしもしという言葉も出ず吸いつかれた様に私も荷物を持って下りてしまった。美女は振り返りもせず、当然、私が従者の様についてくることを見越している風で、ズンズン歩いて行く。

そして連れて来られたのが、このアパート

であった。パチンとスイッチがつく。私はバツの悪い顔をして、ここに置きます」といって引き下ろうとすると、お待ち」と声がかかる。お前は大体、生意気よ。私を立たせて置いて荷物を持つとうもしないで。悪いと思つたら手をついてあやまれ、私は魅入られた様に小さな玄関のタタキに手をつくると素直にあやまった。プンと香水の匂がしたと思うと私の肩の辺りに彼女の重味を感じた。彼女はひざまずく私の肩の辺りに馬乗りに跨ったのである。ハイヒールの先が私の手の指を、ぐっと踏みつけた。どうだ、参ったか。これから私の奴隷になるか。なります。いつでも私の馬になって奉仕するか。はい、なります。よし、それじゃ今日は許してやる。

こうして不思議なことから私のN子女王様に対する隷属の歴史が始まったのである。御用があると御呼出しにあずかり、馬としての御務めを果したり、苦役をおおせつかるのである。

勿論、報酬は一銭もない。それどころか、アパートへの御買物の御供には、私が所要の金銭を自ら調達して御用を果すのである。

二十七 マゾ的編曲

(銀座のカンカン娘の節で)

背にまたがり 馬乗り娘
ぐいっと手綱を 後にしほり
ハイシ、ハイドウ しっかりお歩き
なまけやがると 承知をしねえぞ
鞭がほしいか パシンと飛ぶぞ

バテた御馬に つっ立ち上り
首にまたがり しめつけながら
どうだ参ったか 薄のろ野郎奴
下手にもがくと 窒息させるぞ
参ったしるしに ヒンヒンとなけ

跨りつぶした お馬の顔に
脚をひろげて どっかと馬乗り
ハイシ、ハイドウ こんな馬なら
朝から晩まで 跨りたいわ
ハイシ パカパカ ああ好い気持。

二十八 新聞記事

一昨年の九月二十一日 産経新聞

「秋のキャンパス」No.3
さっそう、風切って。

○……すみきった秋のひざしをあびて、明る

くひろがる午後の馬場。授業の終るのを待ちかねた女子高校生が息せききってかけこんでくる。乗馬ズボンに長靴をはいて、愛馬「マヤ」にまたがると、さっと風をきってかけていく。障害を大きくジャンプ。晴れやかな笑みを浮べて、また疾走へ。

○……淀川の流れを横にみて、馬を駆る。都心からさして遠くはないが、ここだけはのどかな別天地。「わたしは馬に乗っているときが一ばんたのしい。何もかも忘れてしまうから」両親の反対を押し切って乗馬を始めたこの娘さんは、いわば新しい時代のシンボルともいえよう。

○……「ああしんど」ひと息いれたところでそばから坊やが草をさしだす。「マヤ」にとっては文字通り「天高く馬肥える秋」で食欲も旺盛だ。

「マヤ」にまたがったまま、愛馬の食欲をみつめる娘さんのほったに、秋風がさわやかに吹きすぎる。

……………

腕の根もとまでの短い白い上衣。足さきを天にむけて悠々とまたがり、手綱をピンと伸ばして馬に草を食べさせている可愛らしい御嬢さん。(写真。秋空のもと、ひと汗かいて

愛馬に草を与える)

二十九 藤村の詩について

ゲーテの詩には、恋する美しい乙女に踏まれて死にたいという董の唄や野ばらの歌。はては「願わくば吾、君の馬とならん」という卒直なものまであることは再々述べられている所だが、日本の詩人の中にも、なかなか多い。例えば藤村の「吾の胸の底のここには」の一節は次の様にうたっている。

もしやわれ草にありせば

野辺に萌え君に踏まれて

かつ靡きかつは微笑み

その足に触れましものを

三十 提案

馬乗り気分を味わいたい御嬢様方へ。

馬といっても本当の馬はそう簡単には乗れないし、馬代りの男の子もチャンスがなければ扱えられぬ。そういう場合には「フトン馬」で代用いたしましょう。

まず敷蒲団を三ツ折りぐらゐにして成るべくかさ高に、しかも細長く二、三枚積み重ねその上に掛け蒲団を同じ様に重ねる。この場合、やわらかくふくらしたもののほど上部に置く様にする。関東でいうカイマキなどがあれば四ツ折にして鞍替りにするといひ。男も

のの帯を両端むすんでフトンの中間辺りに挟み、アブミの役目をさせ、別にタスキの様なものをフトンの前部に引かけて手綱とする。足が地につくかつかぬかぐらいの高さにしてさて、徐ろに跨りハイシハイシと取りますと相当の乗馬気分が出るものです。鏡台でもあれば乗馬姿が、殊にスラリとした美しい脚やヒップの具合がよく判る。

三十一、架空インタビュー

馬乗り姫と馬乗られ男との対談の一節。

△ ところで相手を馬にする場合、多少の抵抗があった方がよろしいでしょうか。

○ そうね、馬になれ、はい、では一寸物足らないわ。やっぱり四の五をぬかして逃げようとする奴を追っかけて、とびかかって首をしめるか逆手をとるか、とにかく行動出来ない様にして押えつける方が面白い。つまり家来にする段階ね。大体、首すじを掴んでひねり上げると、地面にしがみこんでひざまずくわ。そいつの首にまたがってギュウギュウいわせて降参させるケースが多い。

△ もっと抵抗したらどうでしょうか。

○ 首に跨って押えつけると、脚の間からすり抜ける奴もいるわね。そうしたら承知しないわよ。今度は逆手をとって仰向けに転がし

てお腹の上に跨ってやる。この時なんか相手
がもがけばもがくほどいい気持ね。これでも
か、これでもかと押えつけてやる。下になっ
た奴は死にもの狂いであばれる。だから、こ
っちは丁度、馬上の気分でユラリユラりと身
体が動くでしょ。そうする中にだんだん上
の方に御尻をズリ上げて最後に首の上に馬乗り
になっちゃう。これがまたいいんだ。苦しい
から顔を左右にうごかす奴を、ぐいぐいとし
めつけて行く気持っていいものよ。

— マゾ通信 —



『或る女優の乗馬日記』

について

倉 仁 成 人

拙稿を四月号、五月号、六月号の三回に亘
って載せて戴きありがとうございました。こ
の原稿は何しろ昨年の暮に書きましたもので
活字にされたものを再び読んでみますと、今

更ながらの拙い文にて赤面致して居ります。
尚、本誌上の私の原稿にはカットされた部分
等もありますが、これは編集技術上や対外的
の関係もあると思いますが、私としてはかえ

△ それから、いよいよ顔乗りということに
……..
○ うん、獲物が力つきてグロッキーになっ
たところでね、どつかと馬乗りになって顔全
体を尻に敷いて、一分間ぐらい蒸してやるの
よ。吐く息が熱っぽく伝って来る頃、一寸お
尻を浮かして「降参か」ときいてやる。参ら
なければ又、腰を下して何回も御仕置をくり
返せばね、をあげるわ。
△ それからの御けいこは一層、はりあいが

ある訳ですね。
○ 勿論よ。こちら弱いものいじめで愉快
になっているから、そんな時は思わず乗り過
ごして馬をつぶしちゃうことが多い。つぶれ
たって絶体、容赦はしないんだから。ハアハ
アと息を喘がせながらヨワヨワになった奴を
蹴り上げ、叩き起して歩かせるんだ。
△ そこで下馬して許してやる……..
○ まだまだ。許してなんかやるものか。御
奉仕が残ってるじゃないの。

って助かったと云う感じです。と云うのは、
私の原文は赤裸々な、俗な言葉で云うなれば
少々エゲツない部分があったからでありま
す。この点、編集の方々には感謝致す次第で
す。

さて私は、昭和二十八年一月号よりの本誌
の愛読者ですが、同傾向の雑誌類の中でも本
誌は老舗的存在であり、最近、亦々本誌を模
倣したような各種の雑誌が、街に氾濫してき
ました。この事は考えように依れば甚だしく
危険が伴うものです。この中で本誌は一陣の
清風を吹き込むものでありたいと思います。
内容に就いても他誌と異なりサド一辺倒とな
らずに、いくらかなりとも（時としては五割
方も）我々マゾの者始め、多方面に亘って誌
面をさいているのは、最も大きな特徴であり

それ故に私が長い間、愛読しているゆえんです。

このような点から本誌では、あまりにも血腥ぐさい残酷なものや、卑猥なものは当然カットされるべきであります。

それからこれとは別な事で、しばしば問題になる事ですが、個人同志が誌上を通じて知り合ってプレイをしたり、同好者同志が会合を持つとか、会を組織するとなると、そこには当然、文字通りの複雑怪奇な対人関係が発生し、やがては相互の利害関係にまで結びつき、遂には犯罪行為にまでも発展しないとは断言出来ません。いわんや、人の後をつけ回し、住所をつきとめ、電話を掛けるなどとは以っての外の事だと考えます。ですから、いかに同好者同志であろうとも、お互いの話合いの場は、あくまで誌上で行われるべきであります。

さて、私の本誌に対する考え方はこの位にして例によって一般刊行物等の中から私の眼についたマゾ的なものを拾って見ましょう。

先ず最初に、世界裸美画報四月号「ミスター人間馬と云われて」は女性の馬となって喜ぶ男のあることを述べた単にそれだけのもので、ブラジャーパンティの半裸の女性が四つ這いの男に跨っている挿絵もありますが、全然いただけません。次にライフ誌二月二十九

日号「ヨーロッパの愛らしき王女達」の記事と写真の中には、オランダの王女が林の中の騎馬道を馬を速足で責めている写真が真正面から大きく載って居ります。王女が跨っている白馬の白さと、王女の履いている乗馬靴の黒がよいコントラストをなしていますが、あまり出来のよい写真とは云えません。恐らくこれは写真のシャッターチャンスがよくなかったかでしょう。週刊誌の中では「週刊スリラー」三月二十五日号、六五頁の記事の中にある乗馬マニヤの女性が「馬に乗ると日頃、私達が男性に抱いているある種の劣等感から解放されます。それに生理的にも乗馬は女性にとつては強い刺激が感じられるし、ポーズそのものがある奇妙な欲望に連っているわけね！」と云う言葉が私の気に掛った程度でした。最近の「週刊スリラー」は例の一件の記事が書かれて以来、この種の記事や写真が多くなりましたが、これは我々をいくらか理解し始めた現れと思うのは私の独り合点でしょうか？

映画関係では期待の『痴人の愛』がいよいよ封切りが迫りましたが、それに先立っての新聞広告等では、四段半大の大きさに叶順子がネグリジエ姿で四つ這いになった船越英二の裸の背に跨って、胴を締めつけながら艶然と笑っている写真や、船越英二が同じ姿の叶

順子の前にひざまづき、その足に接吻している写真等、思わず息をのませる程です。

大崎蘭子様へ 私の原稿は私が全く想像で書いたものでしたが、現実には貴女様のような方が居られるとは驚きもしましたし、亦、大変嬉しく感じました。私は清楚なナヨナヨした感じの女性の乗馬姿より、貴女様のようなグラマー女性が馬に乗る姿を想像する方が、より素晴らしく感じられます。いつ頃だったか忘れましたが、ある馬場で素晴らしい体格のグラマー女性が馬に跨った時に、馬の背がグツツとなつて下るのが相当離れていても、はつきりと判った時は、真に胸にジンとくるものがありました。貴女様の出現は我々同好のものにとつては、新らしき女王様が現われたのと同じようなものです。折々の時には通信等をお寄せ下さい。そして第二、第二の乗杉貴代子様（旧号参照）が現われる事を期待します。

最後に編集の方々へ、編集者の手記は非常に興味があります。今後も続けて下さい。亦一般誌の如く、編集後記が必要ではないかと思ひますが如何でしょうか？、それから、前に発行予定となっていた単行本の件はどうなりましたか？本誌の読者の大半はサド傾向のものと思ひますが、たまには我々の為の別冊の事も一応考えて下さるよう御願ひします。

サ ド 小 説

白

と

黒

蟻責めに遭う美女の苦悶

萩市湯之次

朝見健太郎の死体は、杉山村を襲った昨夜の豪雨で水量を増した水響川の土手ぶちの雑草の中で、村の青年団の手によって発見された。

すでに、昼に間近かかったが、現場は殆んど乱れてなく、誰の目にも、どこか他の場所

で殺害されて、ここに死体を運び込まれたのであるという事は、一目瞭然だった。

所轄の警察から係官がすぐに到着して捜査を開始した。

い打撲傷を負っていた。しかし、それとても致命傷となる決定的な物ではない。水響川でも上流なので、死亡時刻からは随分、隔つての発見だったし、兇器、その他の証拠物は、どこからも発見されなかった。

剖されることになった。

健太郎について知らされた点は、近県有数の豪農、朝見大蔵の一人息子、当年二十八才、中肉中背の性格は陰性、彼三才で母死す、彼五才で継母達子が、大蔵に嫁ぐ。彼、十九才で父死す、二十六才で歌代と結婚と、まあ以上の様な事だった。

捜査の重点を置き、二日後に近県の病院で解

ただちに担当刑事の風間が、山腹の朝見家に向かった。彼は三十二になる、ちよっとした腕ききだ。

黒光りする大黒柱を中心に豪荘な屋敷は、まるで訪ずれる人々を押し殺す如くに、陰鬱な流れがそこに漂い、彼は息がつまりそうになるほどだった。

天井の低い、馬鹿にだだっ広い飾りのないすすけた広間に、達子は一人、黙然と座っていた。後家である為か、髪は乱れ、しわ深いそれでいて少し肥えた色の浅黒い女だった。

どう見ても美人には、ほど遠い醜女だ。
(なんと気味の悪い女だろう……)

風間は、つぶやきながら

「あなたが、達子さんですね……」

と、ちよっと頭を下げ、すぐに訊問を始めた。

「エーと、まず、あなたは事件当日、外出はされませんでしたか？」

ある種の疑惑の眼で風間を見つめて、

「少し足を痛めまして、ここ二、三日は外出をさせております」

落ち着いた態度で言った。

あらゆる点から問いただしたが、得る物は何もなかった。

達子の後姿を見ながら風間は、ホッと嘆息した。

すぐに歌代が入って来た。

美人と評判の高い彼女は、達子とはまるで正反対で、長身の少し痩せめな、それでいてどこか気品のある明るい性格の女だった。

(まず、この女は、この事件には関係ないだろう……)

そう思いこんでしまうと、訊問も手早くすませてしまいたい。ふと、そんなことを考えた。彼女は、丁寧な礼をして、美しい澄んだ瞳で彼を見つめた。

(サア、どうぞお尋ねください。知っている事は何もかも話します。早く夫を殺した犯人を見つけてくださいよ) という風な意気どみを感じさせる目だ。

愛らしい悲しみに満ちた顔。

彼は、何を尋ねるべきかを忘れてしまいそうな気がした。

女中、下男と矢つぎ早やに調べ続けた風間が、落胆して朝見家を出たのは、星も見えない時刻だった。

二週間、経過した。

事件は依然、解決の目処はついていない様だった。

その夜遅く歌代は、達子の部屋に呼ばれた。普段でもあまり達子とは話したことがない歌代は、不審に思いながら、言われるままに彼女の部屋に入った。

達子は、黙然と鋭い食い入る様な残忍な目で歌代を見つめた。

歌代は、ただならぬ気配に、背すじが、ぞーっとして、おもわず身を硬くした。

数分間の沈黙が続いた。突然、達子は、

「歌代、私はネ……。私は、どうしてもあなたが健太郎を殺したに違いないと、そういう風な気がして、悩み苦しんでいるんだヨ……」
悲嘆に沈むが、憎悪の声でつぶやいた。歌代は思わぬ姑の言葉を聞いて、サーッと戦慄し

「エッー、私か？ 違います。私がなんで、そんな恐ろしいことを……。私は夫を愛しています。私じゃ有りません」

かほそいが、澄みきった落ち着いた声だった。肩を、こきざみに震わせていたが……

「フフッ、そうかネ」

「……」

「しかしネ、あなた達夫婦はまるで憎しみ合
って、私には他人の様にしか思えない。それ
や、あの子はああいう性質ですから、あなた
も辛かったでしょ。でも私にすれば、あなた
がもっとあの子を暖かい愛情で包んでほしか
った」

「ハイ、私も毎日、努力してきました。しかし
そんな疑いを持つのはやめてください」
三方を壁に囲まれた、この達子の部屋は、
彼女が大蔵に嫁いだ日からかれこれ二十三年
間、どこも改築されずに昔のなごりをとどめ
ていた。

そしてこの六畳の部屋は、玄関と庭に一番
遠かった。

古風な女として育ったのであろう、落着
いた動作にも苦勞した姿がうかがえたが、大
蔵との夫婦仲はうまく行かなかったらしい。

北隅に小さなタンスと鏡台、西に押入れが
目につく程の薄暗い陰気な部屋で、二人の女
は互いに相手を見つめて言い合った。

達子は是が非でも歌代を犯人に決めつけて
しまおうと、まくし立てた。

かなわぬ時には裸にしても白状させよう
と、いや、いっそうのこと、憎いこの女を裸
にして力一パイ責め苦しませてやるんだ。そ

んな事を考え
ながら反抗す
る歌代の声を
聞いていた。

歌代は懸命
に反駁した。

「違います
！」

ほとんど涙
声になりがち
だった。

達子は強引
に挑むように

「あなたは怪
しい。あなた
は人殺しだ。

健太郎を殺し
たのだ」

と、たたみ
かけた。

「ち、違いま
す。私は何も

知りません。
私は潔白で
す」



涙声で哀願したが、達子は残忍な笑いを浮かべるだけだった。

自分の考え通りになってきたからだ。

「ソー、潔白ネ。お前の潔白とは、どんな物なんだい。私に見せておくれ」

なだめる風になりつくろって嘲笑した。

「……」

歌代は、ハッとして俯向いた。

「脱ぐのだよ。裸におなり。お前の身体で潔白を見せるのだよ」

辛辣に命じる達子。

「エエッ！ イ、いやです。何もしません。犯人は私じゃありません」

同じ様に答える以外に歌代は、どうしよう

もなかった。

「サア、お前が言い出したんだよ。潔白だとネ。それとも、やはりお前は犯人になりたいとお言いかい」

「裸は、いやです。お願いします。どうぞ、それだけは許してください」

「何を言うの……」

彼女は烈火の如く怒った。

「女同士に何が恥かしいの。人に見せることのできない醜いアザでも有ると言うのかい。グズグズせずに早くお脱ぎ」

がらりと変った声。そうして次第に血走って行く目。

もう人間ではなかった。

「早く、早くしなさい。どうしてもいやならどれ私が脱がせようか。ほれ、ほれ、愛しいムチでお前は打ってもらいたいのだネ。サアサア」

「イイエ、いやです」

歌代は拒み続けた。

達子の射る様な眼に、歌代はぶるぶる慄えここで拒ばんでも達子のすさまじいばかりのいらだちを鎮めることは出来まい。仕方がないが一思いに身の潔白を立て、偽りのない真の気持を知ってもらおうと、静かに目をつぶった。が、これはやはり失敗だった。

恥かしさと、くやしさに目に涙を一パイにして、帯をとき左右に着物の衿をはだけた。

真紅のもえる様な長襦袢ひとつに身を包みむっちりとしきしまった、しなやかな肢態に水気を含んだ照り輝く肌を抱きしめて、歌代は達子の前に立った。

「オオ、なんと美しい身体じゃ！」

と、つぶやくように言ったかと思えるまに、達子の手はスーッと歌代の体に延びていた。ピシッ！

鋭い一撃とともに、歌代の身体は床に、たたきつけられた。五十を過ぎたとは思えない達子の力だった。

「アッー痛たッ。なにをするんです」

歌代はもがいた。が、彼女は忽ちその場で背中へ腕をねじ上げられて、椅子の背に細紐で、きつく縛りつけられた。

はちきれそうな柔らかい、円みのある乳房は、縄目も痛々しく、ピンーと上にはね上りその痛みで、歌代は身をのけぞらせた。

思わず、ウウッと息をのんだ。

「痛ッー、アアッ、助けてエー」

激しい不安と痛みで絶叫した。

手首を動かすにも余りにもきつい縛りに動かしようもなかった。

「よいかな、歌代。真にお前が正しいならばそれぞれ、これを我慢してごらんよ」

はっとして目を上げる歌代に、達子は右手で一本の針を持ち、つややかな弾力のある柔肌に、プツリーと突き刺していた。

ぶっーと赤い血が、玉の様に噴き出ると、一条の糸となって流れ、もえる様な襦袢を染めていった。

「ウウ、ウッ……」

たちまち胸をそらせ足をばたつかせて、歌

代は苦しみ始めた。

「違います、私はそんな……」

「サアーすっかり白状おし。ホレ、ホレー」

プツリと再び達子は、歌代の腹に針を突き刺した。ツーと浮かぶ血の玉。

「アッ」声を出すまいとしたが、余りの痛さに思わず呻き声を洩らした。

「ウッ、ウウッ、やめてください！」

苦しそうに身をくねらせて身をもだえた。

しかし達子は、ようやく衰え始めた我が身と比べて、歌代のはちきれそうなつやのある美しい肌、肉ずきのよい全身を白魚の如くもだえさせている姿に異常な嫉妬心を持ち、何かにけしかけられた様に、プツリ、プツリと針を突き刺した。

「ひいッ、ひいッ、ウウッ！」

呻き声とともに、刺された皮膚には真赤な血が噴き出てゆく。

達子はニヤニヤ笑って無惨な縛られ様を見つめ、汗ばんだ青白い顔を振って哀願するように呻くのも無視して、くびれた豊かな胸を撫で廻した。

丸く張り上っている乳房は、達子が縄目に手を加わえると縄目はぐいぐい柔らかな肌をめり込み、はち切れんばかりの型を作った。

達子は、再び鋭い針をとり上げ、ほとんど血で赤味をおびた腹部めがけて力一パイ刺した。

達子の手は血で染まり、固い椅子から床に赤い粒の花を咲かせた。

「ゆるして……ゆるして……」

上半身をくねらせて哀願した。

「お願いです。私は知らないんです。お許しを……」

歌代は涙声して絶叫した。

「サアー顔をお上げ。早く白状をなさい。それ、それ」

「ウウッ、ひいッ」

しかし、悲痛な呻き声もうすれ、歌代はそのまま気を失なった。

傷の痛みに、歌代は息をふき返した。が、我が身の姿に思わず愕然とした。

「ああッ……」

何んということだ。

厚い等身大の広さのつめたい銅板の上に俯伏せにされて、両手首、両足首は銅板の四隅の細紐に、きつく結びつけられていたのだ。身動き一つ出来ない。みるも無慙な責め姿だった。

息を吹き返したのを、好奇の目で見つめて

達子は、

「うふ、うふふ……」

新たな冷遇に喜悅し、うすきみの悪い笑を浮かべて、びしゃびしゃと、ムチを容赦なく降り下ろしはじめた。

柔肌は怪しく身ぶるいし、びしゃ、びしゃと烈しく鳴った。

「アアッ、助けて！」

歌代は、屈辱と恐怖で必死に身をこわばらせた。

びしゃ、びしゃと柔肌にムチの音は鳴りつづけた。

「ホホホ……それ、それ、だいぶ赤味をおびてきたわよ」

満悦の面持ちで、達子は再び、びしゃ、びしゃ、と打ちすえ出した。

「ひいッ、ああッ、ウウッ！」

もだえるたびに、全身の筋肉が妖しくよじれる。するとムチが歌代の背に襲いかかる。

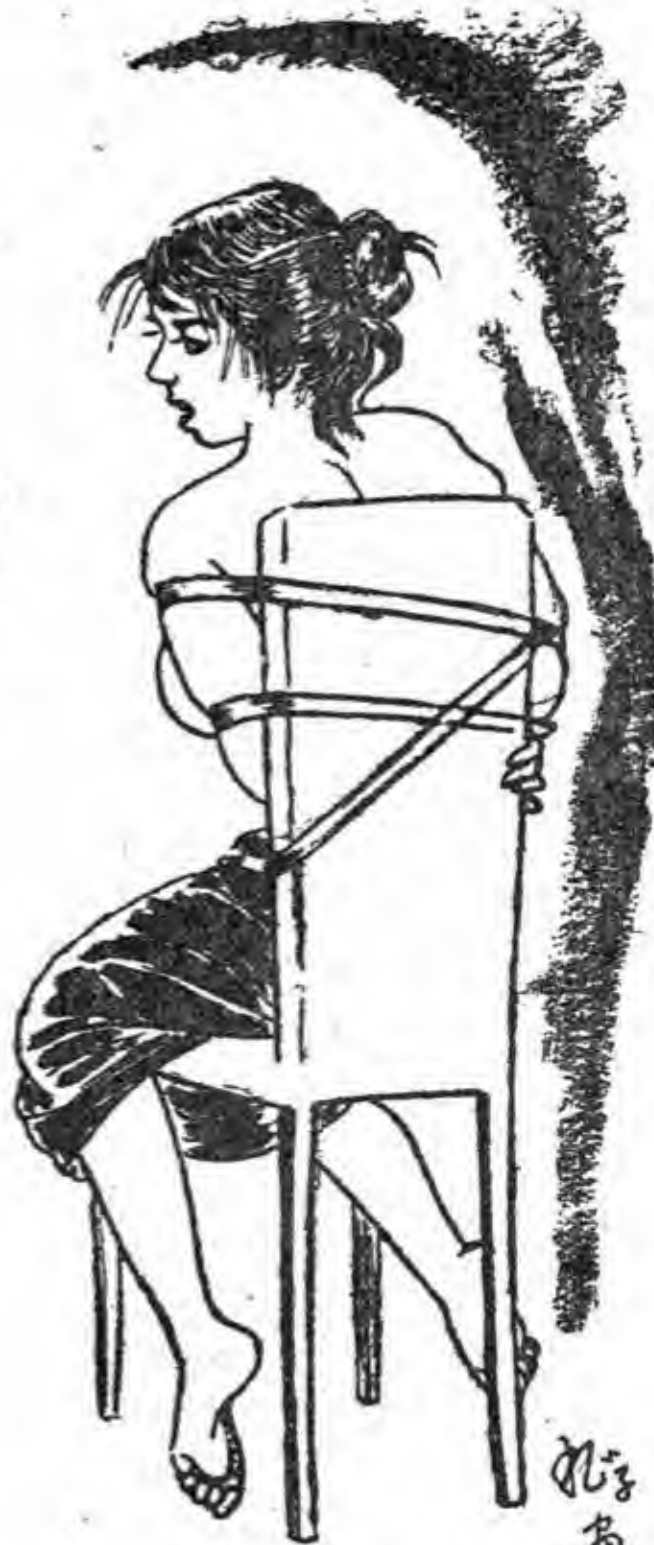
「あッ、あッ、はあッ、はあッ、もう、許してー」

呼吸が、とまりそうになる。歌代は必死に哀願した。

しかし達子は、今となっては、ただこの女

を責める楽しみで、心も身体もふるえ立ち、犯人の如く髪をふりみだして打ち続けた。ムチが円、楕円、拗物線となつては襲い、

そのたびに、上に下に、横に、種々の形を現出し、光沢のある銅板に美しくくも奇怪な白模様を描き出した。



れん

達子は完全に酔っていた。若い清潔な女の匂いが、汗の発散とともに漂って、益々彼女を恍惚にさせたのだ。

歌代は、この窮屈な姿勢から逃がれようと懸命に身体を動かした。けれども、細紐は以前よりも強くしめつける。

.....

若い、しかし熟れきった細身のからだ、なだらかな線を描くと、達子は「そ」うだ、尻が憎い、腹が憎い」と心の中に憎悪の念が起り、不思議な力にさそわれる様に息をはずませて、めくら滅法にムチを振った。振り続けた。

ピシッ、ピシッ、静まり返った深夜に響くその音。

しみ一つない珠の肌は、いたるところミミズばれの走る肌になって行く。

さすがに、達子が健太郎を自分の様に責めて殺したのだということは、歌代にはわからなかったが、しかし、もしかしたら達子が健太郎を、という淡い予感がしないでもなかった。そして、それを知る事は彼女にとっては不幸だったのだ。

自分も同じ様に最後は殺されて、無惨な死体を路上にさらすことになるのだ。

(いやだ、死ぬのは)

歌代は、力のかぎり銅板をかきむしり、身体をのけぞらせた。

(助けテ！)

叫けぼうにも咽喉が痛く、ほとんど声は出なかった。

すでにムチ責めは止まっていた。

「ハアッ。わ、私はなにも……」

責めるも責められるも身体は汗でしっとり濡れ、あえぐような息をはずませた。

「アアッ。ゆ、ゆるして」

一瞬間、苦しみが柔らいだが、再び達子のざらざらした手が、歌代の体をしっかりと捉えた。

ガラス器具の触れ合う音がして、なま暖かい溶液が、ビューと音を立てて、そそぎこまれた。

不快な感覚が足の先から頭へ通り過ぎた。

「ウッ」

身体をそらしたが、溶液は尚もそそがれて余りが肌を伝って銅板一面をひたした。

「ザワッ、ザワッ」

異様な物のすれ合う音、すさまじい物音。涙目に写ったのは黒い小さな生き物だった。

銅板の角からせまって来た。

蟻！

蟻の群れ……。

蟻の群れだ。

黒液を流がした様に銅板は、蟻の群れで被いつくされた。

身体に不似合な大きな頭、長い触角、六本の手足。

すさまじい早さ、何かを求めて蟻の群れは白いきめのこまかな肌を進んで行く。

羽毛で撫でられような、それでいてピクピクと所々に痛みを感じる、今まで経験したことの無い激しい異感をおぼえさせる。

達子は一体、何をしようとしているのか。

黙然と眺めているだけだった。

これらの蟻は、夫健太郎が仕事の間に集めた蟻に違いない。

小さな頃から母を失った彼には、小さいあの黒光りする生き物が、唯一の友達であったのであろう。

わざわざ、小屋を庭の片隅に作り、その中は蟻を放って、毎夜、一人で何にやら研究していたが……。

彼女、歌代は妻として、この孤独な夫を明るく、ほがらかな夫としようとして一生懸命、彼

につくした。

彼女は、十分に彼を知って彼と結婚したのではなく、むりやり結婚させられてしまったのだ。しかし彼女は、後悔していなかった。

一生を暖かい愛情で彼を包み、幸福な家庭を築こう、そう心に固く決めていたのだが……。

しかし、すでに夫はこの世を去った。そして自分だって、どうしようもない窮場においてこまれている。

ぞくぞくと蟻の数は増していく。

新らしい苦痛が始まった。

口と眼をしっかりと閉じ、一生懸命に鼻から息を吐き出した。

「フッ、フッフッ」

蟻の侵入を防いだ。浣腸液は砂糖水だった。

「ザワ、ザワ……」

「アアッ、ウッ、アア……」

何んとかして、この蟻の攻撃から逃がれようとして、歌代は銅板に身体をすりつづけ、もがきのたうちまわった。

振り落され、つぶされ、汗に流される蟻。人間と蟻、白と黒の争い。

それも、つかの間。

「た、助けてー」

最後の力を振りしぼって絶叫した。

「ホホホッ、なんと素敵な眺めだこと。健太郎が行く、蟻が行く。ソレ、ソレ、まけずに仇きを討つとくれ。ハハハハ、ウワッ」

髪は乱れほどけ、目を吊り上げて血に染まった手を打ち、足を振り上げながら、達子は銅板のまわりを跳びまわった。

そんな達子の姿を身を震わせて、ぼやっと見ていた歌代は、ハッとして

「あなたです、夫殺しの犯人は！」

と叫んで気を失いかかった。

しかし達子は、そんな歌代の叫びも無視していた。

すでに彼女は人間ではなく、一塊の動く生物にすぎなかったのだ。

蟻は二重、三重にも重なり合い、うごめきあって歌代の身体を埋めていった。

ついに、最後が来た。

歌代は静かに歯の間に舌を挟んで、力を加えて行った。

と突然、すさまじい騒音とともに壁がくずれ落ちて数人の男が部屋に跳び込んで来た。

歌代の目に風間の顔が、ぼーっと写ったが、すぐに彼女は失神してしまった。

(了)

◎次号◎九月特大号予告

△七月下旬発売V

絵物語 四馬孝案画

「網にかかった女が裸に剥かれて縛られるまで」

グラビア写真「特写フォト・卅二頁」辻村隆構成、四馬孝、杉原虹児

「風流いろは草紙」滝れい子画

◇本文主要呼物記事◇

緊縛と表情について 大熊 寿夫

「特に手足などの表情についての研究を豊富な参考写真によって解説する。」

或る強盗事件 南 時夫

新聞紙上に発表された女ばかりの家へ侵入した強盗事件の謎の問題を解く。

マゾ男性と嘆くことなかれ

一マゾヒストの見た女性観と述懐。 諸岡 堅雄

縛られたインテリ令嬢 浦田紀夫

緊縛のイメージが近代的なインテリ女性の上に爆発するとき筆も又躍る。

縛り写真撮影アイデアの見本例

牧 高志

長篇連載宇宙のどこかで 佐治麻造

連載小説 影の国 雪俊 遥

他に、藤山秀緒、一ノ瀬悦子、氷見竜也

ドミナ(女主人)との対話 谷田 勲

男性責のシーンを拾う 菅 良太

脚にも縄をリアルに 仁科登志夫

川端多奈子を想う 近藤 一

女相撲と女斗美 雪崎 京人

マゾヒズム百景 馬場 好男

愛好者の記録 とやま・かつひこ

「私はこの味を愛する」

私の浣腸 春村 玲子

妖(ようこん)禪 横村 奏

手記 赤い羽根 須藤 律夫

(瑠美子の告白から)

告白 女装の楽しみ 比良野 裕

マゾ時評倒錯の倫理性 菅 良太

(仏米の映画にふれて)

生贄裸女の喘ぎ 近藤 一

マゾ化訓練 仏光刀四郎

悦虐は卑猥に通じない松井籟子

—マニアの体験手記



切腹レポート

山田久仁子

私は、自身の欲求をなだめる為、もっと本
当の切腹に近く、しかも危険の伴わないプレ
イの方法を考えはじめました。そして、いろ
いろと思い廻らせた結果、行いましたのが、
ここに述べるようなものです。

実行致したのは本年二月でした。

まず、このプレイの目標としましては、本
当に腹部を切ること、それも、危険のない最
大限に深く大きく切腹して、その際の苦痛や
出血、傷口の状態などを出来るだけ詳しく知
りたいと考えました。

いろいろな書物を漁り、私自身のプレイの
体験から推して、皮下脂肪だけなら、どのよ
うに切っても殆んど危険はないものと判断し
ました。又、傷の大きさの点では、全治後の
傷跡のことも考え、三寸位い迄と独りで決め
ました。

皮下脂肪の厚さは各人各様だというぐらい
は、常識ですので、私はまず自分の厚さを測
ってみることにしました。私の場合、相当脂
肪質の体質ですので厚いだろうとは思って
いましたが、やや太目の鋭利な針で徐々に腹部
を突き刺して行き、筋肉層に刺さる特有の痛
みを目標にして測ってみますと、約八分ぐら
いもあることがわかりました。そこで私の切

先号（五月号）では、私のつたない文章を
御掲載下さいましてお礼の申しようござい
ません。まことにお羞かしい次第です。

前回は私の発明？致しましたプレイ振りを
紹介させて頂きましたが、私の欲求は、最近

あの方法では満されないものを感じはじめま
した。あのプレイは、その後も幾回か行いま
したが、苦痛の性格が、私の求める切腹の苦
痛とは、やはり異り、精神的にも不満足な思
いを禁じ得られなくなったのです。

腹の深さは七分と決めました。

位置は、左から右に向って切廻す場合、お臍の下を切る場合、十文字に切る場合、刃を返して切り上げる場合、等、いろいろに考えましたが、結局、左から右に一字に切るところにし、お臍の左三寸の位置を二寸下ったところから始まり、お臍の真下まで丁度、三寸の長さに切ろうと決めました。

使用の刃物は、米国製の折りたたみ式ペンナイフで、刃巾が三分位、刃渡り約二寸、全長四寸強のものです。きつ先から正確に七分測って、そこから柄の方にハンカチを巻き糸でしっかり固定しました。

用意が出来ると、傷口を観察する小鏡台を前に据え、出血を覚悟してビニールを敷き、その上にバスタオルを敷きました。

着物は脱いで、三宝の代りに座ぶとんを腰の下に敷き上体を起していよいよとなると、やはり、不安と気おくれを感じました。しかし、いっそ、こんな事はやめようと思いがら、誘惑の方が強く、遂に念願の切腹をしてしまったのです。

最初の一撃は失敗でした。思い切って刺した積りですが、皮膚を破っただけで刺さらないのです。私は夢中になって、力一杯、たた

きつけるように、第二撃を突き刺しました。

「ブスウ」と鈍い音がして、思わず呻くような痛みとショックを感じました。反射的に、吾知らず刃を引き抜きそうになっていましたが、辛うじてこらえることができました。氣をとり直して、刃を見ますと、完全にハンカチの処まで突き刺さり、まだ血は出ていません。一息ついて、右手に力をこめ、引き廻そうとしましたが、刃は容易に動きません。その頃になって漸く血が刃の周りに滲み出してきましたが、痛みは余り感じませんでした。

これでは駄目、と思い、手をお腹に割いて力一杯、引きました。途端に鋭い痛みを感じ五分程も一気に刃が右へ移動しました。「ゾリッ」という様な音がしたように思います。傷口が、みるみる内に血を吐き出しました。ナイフは、非常によく切れるものでしたが、一気に思う存分切り廻すなどということは、切腹の場合、とても出来ないことだと思いました。

それでも、苦勞して相当の長さを切りましたが、切れる瞬間毎に新しい痛みを感じました。刃を引いている時は、見たところひきつれたような傷口から血が流れ出しています。手を止めると、ハジケルように口をあけ

て血で一杯でした。ちよつと力が弛むと、刃が滑って浮き上りそうになるので、押えるのに想像以上の力が要るのを知りました。

正味、十二、三秒もかかって、やっとお臍の近くまで切りましたが、痛みは次第に激しくなる一方で遂に刃を抜いてしまいました。後で測ってみたら、二寸七分で、予定の三寸に及ばなかったのを残念に思います。

刃を抜くとき、傷口からはどんどん出血していましたが、次第にドロドロした感じになってくるのがわかりました。

ひざまずいて腰を浮かせると傷口が大きく開き、血をハジクように黄色い皮下脂肪がはみ出し、その感じはまるで内臓の一部のような気がしました。出血量は正確にはわかりませんが、後でタオルをみると左膝の位置辺りに、さしわたし七寸位、じつとりと血を吸っていましたので、相当量出血したと想像出来ます。切っている間は夢中で傷の大きくなるのを見ていましたが、改めて見ると、その傷の大きさと出血量の多さに、自分の行ったプレイの恐しさに慄然としてしまいました。実際、容易には補えない貴重な血を流してしまつた訳です。しかし、半面、念願を果し得たという満足感を覚えたのも事実です。



第二東映の出現で、邦画界はとくに活況を呈してきた。それだけに勝負を争う必要もあってか、エログロのショッキングな作品が数多く現われてきたことは、映画史上にとって非常に嘆かわしいことといえるだろう。

これまでは、新東宝作品にこの傾向が強かったようだが、最近では第二東映はもとより、大映、松竹までが、その範疇にあるといえるように思う。

まず、大映の最近作から今後の作品をながめてみると、吊り責めシーンの多いのに驚く。

「風雲将棋谷」で、近藤美恵子の女目明しお絹が、さそり屋敷に捕えられ、財宝の在所を示す玉将駒を出せと吊り責めに遭う。両手を後手に高々と吊り上げられ、さそり

道人に責められる訳で、正に吊り上げだったが、スタンドインのようにも見えた。

これよりすごいのが、宇治みさ子の「人肌呪文」のファスト・シーン、腰元お組の吊り責めである。これは最近の傑作だと思える。宇治嬢は、新東宝時代から責められているだけに、表情もうまいものだ。道場で吊り上げられ、弓の折れでビシビシ打たれるのだが、カットも長く迫力があつた。なかなか白状しないので猿ぐつわをされてツツラに詰めこまれ、橋上から隅田川に投げこまれたり引き上げられたりする。本当にこんな責めに遭ったらまいるだろう。脚本が伊藤大輔だけに、やはり凄い。宇治みさ子は本当に一日中、吊るされ、身体にアザが出来たそうだ。

その次に期待できるのが伊藤大輔監督の

血が固まりかけてから、消毒して手当にかかりました。本来なら縫合すべきものでしょうが、勿論自分で出来ることではなし、脂肪層だけだからという奇妙な自信もありましたので、大変無謀なようですが、普通の亜鉛華バンソウ膏で傷口を合わせた上を何カ処も貼り合わせ、その上にガーゼを当てて、更にバンソウ膏で止めました。乱暴な手当なので心配もありましたが、幸い、半月程で殆んど治ってくれました。傷跡が、ややくぼみ気味に二重位いの中に残りましたが、さほど目立つ程でもないので安心しました。その間、当初はやはり多少痛みもありましたが大したこともなく済み、又、心配していた化膿症状も起らなかったことは、本当に幸いでした。

以上の実験で、私自身が感じとったことは大体、次のようなことです。

まず一思いに深く刃を突き立てるといふことは、生やさしいことではなく、相当な覚悟と力が必要だということです。実際に切るといふのは、プレイとはいえないかも知れないと思える程です。

次に皮膚の弾力は相当なもので、余程鋭利な刃物でも、容易には突き立たないということです。自分でやってみて、初めて自分の皮

「切られ与三郎」シナリオによると、淡路恵子のお富が、襦袢と腰巻だけでハリに吊り下げられて責められる。その横で与三郎が三十八カ所斬られるが、これは薩でみせるといふ。コリ性の伊藤監督だけに、淡路恵子もカワイガラレルことだろう。その上お富の行方を白状させるために小女が、やはりハリに吊り下げられて責められたり、与三郎の義妹、お金が猿ぐつわで縛られたりする。これは、テレビスターの富士真奈美が扮するそうだが、彼女も、松竹の「大盗小盗」で泉京子とハリツケになったり、イジメられる女優の一人らしい。「弁天小僧」「女と海賊」などの伊藤作品だけにその完成が待たれる。

この外、「伊賀の密使」では、中年女の艶をみせてきた阿井美千子の、女忍者まぼろしお雪が、浦路京子の姫と一緒に捕えられ、水牢に入れられたり、琵琶湖上で舟の中のハリツケ柱にしばりつけられ、火あぶりにされかけたりする。勿論、助けられるのだが、うまく撮ってほしいものである。まだ他に、「紅とかげ」など、スリルとサスペンスの作品がある。

松竹では、嵯峨三智子の「おさい権三・燃ゆる恋草」の幻想シーンで、二人の男女がハリツケにかかる場面がある。溝口監督の「近松物語」でもハリツケ・シーンがあったが、渡辺監督の演出が楽しみである。松竹は最近現代劇が多いが、今後の時代劇に期待しよう。

東映では、第二東映作品に縛り場面が期待出来そうだ。

「照る日くもる日」で、雪代敬子の女賊白峯おぎんが縛られ、こずかれながら曳かれ行く。原作ではもっと責められるのだが東映作品は微温的だ。また「砂絵呪縛」でも、中里阿津子の露路が捕えられるが、ただしばられているというだけのもの。

「桃太郎侍」で、朝倉みどりが、ハリツケに遭うらしい。前作では木暮実千代のいただけの縛りシーンがあったが、今度の作品ではどうだろうか。

「霧の中の渡り鳥」でも、大川恵子のおとくが、悪者にしばられ、猿ぐつわをしてカゴで運ばれる場面があるが、彼女のしぼられ姿もあまりいただけない。もう少し、演技に力を入れて欲しいものだ。

膚の強靱さに驚きました。しばしば切腹場面の絵などで、短刀を握る右手が腹部から離れているのを見ますが、あれではとても切れないのではないかと思います。

苦痛の点では、深いから必ずしも苦痛が増すとは限らないようです。勿論、筋肉層や、内臓に届く深さでは別でしょうが、私のように脂肪層内だけの場合は、大した苦痛を望めませんでした。傷口を見ると、皮下に二分位の白い弾力性の層があり、この部分を切る場合の鋭い痛さが、苦痛のうちで一番激しかったと思え、皮下脂肪層では、ずっと鈍いずきずきする程度のもだったようです。

出血は、お腹を切るのですから当然ですがあんな大きな傷口に比して、むしろ意外に少いと思われました。これも脂肪層内だけであったからでしょうが、ホトバシリ出る、などということはありませんでした。

それにしても、あんな大きな傷が、あんな簡単で乱暴な手当てだけで、化膿もせずに治ってくれた事は本当に幸運だったと思います。

以上、いろいろ不行届な点もありますが、私の行いました切腹について御報告申し上げます。御批判を承りたく存じます。

創作

晩鐘



三 条 卓 史

作 画

すから、用意をしておいて下さい」

明信は、そういうと、ついと立って廊下に出た。

やがて法衣を纏った明信が看經用の経本を包んだ袱紗を懷に入れながら山門をくぐった。

「別に変ったこともあるまいが、留守を頼みましたよ」

いつもの例で、山門まで見送りに出た以乃を振り返って明信は微かにほえんだ。三十を少し越した長身の僧形が石段にくっきりと黒い影を落していた。

「はい。どうぞお早く」

以乃は、そうこたえたと深く頭を垂れた。造作もなく束ねて引き結んだ髪が、初夏の陽を浴びて、艶々と光っていた。彼女が、再び頭を上げた時には、明信は既にトコ、トコと利休下駄を鳴らしながら、石段を降りていた。

以乃は、明信が三十段の石段をおりつくして、藪の茂みの向こうへ消えるまで、じっと

柿の若葉が、滴るような緑を染めて、窓を覗いている。閑寂な法念寺の午後の一刻である。

経卓に向って、頻りに写経をしていた明信は、静かに筆を擱くと手を叩いた。

庫裡の方から小さな足音が近づいて来て、

以乃が襖の外へひざまずいた。

「お呼びでございましたか、お上人さま」

二十五、六才の、色白の小柄な女で、蒸し暑い時候だというのに、まだ木綿縞のモンペを穿いている。

「これから畑中の大柴さまへ月参りに行きま

山門の前で見送っていた。

以乃がこの法念寺へ来てから、早や一年近くになる。西国巡礼の途中、この村はずれの橋の袂で、急な腹痛で苦しんでいるのを救って呉れた人が、法念寺の檀徒で作兵衛という造り醬油屋の主人であった。以乃は作兵衛の世話で、女中代りのような格好で法念寺へ預って貰うようになった。作兵衛は、以乃の素直な性質を見込んで、明信に妻にしてはどうかと勧めたが、明信は

「まだ修業中の身でございますので」

と、作兵衛の勧めに応じなかった。

——年頃の男と女が、一つ棟の下に起居を共にして居れば、自然と気持も変って来るだろう——

そう考えた作兵衛は、兎も角もと、無理に勧めて以乃を寺に預けてしまった。

明信は、初め大分、迷惑そうであったが、広い境内の掃除から台所まわりの仕事や、濯ぎ物は勿論、今まで明信が一人では持て余し気味であった寺領の畑作まで、まめまめしく働く彼女の実意に、近頃では気持も打解けて、隔意なく接することが出来るようになっていた。

以乃はまた、彼女の今まで生きて来た世の中の泥沼のような醜さに較べて、清閑な寺で何の汚辱もなく行い澄ましている明信の、透きとおるような清明な日常の生活に対して、畏敬の念を感じていた。彼女を明信の妻に、という言葉は、彼女も作兵衛から聞いてはいしたが、それは水晶のような明信を、却って汚すようで、空怖ろしい気持になるのであった。——女中でも、飯炊き女でもいい。こうした清閑な環境で、高潔な明信に仕えていることで、自分はもう幸福だ——

以乃は今も、そう考えながら、山門から庫裡に引き返すと、雑巾バケツを持って本堂の拭き掃除の支度をした。

以乃が本堂の掃除を済ませて、位牌堂の廊下を拭いていると、急にドスンと何物かに突き当たった。

「あっ」

と、思わず声を上げて尻餅をついた彼女の前に、大分くたぶれた紺サージのズボンを穿いた男が立っていた。

「以乃さん、相変らず精が出るんだなア」

男は、せせら笑いながら、以乃の前へしゃがんだ。

この男は浄信といって明信の弟であるが、放蕩に身を持ち崩して檀徒から寺を逐い出され、町のてきやの仲間に入っていた。

以乃がこの寺に世話になって間もなくの頃一度、明信の処へ訪ねて来て、無心を断わられたことがあるので、以乃も顔だけは知っていた。年の若いに似ず、どこか暗い翳のある顔立ち、日やけた赤黴い腕など、彼女には極楽に鬼が現われたように思われて、急には声も出なかった。

「何だい、馬鹿に脅えてるじゃアねえか、ええ以乃さん。何も怖れることはねえ……今日は兄貴は留守なんだろう？。知って来たんだぜ。大柴の命日は月の二十日さ。あそこの若後家は兄貴とちよぼちよぼだからな。今ごろはしっぽりとやってるに違えねえ」

浄信は口元に卑しい笑いを泛べて吐き出すようにいった。

「あの、今日はお上人さまが、お留守ですの……」

以乃は、気味悪そうに、声を震わせながら膝頭で少しづつ後退りした。

「分っているさ。今日はな、以乃さん、お前さんに少々用事があったて来たんだよ。え、何もそう恐がらなくなったって、取って食いもど

うもしやしねえ。そうれ、いつまでもそこに坐っていないで、立ちなつてことよ」

そういうながら、ずいと手を伸ばすと、素早く以乃の襟髪を掴んだ。

「あれ、何をなさいます。はなして……」

以乃が驚いて、思わず両手を淨信の腕にかけて引き放そうと身を反らすのを

「はい、ちよつと本堂まで行って貰おうぜ。

さつさと歩きな」

という声と同時に、ズボンの膝頭で、ドンと突いた。

× × ×

畑中の大柴家の奥まった座敷では、今しも看經かんきやうを終った明信が、亡くなった当主、圭一郎の妻、奈美の勧める茶を喫していた。縁先から続く庭には、庭石が程よく配置されて、霧島つつじが今を盛りと咲いている。

「ご当主は、こよのう霧島つつじを愛でておいででしたなア」

明信は萩焼の茶碗をそつと置くと、故人を偲ぶように、しみじみとした口調でいった。

「はい。わざわざ本場から取り寄せまして、あのように沢山植えました。そして手入れも一切、自分でなさって、毎年、花の咲くのを楽しみにしておりましたが……」

奈美はいいかけて、ふっと口を閉じた。有情の人は非情の花に過ぎし日の思いを馳せて忘れがたい感慨に浸っているようである。明信より一つ二つ上かと思われる奈美の、春信の絵にあるような整った顔立ち。薄鼠色のセールの着物をすっきりと着こなした地味な服装の中に、帯止めの翡翠のみどり色が、くつきりと浮き上っていた。

築山を背にした泉水に、ポチャンと音がして鯉が跳ねた。其処から、滑らかな池の面に波紋がゆるやかに拡がっていった。

「まだ当主が幼ない頃でした。丁度、今頃の氣候でしたらうか。寺に遊びに来られましてな。あの池の鯉を取ろうと、よく拙僧を誘ったものでした。」

明信は、静かに眼を細めるようにして、當時を述懐した。

「殺生禁断の坊主の卵が、法衣の裾をからげて、手綱で池の魚を追っかけ廻したのです。

故人の圭一郎さんも腕白盛りで——俗人のする事が出来ないような者は、碌な坊主になれやせん。そら、そちらの藻の中を掬って見ろ——などとふざけては、後で二人共、先主の明戒上人にさんざん油を絞られました」

「ほんとうに、お上人様と主人とは仲の良い

お友達だったんでございますね」

「ええ、二人共、本堂の須弥壇の前へ坐らせられましたな。生物憐憫、因果応報のお説教を聞かされたものです」

「ははは、幼ない童わらわが二人、畏まって御老僧のお話を聞いている姿が、眼に見えるようでございますね」

奈美夫人は、細く白い手を口に当てて、あでやかに微笑んだ。

其処へ、女中のたきが黒塗りの本膳に酒肴を載せて運んで来た。

「さ、お上人様。どうぞ、お一つ」

夫人はたきが去ると、盆の上の銚子を取って明信を促した。

「夫人、僧に酒盃は禁物です」

と明信が辞退するのを

「何を仰せられます。今、お上人様が、みずから仰言つたではございませんか。——俗人のする事が出来ないような者は、碌な何とかになれない——と。ここで、わたしも改めてお上人様にそう申し上げようございますわ」

と、優しく睨んだ。その奈美の眼の奥に、ふっと泛んで、一瞬にして消えた妖しい翳に明信は気がつかなかった。

「さあ、どうか、ごゆっくりお過ごし下さいま

せな。今日は、あとで是非、お上人様に見て戴きたいものがございますの」
 「ほほう、それはどんなもの」
 「とても珍らしい、お上人様の驚かれるような……」

「ご当主の愛蔵されている書画骨董の類いでしょうか」

「いいえ……あとでお見せいたしますわ。さあ、どうぞおあけになって」

そういうながら奈美夫人は、一膝、明信の傍へすり寄って、捧げるように両手で銚子を傾けた。

「ご酒ではございません。これは延命長寿の般若湯とか申すものだそうで」

「これはご夫人、一本参りましたな」

明信は夫人の勧め上手に、早や顔を赧くしていた。

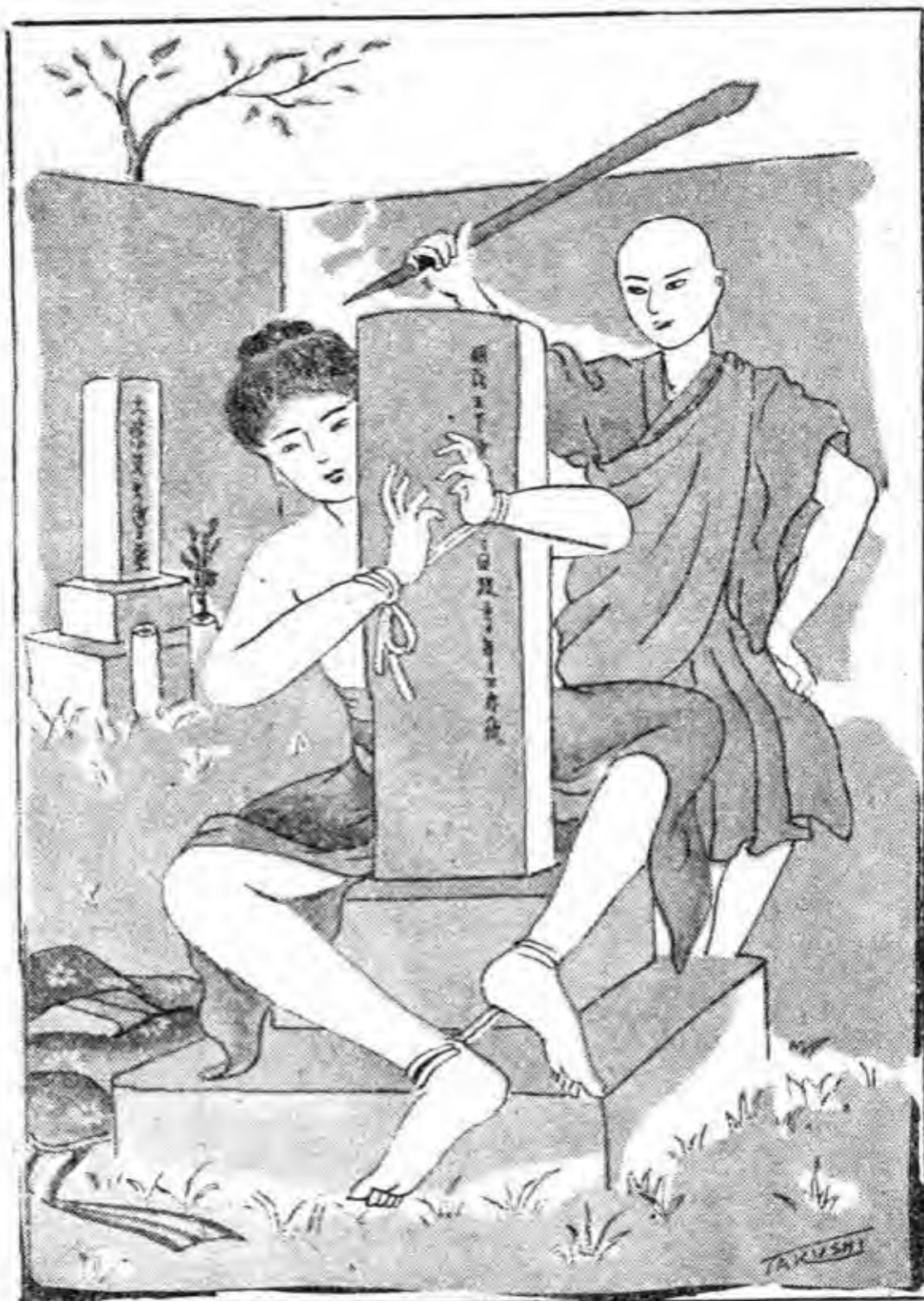
× × ×

その頃、法念寺の本堂では――。

「おい以乃さん、法念寺伝来の摩利支天像はどこにあるんだ。早くいわないか」

浄信は薄暗い本堂の中に立って焦立たしそうに叫んだ。

寺宝ともいうべき、瑪瑙を刻んだ小さい仏像を持ち出して、金に換えようという魂胆で



ある。

「兄貴と一緒に暮していて、お前さんがそれを知らない筈はないんだ。兄貴に対して、いらぬ義理立てをしゃがると、結局、苦しい目を見るだけだぜ。どうだ。まだいわないか」
 浄信は、そういうと、経机の上に置いてあ

る如意棒を手に取った。

「ああ、浄信さん。ど、どうかひどい事だけはなさらないで」

四方を閉めきった本堂に燈明をつけて、そのゆら／＼と揺らぐ光に四隅の円柱がくつきり浮き上って見える。時代を経て、くすんだ

錦の法幢^{ほうとう}を垂れた一方の柱を背に、以乃がモンペ姿のままで縛られている。緋の上着の肩口が大きく綻び、衿元がはだけて、白い胸乳が露わになっているのは、先程、浄信が縛りつける時、懸命に抵抗した痕跡である。

「わたしは、そんな大切な仏像のしまつてある場所なぞ存じません。お上人さまは、そうした事を平素から口にはなさいませんもの」

事実、以乃はその仏像の所在を知らなかった。三度の食事を運ぶ外は、臥床の上げ下ろしから、居間の掃除まで、明信が自分の手で始末していた。——これは僧の修業です———
 そういわれると、どうかして尽して上げたい気持はあっても、それ以上には近よれない目に見えない障壁があつて、以乃は明信に対しては、心の中でのみ畏敬と思慕の念を燃やしていたに過ぎなかった。

「ふん、どうしてもいわなきや、喋^{しゃ}べらなくッたつていいんだ。たいして広い寺じゃアない。探すに骨は折れめえけどもよ。以乃さん。お前さんの兄貴を庇おうとする気持が気に入らねえ」

浄信は、以乃が真剣に明信を庇おうとする気持を知って、初めは仏像を手に入れるだけの目的でやって来たのであったが、眼の前の

本堂の太い丸柱に、人柱のようにまつわりついている若い女体を見ているうちに、次第に嗜虐の昂^{おどろ}ぶりが心の中に燃え上がっていた。

——この女め、兄貴と二人だけの寺の明け暮れに、良い加減、女房気取りになってやがるに違いない——。

浄信は、自分の堕ちていった倫落の体験から、そうした勝手な憶測をしながら、むっちりとした肌から微かに漂ってくる女の体臭を嗅ぐように、以乃の顔を覗き込んだ。

「あれッ、浄信さん、何をなさるんです」

「大きな声を出すんじゃアねえ」

浄信は如意棒で、以乃の身体を小突き廻した。無惨に剥がれた緋の上着と、じっとり汗ばんだモンペを透して、人の拳のような首を持った如意棒が、女体の上に躍った。

蠟燭の火が大きく二、三度ゆらいで、消滅寸前のまたたきを見せた。

「ちえッ」

と舌打ちした浄信は、手にしていた如意棒を、以乃のモンペの紐の下へ脇差のように差し込むと、燭台の方へ歩いて行った。

先程からの如意棒の打撃^{うちげ}に、ぐったりとなつた以乃は、半ば失神したような目で、浄信

の後姿を逐っていた。

× × ×

「ほら、ここが暗室でございますよ」

黒い二重のカーテンを開いて、明信が入ると、小さい間仕切りの中に現像皿を並べた卓や、薬品を置いた棚がしつらえてあつて、微かな錯酸の匂いが漂っている。

「何だかよく分りませんが、此処で写真を写されたのですか」

「いいえ、ここは写真を現像する処です。主人は町へ出るたびに色々な写真道具を買い込んで来ては、熱心に写しました」

「未だ町に写真屋が出来なかつた頃からですよ」

「ええ、新らしがり屋で、その上、凝り性だったものですから、わたしも、さんざ苦勞をさせられました」

「ご夫人は苦勞と仰言いまして、別に……」

「これをご覧下さいませ」

奈美夫人は、そういうと袂から小さな鍵^{かぎ}を取り出し、壁面に作り付けてある戸棚の、片開きの扉をスッと開いた。

その戸棚の中には皮装の、またビロード張りのアルバムが、黄、紅、色とりどりの背を

揃えて、ぎっしりと詰まっている。

「ほほう」

と明信が感謝している間に、夫人は中から臘脂の色も濃い一冊を抜き出すと、さっと、その一頁を抜いて明信の前へ差し出した。明信は何気なく夫人の手からそのアルバムを受けようとして手を差し出したが、思わず

「呀ッ、これは」

と小さく叫んで、差し出した手を引ッ込めた。

一頁一枚の大きで貼られている写真は、若い女の白い素肌に、縛めの綱がギリ／＼と喰い込んでいる妖しいポーズのものであった。

「お驚きになりましたか？」

夫人は、明信の顔を窺うようにして、そういうと、続いて次の頁を開けた。

その頁も、また次の頁も、縛めに悶える女性の凄艶さを巧みに捉えた写真で埋められていた。無論、モデルは奈美夫人である。

「このアルバムののは、比較的、初期のものなのです。主人は最初——女体の真の美しさは、肉体の自由を奪われて、その不自由さから脱れようと悶えている処にあるのだ——そう申しまして、わたしをその実験台にいたしました。初めのうちは何だか怖いような気がして

随分、主人に逆らったものですけれど、この隣りの特別に造った二人きりの部屋でしよう。どんなに拒んでも逆らっても、しまいは説き落されたり捻じ伏せられたりして、主人の思う通りの姿にされてしまいました。それは夫婦の間柄ですもの。強盗に襲われたりした様な感じではございせんけれど……度重なって参りますと、ただ縛って写すというだけでは満足しなくなりまして……」

夫人はそういうながら、その戸棚の下の釘を指で押した。

すると、その戸棚の取り付けてある壁面が、そのままスツと向うへ開いて、一面に絨緞を敷いた六畳程の部屋が見えた。

夫人はそのまま、その部屋に入る。明信も面羞ゆげな顔をしながら後に続いた。

部屋の一角に組立てのカメラが黒い布を被って、ガッチリとした三脚の上に載っている。

片一方の隅には、ピンクの紗のカーテンを通して木製や金属製の寝台や椅子など色々の家具が置かれてある。この部屋には窓がなく、

出入口も今入った処が一カ所の様である。

「この部屋と暗室は、倉の内部を改造したもので、外部からは、この旧い邸に、こうした部屋があることは分りません。そのカーテン

の向うにある色んな道具も、全部、主人が考案して部分的に町のあちこちで作らせたもので、その用途については主人と、わたし以外の人は誰も知りません。……そしてこの部屋で、あれらの道具によって、わたしは完全に拘束され、主人の嗜虐の虜になりました。竹の鞭、革の鞭、竹刀、洋杖（ステッキ）などは普通の責め道具で、線香、蠟燭、マッチ、鉛筆、ペン等の小さい物まで、わたしの五体を責めました。……その当時は、あんなひどい事を、と考えた事もございましたが、それもこれも、今となっては全く夢の日の出来事で、今残っているのは、被虐の沼に置き去りにされて身悶えしている哀れな女と、其処らの無心な責め道具類と、懐かしい思い出を蘇えらせるアルバムだけになりました」

昼か夜かも分らない窓のない部屋で、明信は、夫人の言葉を聞きながら、兎もすれば錯乱しそうになる頭を整えようと必死になっていた。

奈美夫人は、フいと立って、ピンクのカーテンの向うから、一脚の肘掛椅子を曳いて来た。理髪屋にある椅子に似たものであるが、もっと軽快でピカピカとニッケルのパイプが光っている。

夫人は自分からその椅子に取付けてあるコードを部屋の一隅の差込口に接続すると、椅子の上に腰をおろした。そして両腕を軽く肘掛の上に載せると、明信に向って

「済みませんが、其処の壁にある把手を右へ廻して下さいませんか」

と、一寸媚びるような目付でいった。

明信は、何が何だか分らぬまま、夫人のいうように

「こうですか」

といって小さな把手を右へ捻った。

——ジ——ッ——と椅子は電流を伝えて微かな音を立て、異様な動きを始めた。

夫人が腕を載せている肘掛けの、手首の処の下部から肘巾の薄い銀板が弧を描いて伸びて彼女の手首に巻き付いた。と見ると同時に、両の足首も斜に伸びた脚台に巻き止められた。やがて両の肘掛が徐々に左右に開き、左右の腕を完全に水平の位置に引き上げた。濃い紺地に白く渦を染め抜いた単衣の袖が、奴隸のように明信の前に拡がった。次には足台が真中から縦に二つに割れて開いた。

この奇怪な電気椅子は自動的に一人の女を拘束したが、更に椅子の背部から、先端が内側に曲った巾広の鈎が伸びて夫人の胸の前で

交錯したが、その鈎先は夫人の着物の前衿を啜えて徐々に後退した。

——プツプツ——と小さな音と同時に帯が解けて、椅子の下へばらりと落ちた。この帯はたいこの中でスナップで止めるようになっていた特殊なものであった。

明信は思わず自分の眼を覆いたい衝動に駆られた。彼に命じて自分からこの椅子に乗った奈美夫人は、眼元に妖しい光を漂わせながら、

「お上人さま、その扉の裏側にいろんな鞭が掛けてありますわ。それで、主人の代りに、このわたしを責めて下さいまし」といった。小さいが、思いつめ、思い余った声である。

「その把手を更に右へ廻すと、この椅子は横転し、更に逆転します。あられもない逆さはりつけの格好で、身体中の血が頭に下って、眼の玉が飛び出すかと思われる様な状態で鞭を受けた事も幾度かございますわ……ああ、わたしの心が疼く……どうかお上人様、わたしの体に慈悲の鞭をお与下さい」

夫人は、もう見得も外聞も忘れていた。尤も亡くなった圭一郎と莫逆の友であった明信なればこそ、こうした行動が出来たのかも知

れなかった。

夫人の着物は既に非常の鈎先によって背部に掻き開かれ、艶めかしい湯文字の紅が、襷を作って僅かに彼女の下半身を覆っていた。むっちりとした盛上がった胸の隆起が、明るい電灯に照らされて、滑らかな真珠色の肌に、うす蒼い静脈を浮かせて息づいている。

明信は、頭がくらく／＼とするのを覚えた。

× × ×

法然寺では、淨信が以乃を本堂の柱に縛りつけたまま、瑪瑙の摩利支天像を求めて、明信の居間を物色したが、何処へ蔵ってあるのか、どこを探してもそれらしいものがないので、

「くそッ」

と舌打ちをしながら、再び本堂へ引返して来た。

「おい以乃さん、うまく隠したもんだな」

と、以乃の額へ手を当てて、白い顔を憎々し気に覗き込んだ。

「わたしは、何も、存じません」

「ふん、そうかも知れないな。お前さんは実に貞節だよ。だがな、俺もこうやって、折角来たんだから素手では帰られねえ——何か手土産を貰って行きたいンだが、黙って持って

行つては後味は悪いから、お前さんに立会つて貰うとしようぜ」

浄信は、そういうながら以乃を一旦、柱から解き、今度はモンペの紐の端を使って彼女の両手首を腰の後に括りつけた。

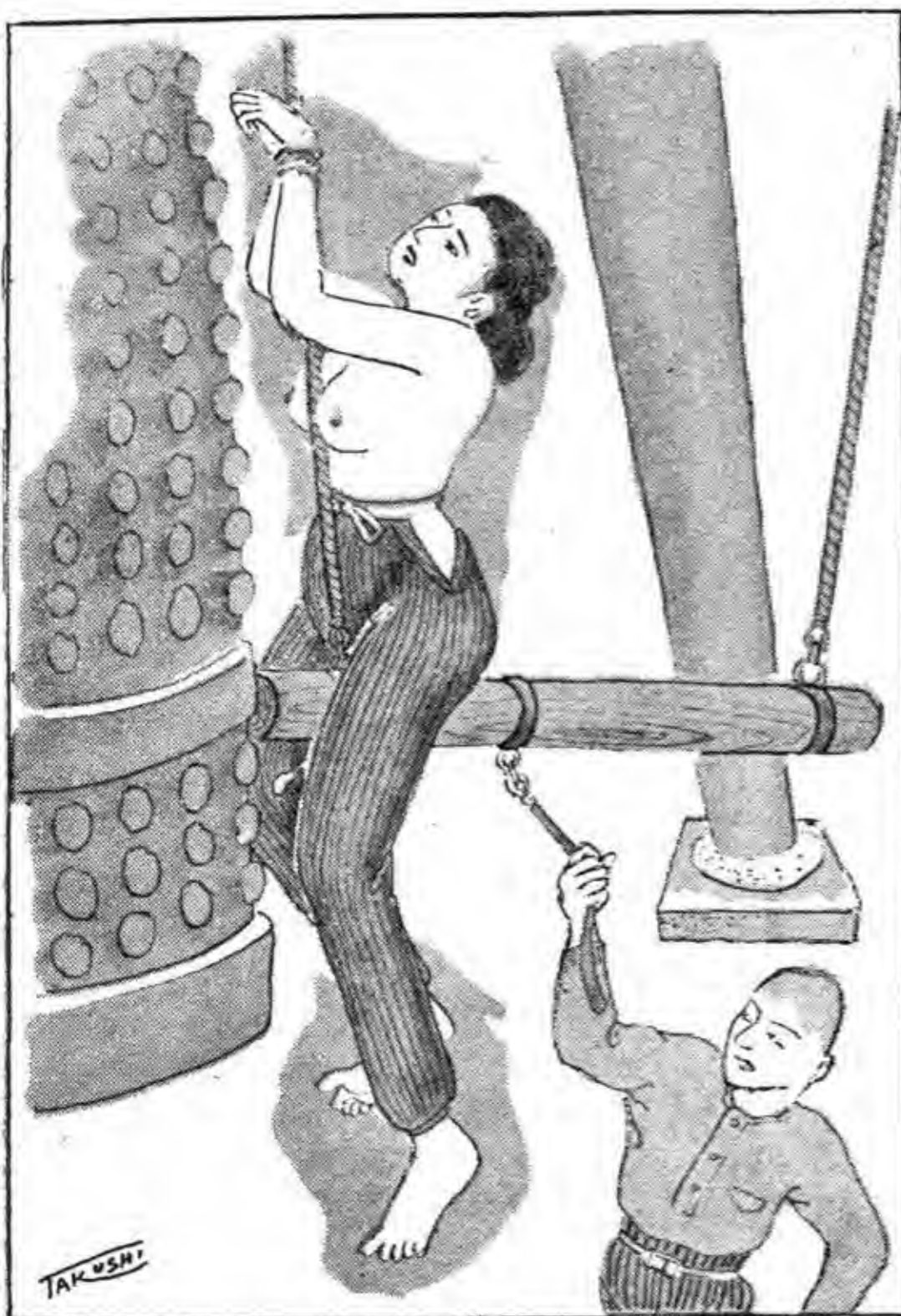
「この手を、解いて下さいまし。わたしは逃げは致しません」

と、切なげに眼を上げて哀願するのを

「ふっふっ、誰かに見られては恥かしいとでもいうのかい……いらぬ心配しないがいい。

この麦秋の忙がしい時に、こんな寺になんか誰も訪ねて来はせんさ。さア兄貴の部屋まで歩いた歩いた」

浄信は、まるで猿まわしが小猿を追ひ立て



るようにして、以乃を後ろから小突いた。

廊下の途中まで来ると、其処に置いてあつた雑巾バケツを取り上げて

「はい、これを持って行かなくちゃ、仕事が付かないだろう」

と、からかうようにいいながら、半分ばかり水の入っている小さいバケツを、後手のまま以乃の掌に握らせた。以乃は、その水をこぼすまいとして、ぐっと上体を後ろに反らせた。アクロバットを見るような、女の変った身のこなしに、浄信は思わず眼を細めた。

庭から風に乗って来た黄色い蝶が一匹、ひらひらと以乃のはだけた胸のあたりを飛んで位牌堂の底のほうへ消えていった。

やがて、明信の居間へ連れ込まれた以乃は、庫裡の横から持って来た踏台の上に、馬に乗ったような形に追い上げられた。

「なア以乃さん、兄貴が帰ったら、当座の小遣いがわりに、これを借りて行つたと伝えて呉れよ」

そういうながら、浄信は、地袋の中から、桐の箱に入つた古伊部焼の香炉を取り出すと「大して金にもなるまいが、せめて今日の足賃にはなるだろう」

と、独り言をいいながら、再び鬱金木綿に

包んで箱に納めた。

「浄信さま、わたしを此処から降して下さいませな。やがて暮れの鐘を撞く時刻でございます」

以乃は焦々していた。雨の日も風の日も、朝夕に撞く寺の鐘は、以乃の大切な仕事になっていた。浄信もこの寺を出るまでは、矢張りその鐘を撞いていたのである。

「おや、もうそんな時刻かい」

浄信は、居間の柱にかかっている古風な八角時計を振り返ると

「久し振りだ。今日は俺が撞いてやろう」といった。

「いいえ、それは不可ませぬ。浄信さまとわたしとは、撞く鐘の音が違います。わたしが参りますから、この手を弛めて……」

踏台の上で、必死に藻掻く以乃を見て、浄信には咄嗟に或る考えが浮んだ。

「ふん、よし、お前さんを鐘楼へ連れて行ってやろう」

そういつて思わずニヤリと北叟笑んだ。

× × ×

早や暮れ近く――。

此処は丘の凹みにある大柴家の墓所である。四方に高い石塀を囲らした、頑丈な鉄の

大扉の内側には、豪壮な石塔が二基、三基、四基と並んで由緒ある家柄を物語っている。

「先刻は、あんな羞かしい姿をお目にかけました――」

閼伽桶を手にした奈美夫人は、明信の前で深く頭を下げた。

「いやいや、夫人のお気持はよく判ります。さればこそ、こうした供養に参ったのではありませんか」

「ええ、そうでしたわ」

夫人は携えて来た花と供物を、圭一郎の墓前に捧げた。明信は、瀬戸の島から石材を取り寄せて造ったという、青鼠色に艶々と光る花崗岩の真新しい墓石の傍で、珠数をつまぐりながら読経した。

一しきり夕の風が吹いて、さらさらと青い楓の梢を鳴らして過ぎると、あとは前にも増して静まり返った。

「さて――」

読経を終え、一わたりの供養が終ると、

「ご夫人、その腰紐を解いてお貸しなさい」と、厳やかな口調でいった。

夫人は、閼伽桶を傍に置くと、明信にいわれるままに腰紐を解いた。帯も解いた。明信は夫人を促がして圭一郎の墓石を抱かせ墓碑

の後側で白魚のような両手を縛り合わせた。

「わたし以外に誰も居らぬ。此処であなたの望みを叶えてあげましょう。これならば、亡くなった方も承服なさる事であろう」

「はい、ああ……」

冷たい石の触感が統のような夫人の素肌を透し、直角な石の角が柔い肉に喰い込んだ。

明信は、傍らの塔婆を引き抜くと

「うむッ」

と気合いを入れて夫人の尻を打った。橙色の法衣の袂が、夕闇に翻った。

「はあッ……」

と夫人は声を上げて石塔にしがみついた。台坐を抱いた膝頭が、赤い湯文字からこぼれて、白くくっきりと泛び上った。

半狂乱になった夫人が叫ぶと、明信はその長い塔婆を、墓碑と夫人の胸の間に挿し入れて、船頭が櫓を漕ぐように、ぐりぐりと捏ね廻した。

折から、木々の梢を亘って、法念寺の暮れの鐘の音が――ゴォー――とゆるく、長く尾を曳いて流れるように聞えて来た。

「ああ、以乃が鐘を撞いている……」

そう思った途端、明信の腕に一段と力が加わった。

巨大な石の墓標を抱えて、悦庵に悶える美女が、人魚のように身をくねらせた。

丁度その時、法念寺の鐘楼では――

「浄信さん、やめて、あッ、もう」

と、丸い撞木に跨がされた以乃が、哀しい

声を上げていた。浄信は

「お前さんを撞木にして鐘をついてやる」

と、以乃を鐘楼に連れて来て、撞木の上へ

押し上げると、両手を撞木の綱へ縛って転落

しないようにし、撞木を跨いだ両足をモンペ

の裾紐で一つに縛って、その足首を掴んで大きく振りつけた。

以乃は、眼の下の浄信に強く両脚を引張ら

れ、身体を裂かれるような思いに、髪を振り

乱して身悶えしたが、その身体は容赦なく前

後に次第に大きく揺られ、鐘に鈍込んだ「五

穀豊穰」の文字が、急に眼の中に飛び込んで

来たかと思われた瞬間

「ぐわーん」と鐘が大きく鳴って、彼女の悲

鳴を吹き消してしまった。

――撞く鐘は、まだあと五ツ――ああ、明信さま――

堪えがたい衝撃に身を苛まれながら、必死

に想うその明信は、夕闇の大柴の墓地で、檜

の塔婆の折れるほど、悦庵に狂う奈美夫人の

艶めかしい姿を責めていた。

村の人々には、平穩の一日の終りを告げる

かのような鐘の音が、黄昏の野づらを流れ、

遙かの山にこだまして、夕霧が次第にその濃

さを増していった。

終

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判 (6×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚 八〇円

五組五枚 三〇〇円

十組十枚 五五〇円

二十組二十枚 一〇〇〇円

三十組三十枚 一四〇〇円

四十組四十枚 一七五〇円

五十組五十枚 二〇〇〇円

Y1 全裸荷造縛しぼり (大塚啓子)

Y2 乱れ黒髪裸見本 (大塚啓子)

Y3 観念した胡坐 (大塚啓子)

Y4 見事な飾り物 (大塚啓子)

Y5 浴室股間縛り (大塚啓子)

Y6 麗しの緊縛裸像 (愛川悦子)

Y7 逆十字後手縛

Y8 裸身の捕われ人

Y9 逆エビ後手足吊り

Y10 全裸ねのの縛り

Y11 なまめかしき緊縛

Y12 全裸フットンむし

Y13 蒲団裏側またぎ

Y14 初々しき裸全身像

Y15 ヌード股間しぼり

Y16 全裸脚股間縛

Y17 セーラー後手吊り

Y18 庭園ヌード縛り

Y19 全裸全身自慢

Y20 豊満双丘くらべ

Y21 追いつめられた裸女

Y22 退ましきヒップ

Y23 大の字晒し

Y24 縛り正面正坐

Y25 胸のポリウム自慢

Y26 麗人受難の巻

Y27 もつこれで許して

Y28 むしられたスロース

Y29 全裸縛りの全身

Y30 鎖座する縛り女神

Y31 囚女後手柱縛り

Y32 全裸強烈股間縛

Y33 ベッド縛りのポーズ

Y34 開股一番一直線

Y35 縛り腰巻色模様

Y36 亀甲股間縛正面

Y37 全裸椅子またぎ

Y38 妖艶闊のしぼり

Y39 椅子またぎ後手

Y40 強列第手首縛

Y41 ハタカ縛り人形

Y42 濃艶ハタカ縛り

Y43 あられもなき開股

Y44 全裸変形股間正面

Y45 後手立木吊り

Y46 全裸後手壁ハリツケ

Y47 全裸寝台離恥責め

Y48 振袖令嬢後手責め

Y49 長襦袢後手しぼり

Y50 ワンピース縛り

Y51 手吊り裸身の乱舞

Y52 柱縛り観念の囃

Y53 不行儀姿態の美

Y54 カメラに晒す全裸

Y55 緊縛女体の開陳

Y56 膨隆突出した臀部

Y57 前手錠全裸像

Y58 股間縛開股の絵

Y59 聖壇のさらし者

Y60 エビ責めの表情

(絹川文代)

(絹川文代)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)